転生したと思ったらペルソナ

はいんちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したと思ったらペルソナ

【Nコード】

N0597Z

【作者名】

はいんちゃん

【あらすじ】

転生したけど神様はいなかった。

許さんぞ神イイ！！（前書き）

俺は本当に駄目な奴だ

許さんぞ神イイ！！

「はっ！！」

何度この身の丈ほどの大剣をふるっただろうか。

斬るのではなく叩きつぶす。そんな剣技も何も無い不粋な剣。人ではない何かを打倒する為の剣。

剣を振るうごとに消滅していく化物。

この剣は目の前の化物を殺す為だけに作ったものだ。

この体は目の前の化物を殺す為だけに造られたものだ。

「温い温い温い！！さっき入った風呂よりぬるぬるだっつーの！！」

ただ力任せに振り回すと、重量と勢いも相まってヘドロのような化物の身体は容易く二つに開かれた。

生ぬるい液体が飛び散り、頬に触れる。頬を拭くと袖が真っ黒に染まる……後で洗濯しよう。

すると化物からの反撃。

俺はそれを避け、受け流し、防御する。

一歩間違えば致命傷を負うかもしれない。

だからと言って、一歩も退く気は無い。

死に近い感覚。非日常なう。

そんな興奮が、アドレナリンが脳内を支配する。

だからだろうか、死に触れてみたいと思ってしまうのは。

別に死にたいわけではない。

だが死に近い体験をしてみたい。

死と言う非日常に触れてみたい。

本気で思わなくとも、心の片隅にひっそりと抱えている思い。
死んだ後、自分はどうなるのだろうかと言うちよつとした興味。

……とまあ、それっぽいことをグダグダと言ってみただけ。

とりあえず、俺は1度死んだ。

……嘘じゃない、だから石を投げないでください。

先述したとおり、死は人間であれば誰しもが「1度は」経験するものだ。

これを経験する前は、「誰しもが必ず経験するものだ」と思っていたのだが。

俺の最初の「最期」はなんのこっちゃない、交通事故。

そして目を覚ましたら、真っ白な部屋……病室だった。
最初は助かった？と思ったのだがどうにもおかしい。

俺の手足が短くてそれに動揺していた所、見知らぬおねーさんが俺を抱き上げたのだ。

それを見て瞬時に「成程な」と思った。

俺は所謂転生を体験した、と言う事だ。

つつても神様にも会ってないし便利なチートだつてもらっちゃいない。

便利な主人公補正だつてないから母さんと思っていた人もあっさり病死。

父さんと思っていた人も、愛する者の死に耐えきれなかったのかあっさり俺を捨ててどこかへ蒸発した。

そんな軽く壮絶な人生の先にたどりついたのが、とある研究所。

どうやら捨て子を集めて人体実験を行っているらしい。

ペルソナの人工的開発。

なんか俺は幸か不幸かペルソナの適正が合った。

だからだろうか、シャドウに対抗する『身体』造りをする事になったのは。

3 食流動体の何かだったし訓練以外は無色透明な薬品を打ちこまれる日々だったり。

酷い時は体を削って（物理的に）何かを埋め込まれたり。

他の面々も大して変わらないような事をされていたようだが。

ていうか普通人体実験なんてばれたらヤバいし、中にはその事実を世に広めることでそれを止めようとする人も居るだろう。

……そう思っていたのだが、相変わらず実験の日々。バックについていた桐条グループが何もかもを握りつぶしていたようだ。

どうやらお偉いさんがこのペルソナとシャドウと言う物に魅せられたらしい。

ははぁん。

転生した理由は分からないが、神と言う物が居たのならあれか。俺に恨みでもあるんだろうな。

でも俺からしたらそんなこと知ったこっちゃないし、もし仮に会う事があればどんな神でもぶん殴ってやろう。

……嗚呼、愛しい程に憎い神様仏様。いつかこの手で引き裂いてやる。

そんな幻想に近い妄想を糧になんとかここまで生きてきた。

中には拷問のような実験を経て精神に異常をきたしたり、純粋に薬品に対する拒絶反応で肉体的に死んだりする奴も居る中で、それでも俺は何か生き残る事が出来た。ひよっとしたら主人公補正かもしれない、なんてな。

心は耐えきつても肉体的に死んだら意味無いもんな。まあ薬のせいか髪の毛が黒からくすんだ銀色みたいな鉛色みたいな感じに変色しちゃったけど。

そうまでして得た力と、失ったモノ。

戦い無しにはいられない。

なんつーか、ちよつとしたバトルジャンキー戦闘中毒者になっちゃった。

実験サンプルを取る為に何度もシャドウと戦ったその名残だろう。

そして俺をこんな体にしてくれた研究所……桐条グループはとある実験でミスって何もかもを御破算にしてくれた。

あの時『滅びの断片』を目の当たりにした俺だったが……いや、その時の事は一先ずおいておこう。

閑話休題。

タルタロス行こうと思っていたが、珍しく街中にシャドウが大量発生したからタルタロスにはいかなかった。

それと関係あるのか知らないが、今夜は満月だ。こいつらが居なけりゃ風情ある夜を過ごせただろうに。

「ハア……シャドウを感知できるペルソナだったらなー」

そこんところは不便である。実に不便だ。

いつシャドウが襲いかかってくるかわからないし。

基本的にはシャドウの動きは緩慢なので割と物音で気付けるが、

とか思ってたらほら、物音が……。

「……人間？」

なんかデカイシャドウに追われている人間が居た。

しかしその顔は見知らぬ顔で、多分人工ペルソナ使いではなく、たまたま迷い込んだかもしくは『天然』の方だろう。

見た感じ鍛えているように見えるから……恐らく後者だろうか。

「シャドウ相手に不覚とってケツまくって逃げてるってところか」

助けるのはやぶさかではないが。

「正直めんどくさい」

存分に戦ったし日々のストレスはもう「抜いた」。

世の為人の為なんて俺の柄じゃねーし。

「でもまあ……ちょっとつけてみようか」

研究者達が人工って言うていた辺り天然も居るんだろうなと思っ
てはいたのだが、天然モノは初めてだ。

……いや、タルタロスでそれっぽい奴を見かけた事はあるのだが、あの迷宮だ。ちよつと目を離れた隙に見つけられなくなるから困る。すると後ろからもシャドウっぽい物音が聞こえてきたのだが、今現在俺の中での重要度は天然ペルソナ使い（仮称）>シャドウって事なのでそのシャドウからはさつさと逃げて相手せずに尾行を開始することにした。

・・・

「はあ、はあ……」

真田明彦は自身を襲った大型シャドウに戦慄しながらも、喜びをあらわにしていた。

今まで見た中でも一位二位に行く程の強敵。しかし不覚にも不意打ちを受けた事で肋骨が何本か折れてしまったらしく、真田は泣く泣く逃走を已む無くしていた。

気を抜いてしまった戒めだなどと真田は自嘲しながらも、兎に角美鶴達に知らせねばと考え無線で作戦室に連絡を試みたところ、すぐに反応が返ってきた。

『こちら、作戦室だ』

『俺だ！』

『……明彦か？どうした？』

『凄い奴を見つけた！これまで、見たことも無い奴だ！』

……ただ、生憎追われていてな。もうすぐそっちに着くから、一応知らせておく』

返答を待たずに無線を切った。これ以上声を張る余裕も真田には無いらしい。

一人で撒けるのならそうしたかったがこの怪我では無理そうだ。

(……情けないな。一人で影時間の中うろついた揚句、強敵を連れて逃げ帰るとは)

二度とこのようなミスはしないと誓いながら、真田は夜の街を駆ける。

・・・

着かず離れずでシャドウにもペルソナ使いにもばれずに尾行する

ことに成功した。

あのデカイシャドウはそこまで頭が良くないらしい。ペルソナ使いは逃げる事で精いっぱいだったみたいだな。

すると学生寮か何かにペルソナ使いは駆け込み、シャドウは壁伝いに上によじ登って行った。

「はあはん」

どうしようかな。

「うーん……登れない事も無いが……」

ペルソナ使いはどうも意図的にあの建物に逃げ込んだようだし、なにか策の一つでもあるのだろう。

はてさて……どうしたもの……か……!?

「!?!」

何だ……!?!この感覚は!?!

感知能力の無い俺にすらひしひしと伝わる。

言うなれば『死神』の力。10年前にも一度体験したあの感覚。

瞬間、俺は反射的に足に力を込め跳躍していた。

「はっはア!神様ってのは存在するモンだなア!」

建物の中腹に差しかかったところで窓の縁を掴み、腕の力だけで更に宙を舞う。

待ってる愛しい死神様。死を司る神に死を教えてやる。

それとも、死神は俺に二度目の死を覚えてくれるのか？

そして辿り着いた屋上。しかしそこには俺の思っていた死神は存在しなかった。

真っ白なペルソナ。背に豎琴のようなものを背負っている。

そして大型シャドウは跡形も無く消え失せており、地上で感じた死神の力も感じられなくなっていた。

「……だ、誰？」

なんかカーディガンを着た女の子がこっちを見ている。

後先程見たペルソナ使い（仮称）とは別の男がペルソナを召喚している。

成程な、この建物は天然ペルソナ使いのすくつ（なぜかへんかんできない）か！

そんで何？雑魚が二匹？大型シャドウもいなければ死神も居ない。何だこれは、馬鹿にしてんのか？

「んだよ面白そうだから着いてきたつてのによお……なーんなーんですかこれエエエ！！？」

こうなったら八つ当たりだ。二体のシャドウを一雑ぎに切り裂く。憐れあっけなく二つに分裂したシャドウ達はあっさりと消滅するのだった。

「またつまらぬ物を斬ってしまった……」

「え、えーっと……」

満足げに頷く俺。

状況が飲み込めていない女の子。

ペルソナを消した後意識も失ったらしくその場に倒れ込んだ少年。

……何だ、この状況？

・・・

「何だあいつは……」

「それは有里に言っているのか？それとも外壁から上ってきたと思われる男に言っているのか？」

「両方だ！」

ある一室。

大量の機材が忙しく稼働している中、その中央にあるモニターを見て真田明彦は驚愕した。

何せ自身に重傷を負わせた大型シャドウを、初めてペルソナを召喚したと思われる少年があっさりと撃破したのだから。

更に、学生寮の外壁から突如として現れた男の方は身の丈ほどある大剣を軽く一閃させただけで2体のシャドウを撃破した。

次から次へと変動していく状況に、モニターを見ていた真田はもちろん、その真田に問いを投げかけた桐条美鶴も驚きをあらわにしたり、その場に同伴していた幾月修司も愕然としていた。

「兎に角、屋上へ行くぞ！！」

有里と呼ばれた少年……先程ペルソナを召喚していた少年が倒れた。

恐らく初めて召喚したことによる負荷からだろう。

今すぐ屋上へ行って彼を病院へ連れて行かねばなるまいと、真田と桐条はすぐさま屋上へと急行するのだった。

・・・

「起きて！起きてったらー！！」

凄いい勢いで少年をゆすっている。あ、脅しているとかじゃなくて物理的にな。

むしろそこまで激しく揺さぶると体に毒なんじゃないかな？ここは動かさない方が……。

「あー、何だ？御愁傷さま？」

「もう、そんな事言ってる場合じゃないでしょ！誰だか知らないけど、救急車とか呼んでよ！」

「おーけー落ち着こうか、今は影時間なうだ、そんな事は無理だ」

「でもこのままじゃ有里君は！」

何だこいつ、初対面のくせに遠慮知らずだな。

でも多分これはペルソナを覚醒させた事による副作用みたいなものだろう。

いつ起きるか知らんが死ぬ事は無いさ。うん。

「ホント！？」

「ホントホント、ボクウソツカナイアル」

とか何とかのんきな言葉の応酬をしていたら、さつき俺が尾行していた短髪のスポーツマンな人がバタバタとやってきた。

「無事か!？」

その言葉を言うならシャドウが居た時にここに来るべきだったと思うんだけど、部外者だから何も言わない事にする。

「影時間が明けた後、すぐに病院に連れて行きましょう!」

「大丈夫だ、医者はすぐに手配する」

スポーツマンに続いてクールビューティーな女性が。何だ何だ、話についていけないってばよ。

そんな訳で俺はそそくさと退散しようとしたのだが。

「待ってくれ、少し話をしていかないか？」

そのクールビューティーな女性が話しかけてきた。

しまったなあ、興味本位で着いてきたらこれだもんなあ。

なんか面倒くさそうだ。間違いなく面倒だ。

「僕はジロー・タナカ!もちろん偽名です!趣味はストーキングです!もちろん嘘です!今日も黒い化物に追われていた短髪のおにーちゃんを興味本位でおっかけてたらこんな所にやってきました!これはホント!」

特技は気配を絶つこと！これはデマです！好きな物はリンゴ！嘘じゃないよ！嫌いな物は梨！ホントだよ！さあて問題です、僕は嘘を何回ついたでしょうか！！文脈自体は全て事実ですので深読みしないでいいですよ！おっと良い子はもう寝る時間だからおやすみなさい！！」

「ちょっと待……………！」

「アーアー、キコエナイ。」

「俺は有無を言わず屋上から飛び降りた。」

「「!?」「」」

何か聞こえた気がしたが、知らん！

・・・

「……………何だったんだ」

「……………変わった人でしたね」

こちらの事情を話す前に逃げられてしまった。

真田明彦は新たな戦力を取り逃がしてしまった事に後悔し、岳羽ゆかりは茫然としている。

その一方で、桐条美鶴は何やら思案顔をしていた。

「なあ、明彦。さつき黒い化物に追われていた短髪の男を追いかけていたと言っていたよな？まさか明彦の事が……………？」

「……全く気付かなかった。
いくら俺が怪我をして逃げるのに手一杯だったからと言って周囲にも気を配っていたのは事実だぞ」

「それをかいくぐった上に、あの様子を見る限りでは普通のシャドウは歯牙にもかけないと言った様子だ。

……あの男、かなり強いな」

「あ、そう言えば影時間に関しても知ってる風でしたよ」

意識の無い少年、有里湊を介抱しながら岳羽が真田と桐条の会話に混ざる。

突然倒れた有里に慌てながらも、先程の大剣を持った男との会話をしっかりと把握していたようだ。

「……本当か？」

「はい」

桐条は岳羽の言葉に再度問いかける。

自分たち以外にも影時間の事を知っている人間がいたとは思わなかった、といった表情だ。

確かに、影時間もシャドウも、ましてやペルソナ使いを知る者は滅多に居ない。

しかし、あの反応を見る限りでは厄介事は御免被ると言った様子だろうか。

だが屋上から飛び降りると言うのも人間技とは思えない。

となるとやはりあの男もペルソナを扱える存在だと考えても差支

えないだろう。あの場では使っていなかったが。

「……出来れば、あの彼も仲間に引き入れたいところだな」

桐条の言葉に岳羽は少し眉をひそめながら口を開いた。

「あの、彼「も」って言う表現は有里君も仲間に引き入れるって事ですか？」

「……出来れば、な」

「そう、ですか」

先程の戦いを見ればわかるが、遊びではなく命がかかる。

そのような戦いにホイホイとペルソナに適正があるとはいえ一般人を引き入れようと言うのは如何なものか。

「人の為」という大義名分があるとはいえ、岳羽は桐条の強引さをどこか不審に思っていた。

・・・

「ハア、なんだか面倒な事になりそうだ……あ、腹減った」

我が根城たるやつすいボロアパートへと帰還した俺は、大剣と2丁の拳銃を床に置きベッドへダイブした。

飯は……後でコンビニ行こう。

「天然のペルソナ使い……か……」

探した事も無かったしそもそも考えた事も無かった。

研究者達が自身の作品を誇るように人工のペルソナ使いと連呼していたから薄々天然も居る気がしていた、と言うのはさっき述べた通りなのだ。

居たところでそれがどうしたという話だし、はっきり言ってどうでもよかつたつもりだつたんだがなあ……。

しかしいざ目の前にそれが現れるとついつい着いて行っちゃまった。

「つーか今日は変な日だつたな」

ペルソナ使いに大型シャドウに、そして何より一瞬感じた死神の力。

「ありゃ 一体何だつたんだろ」

思い出されるは、10年前。

火の海に沈む研究所と、それを背景に橋の上で対峙した俺と死神。

俺はあの時、完膚なきまでに敗北を喫した。

後は止めを刺されるのを待つのみとなったはずなのだが、それを救ったのが一体の対シャドウ用兵器。

力尽き薄れゆく意識の傍らで、最後に視界にとらえたのは当時の俺と同年代位に見えた少年だつた。

そして目を覚ますとまた白い部屋で。

今度は転生をしたわけではなく単に生き永らえただけ。

あのとき感じた力を思い出すと、自然と当時の状況が想起されてなんかムカつく。

「まあ何だ、多分あいつらとはまた絡む事になるんだろうし、あいつらの近くにいたら何かわかるかも」

まどろむ意識の中で、飯食ってないと言う事実を思い出すものの睡眠欲に抵抗出来ずにそのまま身を任せる事にするのだった。

許さんぞ神イイ!! (後書き)

ちゃんと完結も出来ないのに次から次へと俺はいつた何をしてい
るのだろうか

DMCのダンテさんのセリフ借りました。武器とかも似たような装
備だけど武器に名前は無いです

さりげなく小さな訂正。

存外に良い人だった(前書き)

とりあえず書きためていた分だけ投下。

存外に良い人だった

・・・

翌朝。

俺は学生靴を取り出して自身の所属する高校……月光館学園へと向かうモノレールに乗っていた。

正直タルタロスに落ちてるお金をねこばすることで生活も出来るので（影時間が無くなる日が来ると思うとゾツとする）学校に通う気はあまりなかったのだが、よくよく考えるとタルタロスはここ月光館学園から出来ている。

となるとこの学生になっておいた方が深夜このあたりをうろついているのも怪しまれにくいだろう。いや、怪しいは怪しいが未だマシってレベルだろうか。ついでに補導されるかもしれないけど。

（今更だが、月光館学園って桐条グループが創設したんだよね……）

よくよく考えると、俺をこんなのにしてくれた奴らが作った学校に通っていると言う事が。

（それに、昨日のペルソナ使い……）

どうにも気になる。

ペルソナ使いと言えば桐条と言う方程式が俺の中で出来てしまっている為、あいつらも桐条にかかわっている気がしてならない。

そしてあれが学生寮だと言う事を考えると……。

（ヤバいな、髪の毛黒く染めてきた方が良かった）

全然気にしてなかった。ここは桐条の手の中なのに。

いや、まああの研究所の連中はまとめてくたばったらしいし多分敵と言うわけでもないんだが、桐条が俺を連れ戻そうとするのなら敵対関係になる事も辞さない。

でも正直めんどくさい。

(あ、でも学生証とかの証明写真も今のまんまだしあれだな、抵抗は無意味だな)

ここに入学する際、偽の経歴を提出したのだがその時の証明写真も今の髪の毛のまんまで通ったからな。校則が緩いのはありがたい。

あれこれと思考しているうちにいつの間にか駅に到着したようだ。

……無駄な抵抗をするのも面倒なので、素直に学校へと足を向けるのだった。

・・・

ここは1-A。俺の所属するクラスである。

飯も食ったし(授業中に)ボーっとしていたのだが、何やら上級生が……見知ったクールビューティーがずかずかと教室に入ってきた。

……やっぱり来た、とは思ったのだが。

「昼休みに失礼する。君が里峰竜児君か？」

「イイエ、僕はタロー・タナカ」

「おや、ジロー・タナカではなかったのか？」

「ニーサンを知ってるのですか？実は十年前から行方をくらませているんです」

「ほほう、君に兄弟はいないと経歴には書いてあったのだが……」

（詰んだ！）

いくらなんでも早すぎる。

そのうちここに来ると思っていたのだが、今日の昼休みに来るとは思わなかった。

それに経歴？そんなのがわかるのはそれこそ桐条の手の者じゃねーと……ってそれこそ桐条の手の者ってことだろ。

「その経歴は敵を欺くための物なんです」

「ほう、入学する為の経歴を詐称するとはな……詳しく話を聞こう、屋上へ行こうか」

「あばばば」

俺の返答を待たずして俺の首根っこを掴み無理やり引つ張るクルビューティー。

閉まりゆくクラスの扉から聞こえてくるのは「何だあいつ美人からの御誘いか？」とか「うらやまけしからん」とかいう怨嗟の声だった。

そしてやって来ました屋上。男女が屋上というシチュだけ見ればリア充になった気分である。

「それで、話ってなんですか？心に決めた人がいるので告白はお断りですよ」

「ふふ、白々しいな……昨日の事についてだ」

「やっぱりか……流石に昨日の行動は軽率すぎたな。

まあ別に隠すような事でもないしいいか。

「それよりも俺はあんたの名前を知りたいんだが？一方的に俺の名前ばっか知られてるのは癪だ。

一応自己紹介しておくが、月光館学園1年の里峰竜児だ」

「おっと、そういえばそうだったな……失礼した、私は桐条美鶴。

「今度の生徒会選挙に生徒会長として出馬するつもりだ、よろしく頼む」

桐条……美鶴……？ってまさかとは思うが……。

「……桐条、鴻悦の……孫？」

「ッ……祖父を、知っているのか……？」

「跡取りは確かに必要だもんな、て事はあのジジイの孫なのだろう。

「やっぱり桐条の手の者……と言うか本人だった。」

「とはいえこいつは桐条鴻悦ではない。

「敵対するか中立の立場をとるかはこのいつの態度次第。」

「しかし桐条鴻悦の孫とは予想以上の大物だった。

「そしてそれが天然のペルソナ使い（多分）とは何の因果だろうか。」

話をまとめるのは後でも出来る。そう言う事で桐条の質問に答える事にしよう。

「そうだな、ある意味では俺の親になるのかもしれない。俺をこんな体にくれた親って意味ではな」

「!？」

「……どういうことだ？良ければ話を聞かせてほしい」

「何のこっちゃない、対シャドウ向けの兵器として俺の体は隅々までいじくられただけの事よ」

元々ペルソナに対する適正があつた俺がなにをされたかと言うと、人体改造とでも言えはいいのだろうか。

御託を並べても仕方ないので一言で言えば人間兵器になつたってことだな。

「ッ……!!」

俺の言葉に息をのむ桐条。多分桐条鴻悦のしてきた事の全容を把握しきれていないのだろう。

あの実験は火の海に沈んだのだから、あの時の事に関する資料のサルベージは難航するはずだ。

となると当然桐条の知らない事柄等山ほどあるに違いないのだからそれは仕方のない事だ。

「いや、まあそんな事はどうだっていいさ」

「どうだって良いって……君は私を恨まないのか!？」

「お前を恨んでどうする？お前を殺していい、とお前が許可してくれるのか？」

「それは……済まないが、私は私の祖父がしでかした事の償いをしなければならぬ。

そのすべてを片づける事が出来たのなら……私は君に全てを委ねよう、それでは駄目か……？」

何だそれ、愛の告白みたいだな。

いや別に桐条美鶴に関してはどうだっていいし、桐条鴻悦の事も別にどうだっていい。

聖人君子と言っわけではないが別に俺は桐条の事など恨んではないのだから。別にとって言いすぎだろ俺。

「だから言ったる？別にお前の事を恨んじやいない」

「……どうして、そのような事が言えるんだ？」

「どうしてって言われても……（なんでこの人のリボンこんなでかいんだろっ）」

正直めんどくさい。

俺の思考はどんどん逸れる中で桐条は勝手に自己嫌悪に陥っている。

……昼休みももうすぐ終わりそうなので適当に切り上げる事にしようか。

「恨もうが恨むまいが俺の自由だろ。俺はもう自由なんだ、自主性を重んじる月光館学園的に考えたら桐条を恨まないと言う俺の選択

を尊重してもらいたいね」

じゃあの、と俺は軽く手を振りながら屋上から去る。

桐条美鶴は、最後までうつむいたままだった。

時は少し飛んで放課後。

クラスメイト達の恨みのこもった視線を無視しつついったん部屋に帰る事にする。

……つとその前に購買行ってくるか。カツサンド余ってたら買う。

ここの購買は昼休みに売れ残った食べ物割引になったりするから部活生達に人気である。

その恩恵に俺もあずかろうと言う事で購買でパンを何個か買おうと思ったのだが。

「あ、あなたは……」

「あん？……何だお前か」

そこには俺と目的を同じくして購買に居たのだと思われる、昨日出くわしたカーディガンを纏った女の子がいた。

と言つても俺とその女の子の接点と言えばそれくらいしかないわけで、俺からしたら「挨拶すべきか否か迷う」程度の間柄でしかない。

それ故に簡単な反応を返したと言う事で俺の興味は購買で販売されている物品へと移って行った。

「ちょっと、それだけ！？反応薄すぎでしょ！こっちは同じ学校の生徒って事で吃驚してるんだから！」

「あ？あーまあ落ち着け、話なんざどこでも出来るだろ？俺はそこで売れ残ってるカツサンドを買いにき……」

何と、そのカツサンドが眼の前で別の生徒に売買されてバイバイしてしまった……。

「……おばちゃん、メロンパン2つ下さい」

「はいよー」

とりあえずさっさとパンを買う事にした。

「……何か、ごめんね」

「いや、いいさ。ホントにカツサンド食べたいなら昼休みに購買行くし。」

それよりも、コーヒーと紅茶どっちが好き？」

「え？どっちかって言うと紅茶だけど」

「へー、俺はコーヒー派だなあ。ほら、ポロニアンモールにあるシヤガールのコーヒーとかめちゃくちゃ美味いんだぜ？1回しか行った事無いケド……。」

あ、おばちゃんコーヒーと紅茶も一個ずつくれ」

「コーヒーと紅茶ね、毎度ありー」

小銭をおばちゃんに渡してコーヒーと紅茶を受け取ると、紅茶とメロンパンをその女の子に渡す。

「へ？いいの？」

「あ？お前も何か食べ物買いに来たクチなんじゃねーのか？」

「ええつと、消しゴム無くなりそうだったから買いに来ただけど、丁度あなたが来たからそっちに目がいっちゃってたんだ」

「あらら、俺の勘違いかよ。まあ腹減ってねえなら他の奴にくれてやっても良いから、じゃあの」

何にせよ俺は今からこのメロンパンを食わなければならない。さりげなく話を切り上げてしれつとこの場を立ち去るのだが、どうやらその事に気づかれてしまった。

「あーいやいやそうじゃなくて、どっか静かな場所行かない？ちょっと話がしたいんだけど」

「仕方ないなあ……モテる男はつらいぜ」

「はいはい、馬鹿言ってるんで着いてきなさいよ」

十中八九と言うか十中十（造語）と言うか百発百中で昨日に関しての事なんだろうな。

逃げてても同じ学校の生徒なのでやっぱり面倒は避けられない。そういうことで素直に着いて行くことにした。

……はい、また屋上です。

とりあえず屋上の手すりを背もたれにして座ることにした。

メロンパンは売れ残りとは思えないほどの味で、周囲はサクサク

で中はしつとりと言う素晴らしい食感だ。

購買のパンのレベルの高さに舌鼓を打ちながら女の子が口を開くのを待つ。

「そう言えば、昨日は助けに来てくれてありがとね。私は岳羽ゆかり、よろしくね」

「気にすんな。俺がいなくてもあの少年がなんとかしただろうよ。俺は里峰竜児、今後ともヨロシク。

ああそつだ、少年は無事か？」

「ええ、お陰さまで……てか、あなた少年って言ってるけど、有里君はあなたの先輩にあたるんだからもうちよつと良い表現出来ないの？制服の刺繍見る限りじゃあなた1年生でしょ？」

「じゃ次からは有里先輩って言っよ。岳羽先輩？」

「う……付き合い長いわけじゃないけど、何かあなたが先輩って言っるのは違和感」

「なんて我がままな女だ！これだから女って生き物は！」

「ちよ、ちよつと！私の反応だけで女性を一括りにしないでよね！」

メロンパンをもさもさと食べながら岳羽ゆかりは憤慨した。

てーか何か話あるんじゃないのか？いや、俺が話そらすのが悪いんだけどな……。

武器の手入れもしたいから、さっさと会話を終わらせて帰りたいところだ。

「まーいいや。なあ、何の用？昨日の事か？
それなら桐条美鶴が概ね把握してると思うからそっちに聞いてほしいんだが」

「……やっぱり、あの人あなたと接触したんだ。なんて言ってた？」

「いや、何も？ちょっとした世間話」

「そうなんだ……」

一般人には中々へビーな過去話をした、なんて事を説明するのもあれだから適当にお茶を濁す事にする。

そういえば岳羽って性……どっかで聞いたような……。

俺と関係がある性は大抵が研究者だ。誰だっけか……あ、思い出した。

岳羽詠一朗だ。シャドウ研究の主任かなんかの。

俺自身被験者という立場だったからホイホイと話しかけられる相手でもなかったからあんまり覚えてないけど、ちょっとだけ話した事があるから思い出せた。

桐条美鶴の件もあるし、まさかとは思いがこいつも岳羽詠一朗の娘か何かなのだろうか。まあいいや。

「話ってそれだけか？」

「うん、まあね。ごめんね、これだけの事なのに紅茶とかおごってもらっちゃって。」

後最後に桐条先輩あなたを仲間に勧誘したいみたいな事言ってたんだけど、それに関しては何か言ってた？」

「あん？なんだそりゃ初耳だぞ」

まあ俺の事について責任感じてた風だし、そんな事頼めるはずもないか。

あの人が何か言う前に俺がその根底を覆してしまった感があるしな。

「あれ？そうなんだ、それなら良いんだけど……もし桐条先輩が勧誘してきても、嫌なら嫌って言うてくれていいからね？」

「お前だって戦力が増える事に越した事は無いんじゃないのか？まあそうなったら断るけどさ、面倒だし」

「そんな理由で断るの！？」

……確かにあなた強いから仲間になってくれたら心強いけど……仲間になるかならないかはあなたの自由だからね」

自由、か。

「……何か悪いな、気を遣わせたようで」

「良いの良いの。メロンパンの御礼って事で」

あれだな、どうやら敵対するわけでもないみたいだ。

桐条美鶴の方もあの実験の尻拭いをしているといった雰囲気だったし。

シャドウを撃破するという目的も同じだ。

そして何より、あの桐条に恩を売れるとあらば、手伝っても良い

かもしれない。おもに報酬目的で。
銃弾を入手するのも一苦勞だしな。あの銃は対シャドウ用に作られた特製だから。

「まあなんだ、よっぽど切羽詰まってんなら手伝ってやらん事も無いぞ。」

どうせ影時間の時はもっぱらシャドウとやり合ってるから」

「はあ!？」

何に対しての驚きなのだろう。手伝う事なのか毎晩シャドウとバトツてる事に対する物なのか。

まあどっちでもいいか。そんな訳で昼休みの時と同様に俺は再び軽く手を振りながら屋上を後にするのだった。

・・・

影時間が始まる。

機械は止まり、辺りは暗闇に染まり、そこを照らすのは不気味に光を宿した月だけだった。

昨日は街中でシャドウがわらわら居たからそのまま戦闘に突入したが今日の目的はシャドウだけではない。

「今日はタルタロス行つとくかなー、お金も減ってきたし」

俺の主な収入源。それはタルタロスである。

一応奨学金も貰ってはいるものの成績を保つ事を条件にしている為無暗に手をつけたくないと言う事で貯めている。まあまだ一月目なんだけど。

兎にも角にもタルタロスでネコババ生活をしなければ今日の食

ぶちすら怪しいと言うのはどういっわけだろうか。

十中八九銃弾を造るのにかかる費用だな……。いや、シャドウが落とす材料を色々いじくって造るから材料費はかかんないんだけど……。

「まーたタカヤ達に弾薬を頼まねばなるまいか……。あいつらマジボツタくるからなー」

ストレガと言う組織と言うか一味……と言うか人工ペルソナ使いとしての元モルモット仲間達が俺の弾薬を造ってくれてる。対価として結構な金を持っていきやがるが。

「何度も言ってるでしょう、私達の仲間になれば武装は無料で進呈しますと」

「うおあ!?!」

俺がぶつぶつ愚痴りながらタルタロスへ向かいながら歩いていると、話題の中心であるストレガのリーダーであるタカヤが声をかけてきた。ストレガの残り二人……ジンとチドリもタカヤの後ろに着いてきている。

半裸の白髪ロン毛と言う、濃すぎる外見も相まって夜の光に照らされるタカヤは一段とホラーだ。マジでビビった。

「……何か失礼な事を考えましたか？」

「おうよ、半裸でうろつくな職質されんぞってよ」

「またまた御冗談を……ここは警察などが介入できる空間ではあり

ません」

「てめーの私生活での服装を鑑みてから物を言いな」

「くくく……それもそうですな」

とまあこんな具合に同じ釜の飯（流動食）を共にし、苦楽を共にし、命を賭けて桐条から逃げたと言う事も相まってそれなりに仲良くやっではいる。

何か別に俺はシャドウを殲滅したいだけなので、タカヤ達とは目的が違う為何となくストレガの一味には入っていない。それでも金さえ払えば弾丸を造ってくれるあたりありがたい限りだ。

「それで何や竜児はタルタロスにでも行くんかいな」

「おう、昨日行くつもりだったんだがちょっとしたアクセシデントがあったな」

「……アクセシデント？」

するとタカヤの背後に控えていたジンも口を開くのでそれに答えるところ、続いてチドリが疑問の表情を浮かべた。

「おう、俺ら以外にもペルソナ使いが居るみたいだな。それも天然っぽい」

「「！」「ほづ……それは面白い」

ジンとチドリは少し驚いた様子だったが、タカヤは楽しそうにしている。

まあ確かにこいつらとあいつらはいずれ激突する気がするなー。
多分目的が正反対だもん。

それをいち早く察したのだろう、タカヤはまだ見ぬ敵に武者震い
をしたと言ったところか。

やっぱりただ淡々と目的に近づくよりも障害があつた方が楽しいも
んな、刺激あつてこそその人生だ。

「別にそいつらの肩入れする気はねーが、あいつらはお前らと違つ
てシャドウを倒したいらしいから、気が向いたらあいつらの手伝い
するけど構わねえか？」

ストレガの一味ではないが、親密度で言えばあいつらよりもこい
つらの方に思い入れがある。

それ故に今こいつらとあいつらが敵対するならまごうこと無くこ
いつ等の味方をするつもりだ。

とはいえ現在それが現実になっているわけではないから、こごうし
てあいつらに肩入れする事の許可を求めておく。

何の相談もなしにあいつらとどこに行くのも何か薄情な感じする
しな。

「ふむ……私は別に引きとめはしませんよ。ただその天然のペルソ
ナ使い達に関する情報を少々頂けるのならば」

「わしもかまへんで。別にそいつらの肩入れするからうちゅーて竜
児と敵対するわけでもあらへんし」

「……どうでもいい」

どうでもいい。どうでもいい……。
まあタカヤとジンの同意を得られたのなら問題はあるまい。

「つつても必ずしもあいつらと行動を共にする事になるとは限らねえからな？」

あいつらがもっかい接触してこない限りは「

「ええ。正直そこまで期待してないので問題ありませんよ」

ぐぬぬ……。

「……お前らって、何気に俺の扱い酷いよな」

「せやかて大抵の事（物理的な意味で）は平気やないかい。どんな身体しとんねん」

「私はこれでもあなたの不屈っぷりを買っているんですよ」

「どうでもいい」

きょわきょ……。
きょわきょ……。

チドリここにきてからどうでもいいしか言ってるねえ……。

「……何か釈然としないがまあいい。多分今回の戦闘で弾薬使いきる心算だから次の分用意しといてくれ。

報酬と一緒に更に次の分の材料は持ってくるから」

「分かりました、用意しておきましょう。それではお気をつけて」

「おう、じゃあの」

「気をつけてやー」「……じゃあね」

俺達は簡単な挨拶だけすると、互いに別の方向目指して歩き始めるのだった。

存外に良い人だった(後書き)

P3はプレイ済みだしなんとかなる気がする

休むと勝手に面倒を押しつける風潮止めてくれない？

タルタロスの内部構造は日々変わりつつある。

どこまで階層が続いているのか見えないほどに高いそれは、俺の探究心を酷く揺さぶるもので桐条グループから離れた後すぐに上へ上へと目指して行ったものだった。

「今日も行き止まりって……」

しかし、16階で行き止まりになっているのだ。

上の階へ上るのをさえぎっている柵を破壊しようとするものの、びくともしない。

何か条件があるのかと思ひ色々調べては見ただものの、やっぱり何もわからないまま今日と言う日を迎えている。

……10年間、上に行けないってのは絶対おかしいよな。もうさ、いい加減同じような奴ら相手にするの飽きるっての。

「……明らかに100階は越えてるよな……」

俺は一旦下の階を目指しながら歩みを続ける。

タルタロス　すなわち「奈落」と研究者達は名付けたと言うのに天元突破しそうな高さを誇っていると言うのは如何なものか。

……だがまあぶっちゃけこの塔の名前なんぞどうでもよくって……！

「お出ましたな、クソ野郎」

今日も今日とてシャドウ狩りに精を出す事にする俺である。

弾薬を使い切る、と言う事で懐から2丁の拳銃を取り出した。

いや、別に無駄遣いするわけではないからな。2、3発につき1、2体は撃破するからな。

ところで、俺は何となくだがそのうちこの柵が取り除かれる気がする。
している。

と言っても昨日今日で一気に情勢が変わったので、ついでに柵も消えるんじゃないかねえかなっていうものっそいアバウトな願望に過ぎないのだが。

しかしもし仮にその願いが成就したとすると、上の階に行けばより強敵が現れる事になるはずでまだ見ぬ強敵達に対して『あれ』も使う事になるだろう。

『あれ』に見合う口径の弾薬が無い為今は使用不可だが、次にタカヤから貰う予定の弾薬に『あれ』用の物も造ってもらおう予定である。

「ハツハア!!!!」

正面に見える二体を打ち抜き、背後からの攻撃を前転して回避するとともに背後に向けて数発放った。

そして起き上がる勢いそのままに先程弾丸をぶち込んでやった二体に回し蹴りを放つ事で隙を無理矢理作り出してやる。

足に気持ち悪い感触を受けながらもそのまま体を1回転させシャドウを蹴り飛ばした。

「雑魚はおねんねしてろ、いい子は寝る時間だっつーの!!!」

蹴り飛ばした方向にもシャドウ達は群がっていたので背中の大剣を右手に持ち一閃。

言葉に言い表せないような変な色をした体液が辺りに飛び散る。

続いて1、2、3、4、5と周辺に居るシャドウ達を斬り裂きながら空いた左手で銃撃。

俺は独楽のように回りながら一体また一体とシャドウを仕留めていく。

そうして周囲に居たシャドウ達の数も残りわずかになったところで新たなシャドウが現れた。

「またお前か畜生め」

名も知らぬシャドウ。巨大な体躯に両腕がスピアみたいな感じの奴。

こいつは一切の物理攻撃を通さないらしく最初接近戦で戦おうとして酷い目にあつた相手だ。

そのシャドウはあいさつ代わりにと言わんばかりに身体を回転させスピアによる一撃を俺に叩きこまんとする。

「ハ！！物理攻撃が聞かなくても防御は出来るってんだ！！」

対して俺は跳躍。後に回転するスピアの間に剣を叩きこみ無理矢理その動きを停止させた。

銃も剣も効かないならやる事は一つしかない。

「ペルソナ……！！！」

死と言う最上の恐怖を受け入れ、自分の中に存在する何もかもを受け入れる。

そうする事で心の仮面はそれを引き鉄に、力と言う弾丸をシャド

ウに放つ事が出来る。

そして俺の背後に表れた俺のベルソナ中身。

「一発で沈めんど、ケツアルコアトル！……ガルーラ！」

背後に居る翼の生えた蛇は咆哮を一つ放つと共にシャドウに対して暴風をぶつける。

めちやくちやに吹き荒れるそれは、一瞬にして一区画を飲み込みその場に居たシャドウをまとめて消滅させた。

そして残ったのは静寂。

「……なんつーか、もう同じ奴ら相手にすんの飽きたわ」

上の階に行けるようになれと割と切実に祈る俺だった。

・・・

さて、俺の今現在の身分は学生である。

故に毎晩シャドウと戦っているとしても翌朝には何食わぬ顔をして学校に行かねばならない。

流石に大けがとか病気でと言うなら休んでも良いのだろうが、病気はともかく大けがをした理由を問われると面倒になるので月光館学園に入学することになった後からは細心の注意を払ってタルタロスに挑んできた。

兎にも角にも、奨学生として学校には真面目に行かねばなるまい。

例えそれが寝坊して昼過ぎになってしまっていたとしても。

俺は寝坊して昼過ぎに悠々と重役出勤し、ボケーっとしながら放課後を迎えたのだが、何やら担任の教師に職員室に呼ばれたと思っただら。

「……センサー、休みの人を委員会に据えるのはどうかと思うんですが」

「俺はちゃんと言ったぞ？委員会なりたくない奴は正直に手を挙げろと」

「それはあれか？手を挙げてない奴が委員会になるって事か？」

奴の名は吉岡。俺がこの月光館学園に入学するにあたって後見人となってもらっている男だ。影時間の適性は無いが、その存在は知っているのだから俺の武器所持も黙認してもらっている。

そういう意味では感謝はしているものの、それとこれと話が違っていて事で俺は目を見開き目の前の教師を睨みつけた。

しかし俺の睨みを全く気にした様子も無く教師は笑って俺の問いを肯定する。

「exactly、その通りでございます」

俺の意志は無視かふざけやがって。いや、寝坊したのは悪いと思ってるよ？でもさ、委員会決めなんて放課後でもいいじゃない？なんで朝なんだよ？早急に決めないといけなかったの？そんな話昨日はなかったじゃん？

「ふざけないでください。苦学生の奨学生は勉強に集中しないと成

績を保てないんです、だからイヤです」

「学校は勉強するだけの場じゃねえ……良いか里峰？

学校つてのは一種の箱庭なんだよ。まあ、言うなれば社会の縮図だ。

そこで友人を作ったり部活したり委員会に入ったりつてのは社会に入る為の予行演習みたいなもんなんだよ。

つまり、勉強しかできないってんじゃこれからの生活困る事になんぞ？」

「だったら他の奴らにも何かさせるよ！！」

「うるせえ！寝坊した奴が悪いんだよ！！」

「言うに事欠いてそれか！ふざけんな吉岡アア！！」

「吉岡『先生』だ！！」

「ふざけんなよ、Mr・吉岡アア！！」

「かたくなに呼び捨てにしたいのな！！良いぜ、表でろ里峰エエ！！！！」

吹いたなクソ野郎、意地でも委員会を撤回させてやる。もしくは再選挙にしてやる。

指をバキボキと鳴らしながら臨戦態勢に入る俺。

対するティーチャー・吉岡も威圧を放ちいつでも戦える状態に入る。

しかし、俺達の対峙はあっけなく終わりを迎えた。

「こら、ここが何処だか分かってるの？」

「はーこ、これは鳥海先生！！恥ずかしいところをお見せしたよう
で……」

どうやら同僚の先生らしい。吉岡先生（一応先生をつける）のリアクションを見る限りでは鳥海先生に惚れているな？

「誰だお前はアア！！」

だが敢えて空気を読まずに声を荒げる。

「職員室にいるんだから高確率で教師に決まってるでしょうが……」

「じゃあ俺は低確率に賭けるぜ！！」

「馬鹿野郎この人はまごうこと無く教師だ！！謝れ！鳥海先生に謝れ！！」

おいおい、鳥海先生があきれた目で吉岡先生の事を見てるぞ。

わっはっはざまあ見る！ニヤニヤしていたら俺も鳥海先生にどつかれた。

「ハア……兎に角、ここは職員室なの。静かにして頂戴」

「は、はい……すみません鳥海先生」

「カハハ、尻に敷かれてやんの」

「おめーも謝るんだよ、委員会にぶち込むぞコラ」

謝れば委員会回避出来るのか？出来るんだな？よしそれなら謝ってやるつか。

綺麗なお辞儀と共に謝罪の言葉を職員室に向けて放つ。

「……騒がしくしてすみませんでした」

「分かれば良いのよ、分かれば。こっちだって書類片してるんだから」

「よし、それじゃあお前図書委員な。明日委員会あるから放課後に図書室行って来い」

「えっ」

ふざけんな。

「どっちにしろ誰かがしなきゃなんねーんだよ、おめーがやれ。今度海牛で牛井おごってやるから」

ふざけんな！

だけどもあ……海牛に釣られてやるか……。

「……ハア、分かった。

どうせ部活もしてねえし毎日毎日放課後に拘束される訳じゃねえんだろ？」

「そつだな、毎日は無いだろつけどその辺は明日確認してきな」

「はいよー」

職員室ってのは昔から苦手だ。

生徒と言う立場で職員室に入ると言うのはどうにも場違い感が否めないんだよな。

そんな訳でそそくさと立ち去る。

図書委員……めんどくさいけど引き受けてしまったモノは仕方ない……。

俺は重たい足取りで購買に足を運ぶのだった。

……

翌日の放課後。

図書室に行く生徒たちが集まっている。

中には白衣を着た先生らしき人物も居てパツと見そこが委員会の集まりっぽいのでその近くによってみたところ、どうやら正しかったらしい。

と言うか面子は俺が来た時点で全員集まったらしく、先生はようやく話を始められると言った表情で口を開いた。

「よし、全員集まったようだなー。今日からお前達で図書委員を務めてもらおう。

私は大西だ、担当の科目は化学なのでそっちでも分からない事があれば聞きに来い。

それじゃ、それぞれ自己紹介を……とりあえず最後に来たお前から。立って自己紹介な。

ここは図書館だからなるべく静かに」

俺か。

言われた通り素直に立ち上がり自己紹介を始める。

「1-Aの里峰です。推理物とか結構好きなんでオススメ有ったら紹介してほしいです。

今後ともヨロシク」

全員に聞こえるように、かつなるべく静かにと言う条件を満たしつつの自己紹介。

こういうのは第一印象が大事なからな、変に目をつけられるのもあれなので影をなるべく薄くする事にしよう。

って考えで行った自己紹介だったが無難な感じにまとめたので反応も普通。上出来。

「里峰だな。それじゃ次お前」

……なんやかんやで簡単な自己紹介も最後一人。

大西先生の言葉を受けゆったりと立ち上がったのは何やら大人びた感じの女性。

「えと……長谷川沙織です……至らない点もありますが、よろしく願います」

普通の自己紹介だ。

だと言うのに何かあれだな。他の委員の奴らがひそひそと会話を交わしている。

俺の時は別に何も無かったのに。なんだなんだ？

「よし、自己紹介も終わったな。

それじゃ続いて月曜から金曜までの担当を決めるからな。

でも面倒だから適当に振り分けるけど良いか？」

「センサー、私はエリと一緒にが良いんですけどー」

「あ、私も友達と一緒にしてほしいんですが……」

する生徒達の何人かが友達同士で一緒になりたいらしくその辺の融通は利かないのかと口を開いた。

確かに友達同士で図書委員になったのに違う曜日に振り分けられたらあれだもんな。

まあ別に俺は友達居ないから知ったこっちゃないけど。

「じゃ、誰かと一緒にになりたい奴が先に決める。ちなみに担当は一人につき週二回だからな。」

それで、残った奴は適当に振り分けるが文句は無いか？」

俺は別にないです。

無言で一回頷く。他の面子も特に何も無いようで異論を唱える者は居なかった。

そうして次々と担当の曜日が決められていく。

「……じゃ、長谷川と里峰。お前らは火曜と木曜な」

「はい」

火曜と木曜か。いやしかし毎日じゃなくてよかったわ。

流石に毎日委員会に顔を出すほど暇じゃない。

いや、実際は暇だけどもんどくさい。

「よろしくね、里峰君」

するとなんだ、長谷川さんが微笑みながら俺に声をかけた。声をかけられた俺は素直にそれに対する返答をする事にする。

「こつちこそよろしく。長谷川さん」

物腰柔らかな人だ。

昨今の女子高生にはこうした大和撫子的なあれが足りない気がする。

しっかしあれだな、この学校の女子はレベル高いなオイ。

でも肉体年齢が15歳でも精神年齢は既に三十路を越えて四十路に近付いてるからね。

精神の方が枯れてくると自然と肉体も枯れてくると言うか……。

まあそんな事はどうでもいい。

……つーか四十路にもなつて銃とか剣を振り回してハイになっているって考えると黒歴史街道まっしぐらだな。

いやいや！前世の精神年齢はノーカンだ、ノーカン！ノーカン！

俺が頭の中で葛藤を繰り返しているうちに大西先生は最初の委員会の集まりですべき最低限の事を終えたようで、俺達を解散させるべく小さく声を上げた。

「それじゃ、今日の所は解散。今日は金曜だから金曜担当の奴だけ残れ。」

図書委員の仕事について実践しながら教えるから。月曜担当の奴は来週の放課後またここに来い、良いな？」

「「はい」」

「よし、それじゃあ解散。お疲れさん」

大西先生の言葉と共に生徒達が図書館の出口に向かって歩き出した。

俺はどうしようか、とりあえず何か面白い小説でもないか探そうかな。

適当に本棚に向かい、面白そうなタイトルの本を適当に探す事にする。

「あれ、里峰君は帰らないの？」

すると長谷川さんがいつまでも帰ろうとせず本棚をいじくっている俺に対して疑問を抱いたらしい。それはお互い様な気がするがまあいい。

「いやさ、何か面白い小説でもないかなと思ってな。それに図書委員の仕事を実践しながら教えるつってたし」

「なるほどね。里峰君って真面目なんだ」

「俺から真面目を取ったら骨しか残らない程真面目だよ、こう見えて」

「ぶふつ。何それ……あ、そうだ。私のお勧めで良かったら紹介しようか？」

この人も本が好きらしい。

かくいう俺も本は好きだったから保健委員か図書委員なら図書委

買って事で選んだんだけど。

とはいえ本が好きだからと言って図書委員をしたいわけではない。

それはともかくどうせ図書委員の仕事も常に忙しいってわけじゃないだろうから合間を縫って本でも読もうかと考えている。

それ故に長谷川さんの申し出は非常にありがたい。

「そりゃありがてえ。ジャンルは？」

「里峰君の好きな推理物。こう見えて私も結構本読んでるんだ」

「ほほう。それは期待できそうだ」

長谷川さんが少し自信ありげな表情を浮かべるのでそれに釣られて俺も楽しそうににやりと笑う。

すると、長谷川さんは少し申し訳なさそうな表情に切り替わった。

「えっと、読んだことあったらごめんね」

「それはそれで色々とな話題が出来そうでありがたいもんじゃないよ」

どっちにしる本を紹介してくれると言う行為そのものがありがたいんだよワトソン君。

「ふふ、それもそうね。それじゃあ期待に応える為にも何作か紹介しようかな、ホームズ先生？」

長谷川さんの意外なノリの良さに小さく笑いながら、先導する長谷川さんの背中を追う事にする俺なのだった。

休むと勝手に面倒を押しつける風潮止めてくれない？（後書き）

次々と女キャラが出てきてはいますがハーレム等は一切ありませんのであしからず

ひっそりとケツアルコアトルの容貌を修正。P3の太陽に出てくるケツアルカトルとはまた別なペルソナな感じでおなじやす

仲間が増えるよ！やったねry(前書き)

里峰竜児君のケツアルコアトルは刑死者です。
今書いた事に特に意味は無いです。

仲間が増えるよ！やったねry

初めて天然のペルソナ使い達と遭遇した夜から5日程が経過した。特筆すべき事など何もなく、ただただシャドウ達を殺しつくす日々だ。

これはまあ10年前から繰り返している事なので別段気にするよ
うな事でもないけど。

そして今日はストレガの連中に依頼した武装を受け取る日と言う
事で俺は宵闇に染まったポートアイランドを歩いている。

普段は影時間になってから外を出歩くのだが、今日は散歩したい
気分だったからなんとなくな。

けどまだ影時間じゃないし職質とかされたら困るので、武装は
懐にしまっただけだ。

大剣さえなければ職質はされないだろう。うん。

こつこつなのは堂堂としていれば何も問題は無いのだよ。

そうしてのんびりと歩いていると、気が付いたらポートアイラン
ド駅に到着していたのでとりあえずベンチに腰を落ち着け、ポケー
つと空に浮く月を眺めていた。

「もうそろそろか……」

影時間が訪れる。

基本的にタカヤ達との待ち合わせ場所は決まっていない。

何せあいつら神出鬼没でどこにいるかも分かったもんじゃな
いか
らな。

ボーっとしてたらあいつらが勝手に来るんだから吃驚する。
一体どうやって俺を捕捉しているんだか。

「それも私達の仲間になればお教えしますよ」

「……職質されんぞ半裸ア」

噂をすれば影がさす、とはよく言ったものだ。
タカヤ達が来ると同時に影時間が到来した。

周辺を歩いていた飲み屋帰りの酔っぱらいリーマンやいちゃこら
していたカップル、深夜にこの周辺を跋扈している不良。

そのことごとくが棺桶に変貌し、人工の光で灯されていたポート
アイランド駅は一気に自然の闇に染まる。

そんな中で堂々と歩いてきたタカヤ達は多分、影時間前からああ
して堂々と歩いていたはずだ。

……半裸にゴスロリにメガネの3人組。正直不自然だよな。

正直な話、一度捕まんないと分からないんじゃないだろうか、自
分達が怪しい存在だと言う事に。

「……何やまた失礼な事考えとるんとちゃうか」

「少なくともタカヤに上着を着せようとしないう前らに不信感を抱
いているのは間違いないぞ」

「……わしかてこないな恰好する奴に何も言わんわけあらへんがな」

「この中で唯一まともな服装なのはジンだけだな。やはり3人の中では一番常識人なのだろう。それ故の苦勞と言うものか。」

「見た目だけ見たらキワモノなタカヤ（中身もさながら）に、やっぱり見た目だけ見たらキワモノなチドリ（なまじ似合ってるから困る）を制御するのは難しいんだろうな。御愁傷様です。」

「……まあなんだ、がんばれ」

「貴方達、相当失礼な事を考えてますね？」「……何かム力つく」

「そう思うんなら服装を考えろ（考えんかい）！！」

俺、正直こいつらと一緒に行動してるところを見られたくないんだけど！？」

基本的に合流する時間は影時間だから良いけどさ……。

まあいい、落ち着こうか。そしてとりあえず話を進めよう。

俺は懐から報酬の金と次の依頼に使う、シャドウが落とす弾薬の材料を取り出した。

「とりあえず、今回の弾薬の分の金と……こっちが次に依頼する分の材料だ。」

次は『狩人』ともやり合う心算だし、だからそれに合わせて『あれ』に見合う弾薬を頼む」

俺の言葉に対してタカヤは興味深そうに微笑んだ。

タカヤの俺を見る視線には「勝てるのか？」と言う疑問と興味が乗せられている。

「ほほう……あれとまた対峙するおつもりだと……以前死にかけの所を助けた事をお忘れですか？」

「次も助けられるとは限りませんよ」

「何や竜児自殺願望でもあるんかいな」

「……馬鹿ね、死にたいならそう言えば良いのに」

「言いたい放題だなオイ。一人くらい「イイねイイね」とか乗ってこいよ！！」

「うるせえ！あの時は事情が違ったんだよ！！」

「そうだ。」

「あの時と今では状況が違う。」

「成長もしたし、経験も得た。」

「別に『狩人』を仕留めたいわけではない。」

「俺がどのくらい強くなったのか、知りたいんだ。」

「はつきり言っただけで勝てると思わないが、少しくらい良い勝負をするとは思っている。」

「依頼は依頼ですし、報酬さえ頂ければこちらもそれに応えますが……」

「流石に次は助けられへんで？わしらから慈善事業でやっとなんとちゃうからな」

「せいぜい頑張ることね」

「ま、確かにお前らの言う通りあれは真正銘のバケモンだからな。俺だつて死にたいわけじゃねえけどよ、この10年で培った力の実感が欲しいんだ。」

タルタロスも先に進めないし、俺自身どのくらい強くなったのか分かったもんじゃねえしな」

この10年、ただただ強くなる為に戦い続けた。裏を返せば、俺には戦いしか残っていなかった。

それはすなわち、力の証明でしか俺の存在理由が示せない事に他ならない。

すると、タカヤ達は何やらこちらをじっと見つめている。今度は先程のような呆れた様子ではない。

「竜児……やっぱお前、あの時のことまだ気にしとんのか？」

「……もうそんな終わった事なんぞ気にしちゃいねえよ。」

俺が戦うのは、死により近づく事で生を感じる為だ」

「せやかて、お前は……」

「ジン」

俺が口を開く前に、タカヤがジンを止める。

ジンは納得していない表情を浮かべるものの、渋々と引き下がった。

するとタカヤは少し申し訳なさそうに俺に対して謝って来る。

「すみませんね、うちのジンが」

「いえいえ、犬に手をかまれたと思えば気になりませんよ」

「コラ竜児イ！誰が犬やて?!」

「はっはっは！まア何だ、依頼の件頼んだかな」

「ええ、しっかりと引き受けましたよ。それではまた今度」

「おう、じゃあなお前ら」

タカヤから弾薬を受け取ると、用は済んだと言わんばかりにタカヤは踵を返す。

一方でジンはさっきの犬発言を根に持っていたようで、憎々しげな視線を送りながらもタカヤに追従する。その前に俺の方を振り返って一言。

「覚えとれよ竜児……」

「はいはい」

相手取るのも面倒なのでぷらぷらと手を振る。

するとチドリがジッとこちらを見続けていたので俺は思わず首をかしげた。

「どうした？チドリ」

「……なんでもない、じゃあね」

「……ん、じゃあな」

良くわからない。

チドリもタカヤ達の方へ歩いて行ったので、無人と化したポート

アイランド駅には俺だけポツリ。

どうしようかな、弾薬も得たからシャドウ達とも戦える。

でも何だ、そういう気分じゃなくなってしまった。

「歩こうかな」

そう言う訳で、拳銃片手に散歩を開始。

ところで、先日の一件は特殊だから除外するとして影時間中の街中にもシャドウは一応現れる。

普段はタルタロス内にならたくさん居るのだが、街中にもしばしば現れるのだ。

それで先日はなぜかあり得ない位大量発生していたのだが、あれは一体何だったのだろうか。何かの兆候？

駅前の映画館のラインナップを確認してみたり、路地裏の壁に描かれた落書きを荒らしてみたり。

時計も動かないから不便だなあと思いながら無人の街中を散策する。今日は先日と違ってシャドウも大人しいらしく、ものっそい静かだ。

それが逆にホラー感を増長している気がするのだが、こういう雰囲気はもう慣れた。

ホラー苦手な奴にはこの静寂は耐えきれないだろうなーとのんきな事を考えていると、なにやら電気の消えたコンビニからすすり泣く声が聞こえてきた。

お化け？お化けですか？そんなもん居るわけないじゃんと自分で否定しながらもコンビニの自動ドアを手動で開く。

「なんだよこれえ……意味わかんねえよ畜生……」

そこにはすすり泣く帽子をかぶった髭の男が。
俺はその様子に若干引きながら声をかけてみる。

「……何やってんだよ」

「うおお！？悪霊退散すみませんお金無いです許してください！！」

影時間ではたまにある出来事だ。

適性の無い奴が象徴化せずに影時間を彷徨うと言う事が。

見つけたらなるべく助けてやる事になっている。

どうせ適性の無い奴は影時間が明けると大体の事を忘れてしまい、残った記憶も夢か何かとして処理するため俺の事を覚える事は無いからな。

ていうか銃刀法違反してるのを覚えられると困るし。あれ、そういう問題でもないのか？

俺はあきれたように溜息をつく、危険人物ではない事をアピールするために両手を挙げながら落ち着けるように諭す。

「俺のどこが悪霊だったんだ。良く見る両の足で立ってるっての」

「……本当、だ」

それで納得しちゃうのかよ、案外余裕だなお前。

まあなんだ、今日はシャドウも居ないし適当に辺りを警戒して影時間が明ける直前に立ち去れば良いだろう。
そう考えとりあえずコンビニの外に出るべく髭の男を促して外へと足を向けたところ。

「！お前は……」

「ん？ああ、天然か」

そこには先日見た天然のペルソナ使いが居た。
多分こいつも月光館学園の人間なのだろうが、あれ以来こいつを見たのは今日が初めてだ。

丁度いいや、こいつの保護を頼むか。ひよっとしたらこいつにも適性があるかもしれないし。

「丁度いいや、影時間に迷ってる奴が後ろにいるから保護してやってくんろ」

「ん？ああ、それは別にかまわないが……」

お前は どうする？ といった視線を向けている。
特にする事は無いが散歩を続けたいので素直に答える事にした。

「散歩続けたいから俺は帰る。」

そいつの事は影時間明けるまで適当に相手してやったらいいんじゃないね？

今日はシャドウも大人しいし、戦う事はなさそ……ごめん嘘だわ
余裕で嘘だわ」

天然ペルソナ使いの背後から数体のシャドウがこちらに向かって

いた。数は目測で10体程。

シャドウ達はこちらに気付いた様子ではないがひよっとしたらまだ居るかもしれない。

……と言ってもケツアルコアトルを出すほどではない。装備も拳銃しかないが十二分だ。

「な、なあ！何だよあれ！あの変なの！！俺死ぬの？死んじゃうの！？」

「ええい騒ぐな奴らがこちらに気づく！」

軽くストレッチをしているところで迷子の男もシャドウの存在を認知したらしく酷く狼狽し、ペルソナ使いの方はそれをなだめようとしている。

まあこの程度なら俺1人で十分だ。そのまま2人にはこの場で大人しくしてもらおう。

「あんたはそいつのお守頼むわ。こっからは俺の戦場だ、手出しは無用」

「……良いだろう、お前の力を見せてもらうぞ」

渋々、と言った様子だが脇腹を軽くさすりながら身を引いた。

どうやらペルソナ使いは負傷中らしい。

それに俺の戦い方を知りたいと言つのもあるだろう。俺が敵なのか味方なのか分かっていない現状を鑑みると。

とはいえペルソナを使う気もないし基本的には大剣の方で戦うし、拳銃だけで戦う分には見世物になっても気にはしない。

兎に角さつさと片付けてしまおう。そう考えた俺はくるくると拳銃を弄びながらシャドウ達の下へ歩みを進める。

「さつきは戦う気ないなんて思ってたが……据え膳食わぬはって言うしな、ちよっと狩って来るぜ」と

先手必勝だ。

シャドウ達がこちらに来るまでに距離がある。

俺は一気に距離を縮めながらも数体仕留める心算で引き鉄を引いた。

最初に着弾したシャドウからは大穴が開かれそこから体液が吹き出る。

……流石対シャドウ用特殊兵装と言ったところか。

大口径の銃口から放たれる銃弾はその一発一発が必殺の牙と成り得るのだ。

「ヘドロの癖に道路で蠢いてんじゃねえよ!!」

ったく道路が汚れちまうだろうが、下水道を通りやがれっての!」

跳躍し重力を味方につけつつシャドウ達の中心へ落ちる。

俺のかかと落としに巻き込まれたシャドウがペンキをぶちまけたかのように辺りに飛び散った。

相変わらず汚い液体だ。

いや、影時間が明ければその汚れは消えるのだがマジで精神的に不愉快。

「お前ら程度の雑魚にこれ以上弾薬を消費するのはもったいないねんだよオ！」

普段は剣を使っている為に直接殴ると言う事が少ない、と言う事で今日はこの四肢を武器に戦おうか。

シャドウの体液が精神的に汚いとか言いながら近接で戦うのはどうなんだろう。でもまあ、たまにはね。たまには。

シャドウ達の中心に降り立った為、自然と四方を囲まれる状態になった。

じわじわとその包囲をシャドウは縮めていく。俺はそれを破るべく真正面のシャドウに向かって蹴りを放つ。

すると両サイドと背後からも動きを察知出来たので数歩後ろに下がると同時に跳躍し、空中で一回転。

どうやらアギを放つたらしい。視線の先には地面ではなく炎の塊が通過するのが見えた。

そうしてシャドウの真上に着地しながらも思い切りそのシャドウを踏みつぶす。

ペンキをぶちまけ2号の完成である。

「あっはっはっはア！」

続いて近くにいたシャドウを鷲掴みにしてそれを振り回す。

殴ってよし、投げて良しの簡易鈍器である。

周辺のシャドウを倒す事も出来、同時に武器と言う消耗品をそのまま消耗させていいと言うまさに一石二鳥の即席武器だ。

そうしてひとしきり暴れまわったところでようやくシャドウの数

が残り一体になった。どうやらシャドウは目測の10体のみでそれ以上は居なかったらしい。

さっきは弾薬がもつたいたいとはいったものの、何かもうめんどくさいし体内時計ではそろそろ影時間も明けると告げている為早々に終わらせることにする。

「これでラストォー!!」

両手に拳銃を握り1発ずつ銃弾を放つと、それらは最後のシャドウへと吸い込まれるように着弾。

二つの穴をあけたシャドウはあっけなく消滅し辺りからは静寂が取り戻された。

「うし。一丁上がりっ」と

うん、良い汗かいた。このまま走って帰ろう。

そして帰ったらシャワー浴びて寝るんだ。

とここで、この後の予定を瞬時に組み立てるとコンビ二に放置した2人の事を思い出した。

「お前ら！多分もう影時間も終わるからこのままアディオス！」

「あ！おいコラ待……!!」

背後ではペルソナ使いが何か喚いているが気にせず走り去る事にする。

シャドウとやり合って火照った体のクールダウンには丁度いいだろっ。

しばらく街中を走り抜けると、影時間も終わりを告げた。

・・・

コンビニに取り残された2人はあつという間に見えなくなった里峰竜児を見送る形で立ち尽くしていた。

彼に天然のペルソナ使いと称された男……真田明彦はペルソナもろくに使わない状態であれ程の運動能力を発揮していた事に対する驚きのあまり里峰を追う事すらままならなかった。そもそも追いかけても追いつかなかつただろう。

一方で彼に髭と呼ばれた男……伊織順平は自身の身に降りかかった不幸と、それをヒーローのように助けてくれた男に対しての興味が尽きずに動く事すら忘れており、当初は泣きべそをかいていた伊織であったが里峰の戦いっぷりに初めて戦隊物の特撮を見た時の興奮を思い出していた。

「すっげー！！何だよあれマジカッケーよ！っーか何？ただのジャンプでどんだけ飛んでんだよ！人間技とは思えねー！！」

今まで貯め込んだ思いを吐き出すかのように叫び声をあげる伊織に対して、真田は鬱陶しそうにしながらも影時間の中でこれだけ余裕を持っていられると言うのはひょっとして適性があるからではないかと考えていた。

多分この男なら自身の誘いに容易に乗る事だろう。命のやり取りに巻き込む事を少し申し訳なく思う真田であったが、なりふり構ってられないと言うのも事実だ。

「なあ、あいつのように……とまでは行かんが、あの異形と戦う術

「が欲しいと思わんか？」

「へ？つてかアンタ真田先輩っすか！？ボクシング部無敗の帝王っすか！？欲しいっす！力超欲しいっす！」

「そうか……ならついてこい、調べたい事がある。後俺の事は知ってるようだが、一応自己紹介しておくが俺は真田明彦だ。お前は？」

「ういつす！伊織順平っす！！」

伊織の言葉を聞きながら、真田が携帯電話を開くと同時に影時間が終わりを告げる。すると辺りで棺桶と化していた人間達も普通に行動を再開し始めた。

その光景に伊織はもの珍しそうにキョロキョロと視線を泳がせる。どうやら先程までの事を思い出せていない様子だ。

「あ、あれ……俺は……？確か真田先輩とどっか行くってなって……んん？何かすっげー強い人が……あー何なんだこのもやもや感！もやもやスプリング！？」

「……あんな非現実的なモノ、夢としか思えんだろうな。」

事実初めてあの場……後で説明するが影時間と言う所に入った者は大なり小なりその時の事を忘れるもんだ。

とりあえず、俺についてこい。詳しい説明は美鶴がする」

「んー……良くわかんねえっすけどわかりました〜！」

真田の言葉にようやく落ち着きを取り戻した伊織は、素直に真田が歩きについてくる。

よつやく落ち着いたか、と真田は嘆息をつきながらも先程までの出来事を報告すべく携帯電話から桐条美鶴へと連絡を飛ばすのだった。

仲間が増えるよ！やったねry（後書き）

象徴化……棺桶になる事。

勝手に人のイメージを決めつけるでない(前書き)

何か未だかつて無い勢いでお気に入り登録とか伸びてる
感謝感激雨あられです

勝手に人のイメージを決めつけるでない

「里峰ー、お前なんか部活しねーの？」

とある日の昼休み。

購買に群がる生徒をかき分け見事昼飯を入手することが成功したので、俺は自身の席でもそもそとカツサンドを頬張っていた所、俺の席の前の奴……ただのクラスメイト・佐藤が話しかけてきた。

部活ね……うん、部活かー。

生前というとあれだが前世ではスポーツは結構好きだったよ。特に球技。

ただし部活なんかしてなかったし、どっちかって言うと自分でするよりも観戦する方が好きだったのだが。

前世と比べて確実に運動能力はアップ……と言うか限界突破しているから陸上部とか入れば重宝されるかもなーなんて。

なににせよ俺は図書委員の火曜木曜で限界です。正直これ以上放課後に予定を入れる気は無い。部活なんてもつての他だ。

特に運動部なんか俺の力はチートになってしまふ。他の真面目に鍛えてる人達に申し訳ないわ。

そんな訳でどストレートに否定しよう。

「残念！図書委員で精いっぱいだわ、俺のキャパシティは」

「マジかよ俺とテニス部入ろうぜー」

「はあ？一人で入れよ」

なんでテニス部なんだよ。お前自己紹介の時部活とかしてなかったっつってたる。

どんな心変わりがあつてテニス部なんだよ。

俺の突っ込みに対して佐藤は少しもじもじしながら答えた。つーかもじもじすんな。

「いやさ顔見知りの奴が一人も居なくてさー。俺初心者だからちと怖くて。」

他の奴も誘つただけでもう部活決まったりとかしてんだよな」

「ふうん、興味無いけど。つーかなんでテニス部なんだ？興味無いけど。中学の時もテニスしてたのか？興味無いけど」

「へへ、よくぞ聞いてくれました！実はさ……居たんだよ、テニス部にさ……」

はつきり言つて興味無い。

しかしこういうコミュニケーションと言つのは取つておいて損は無いだろう。昼休みの暇つぶしにもちょうどいいし。

そんな打算しかない思考の下で会話の風呂敷を広げてみたところ、佐藤は恥じらいながらも待つてましたと言わんばかりの表情になる。

何だか知らんが恥じらうな気持ち悪い！しかも俺が興味無いのアピールしてるの完全に無視してやる。

……とりあえず気を取り直して話を進める為に相槌を打つてみる。

「へえ、何が居たんだよ？」

「……俺の、運命の女神がさ」

フリーズ
思考停止なう。

……ああ、成程。一目ぼれって奴か。

でも一人でテニス部に入るのはちよつと気が引けると。

状況は理解した。

だがしかし駄目だな、そんなんじゃ駄目駄目だ。

俺はカツサンドを机に置くと佐藤の言葉に鼻で笑う。

「ハツハツハ」

「何が可笑しい!!」

「これが笑わずにいられるか!本気で好きだったら自分の知らない領分に一人で踏み込む……一人でテニス部に入る位出来ねえでどうして女が振り向いてくれるだろうか!いや、振り向いてくれまい!」

「!?!」

正直テニス部になど入部する気は無い。

故に先手を取る事にする俺。会話のペースを握ってしまえばあとはこっちの物だ。

現に何やら俺の言葉に共感したかのようにしきりに頷いている。

ちなみに俺の言っている事は正直適当だ。

実経験など一切含まれていない出任せに過ぎない。

「素人の状態で経験者について行くってのは大変かもしれない……だがそれに必死で喰らいついてこそ、そんな佐藤の姿にキユンと来る事もあるだろう!!」

「おお！」

「必死に努力した結果、大会なり練習試合なりで上級者に勝てなくてもあと一步のところまで戦い抜いてみる!あわよくば勝利してみろ!!」

そしたらもうその女の子は一発で落ちるね！」

「おおお!!」

「つまり、俺なんか巻き込んでねえで一人で勝負して来い!!」

「おおおっしゃあああ!!!!やってやる!やってやるぜ里峰エエエ!!!!」

「その意気だ、がんばれ(棒)」

もう良いだろう、もう良いでしょう?(懇願)

なんだよこのノリ、何なんだよ、どうしてこうなったんだよ!!俺もちよつと興が乗ったから演技臭くなってしまったけど……:どんだけ乗せられ上手なんだよこいつ。

「それで、お前のお眼鏡に叶った運命の人って誰だ?」

「岩崎先輩だ!」

「ふーん」

興味無いけど。

「ごうしちゃいられねえ、俺は昼休みを生贄に入部届けを出すぜ！」

「おう、頑張れよー」

俺は気の無い返事で佐藤を見送ると、机に置きっぱなしだったカツサンドを再び手に取る。

すると教室から出ていく佐藤と入れ替わりに岳羽ゆかりが現れた。

「里峰君、居るー？」

「要らなーい」

「あ、居るじゃん」

「いえ、要りません」

「何言ってるのよ、もう。ちょっと話あるから付き合っしてほしいんだけど」

その言葉に周囲のクラスメイトはピシリと固まった。

先程の俺の佐藤に対する熱い言葉を聞いたクラスメイト達は「成程な、モテる男の余裕って奴か。ふざけやがって」とか「死ぬ」とか言いたい放題である。

ふざけんなよ、俺は何一つモテてなどいない。

ペルソナが無ければ岳羽ゆかりは俺に見向きもしないし桐条美鶴

もこの教室に来る事は無かった。

つまり、俺に魅力なんて欠片も存在しちやいねえんだ。だからそんな辛辣な視線を送らないでくれ。

俺のハートオブガラスにひびが入るから。

突き刺さる憎々しげな視線を背に受けながら、俺は岳羽ゆかりについて行くことにした。

……そして屋上。

昼休みももうすぐ終わりそうなので早々に話を進めよう。

俺はカツサンドを咀嚼しながらも器用に言葉を発する。

「もぐもぐもぐもぐもぐもぐ」

「食べながらしゃべるんじゃないの。」

それはそうと……有里君が昨日目を覚ましたんだ」

有里君……あの時ペルソナを召喚していた少年……じゃなくて先輩。

どうやら意識不明の状態から回復したらしい。はん、そりゃ重畳だ。

別に顔を知っているだけの相手なので興味無いけど、そんなことを言う為に態々教室まで来たのか？

俺がクラスメイトから睨まれるのと引き換えに顔しか知らない先輩の快復祝いですか？

「それもあるけど……桐条先輩から伝言もあるんだ」

「ほっ」

と思っただら違っらしい。

っーか俺は気にしてないって言ってるんだけど。

あっちはそうではないらしく、未だに引きずっているようだ。

何せ今日にいたるまで桐条美鶴からの接触が無かったんだからな。更にこうして接触するにあたって人を使うあたり本気で顔を合わせづらいのだろう。

それでも接触したいと考える理由は、やはり力が必要だと言う事か。

「頼みがあるから放課後に時間を取れないか、だって」

「ふうん」

俺が納得したように頷くと、岳羽は心配したように「こちらをうかがってくる。

「ねえ……嫌だったら嫌って言っていいからね？」

「……まあ、報酬次第だな」

「へっ？」

「……どういつ事情があるつとも、無条件で命はるなんぞ俺には出来ねえ」

……どの口が言っんだと自分で思う。

だが相手は桐条グループの御令嬢だ。

そんな相手の依頼を受けて、報酬が皆の笑顔なんてチープなモンだったら笑い話にもなりやしねえ。

桐条から報酬として金をもらえるのならそれをそのままストレガに依頼する為の報酬に使えろし。

俺から接触する気は無かったが、こうして桐条側から接触があったと言っ事は力を貸してほしいとかそういうあれだと思っ。

「報酬があるなら、それに見合った仕事をしねえとな」

「……良いの？」

「良いよ〜」

ちよっとお使い行っってくるみたいなノリで了承した所、岳羽ゆかりはずっこけた。

俺、そういうオーバーなりアクション嫌いじゃないぜ。

「ってなんかちよっとな軽すぎない!？」

……まあ、人の為なんていうよりお金の為って言ってくれた方が分かりやすいと思っけど……」

「そっ言っ事だから、放課後は図書委員の仕事あるしそれが終わってからなら空いてるぞ」

すると、俺の言葉に心底意外そっな顔をする岳羽。

「図書委員か! 図書委員が悪いんか! いいや真の悪は吉岡だ!」

「里峰君ってそう言うのサボる人だと思ってた……ていうかそもそもそう言う所に所属してるって思ってたなかった」

「俺もその予定で今まで生きてきたんだが、一度の失敗で全てを破綻させてしまったよ」

「……良くわかんないんだけど」

「寝坊したらその間に押し付けられてた」

「なーんだ自業自得じゃない」

「違う吉岡が俺をハメやがったんだ！俺は断じて図書委員になつたなんて認めねえからな！！」

「とか言っちゃんと放課後に図書委員の仕事をしよつとするあたり、あなたって結構真面目？」

「ふふ、良く言われる。真面目さ競わせたなら全国でも有数の真面目君になれるよって」

「ぶつ、何それどんな大会なのよ……っでもう昼休み終わるし続きはまた今度ね」

ホントだ昼休み終わっちゃう。この後体育あるから着替えにやならんのに。

ちよつと急ぎ足で教室に戻ろうかなと思った所で一つ疑問が。

今この疑問は解消せねばなるまいと先に屋上から立ち去ろうとしていた岳羽に声をかける。

「なあ、岳羽先輩？」

「ん、なに？」

「図書委員の仕事終わったら俺はどこに行けばいいんだ？こないだの寮で良いのか？」

「あ、そう言えば言ってなかったね。いきなり来てもあれだし……
そーだ、私の携帯の番号教えとくから仕事終わったらそこに連絡頂
戴」

ゴソゴソとポケットから携帯電話を取り出した岳羽は俺に電話番号を教えるように促してきた。

ああ携帯ね、携帯。携帯……電、話……？

あ。

「やっべ俺携帯電話持ってねーんだった」

「!?!?」

今まではシャドウとの戦いに明け暮れてたし、携帯なんぞ使う機会が無かったんだよな。

最低限伝えたい事がある人間は周囲に居たから直接伝えればいいって感じだよ。

しまったなこれからこんな感じで携帯の番号とか聞かれた時にありましょんなんて言ったらびっくりされるんじゃないだろうか。と
言うか不便だ。

よりよい高校生活を過ごすためにも携帯電話を買おう。
そう心に誓った俺だったのだが。

「……ひょっとして、里峰君って機械音痴？」

「えっ」

変な勘違いをされてしまった。

・・・

「はふう……」

「どうしたの、里峰君？変な溜息ついて」

図書室。

今日は本の貸し出しや返却をする生徒が少なかった為に暇だ。
故に、今俺に対して声をかけてきた長谷川さんがお勧めしてくれ
た本を読もうかなと思ったのだが家に忘れてきてしまった。

そんな訳で本格的にやる事が無くなったので図書委員の仕事が終
わった後にすべき事を脳内でまとめていたのだが。

↳脳内今日すべき事リスト↳

- ・携帯買う。
- ・岳羽ゆかりから教えてもらった番号に電話する。

とまあ、たったこれだけの事なのだが。

携帯電話など使うのは実に10年ぶりである。

研究所から離れた当初は足がつかないようにと言った意図で携帯電話を所持しなかったのだが、最近ではただ単に必要に駆られる事が無かったからと言う理由だけで携帯電話を買わないまま今を迎えていたのだ。

携帯のカタログでもあれば良いのだがそんなものここには無い。個人的にはあらかじめこれって言う機種を決めてから携帯を買うに行きたかったのだが。

……まあ、適当に機能性を重視したものを選んでもらおうかな。

思考をいったん打ち切り、長谷川さんの質問に答える事にする。

「いやさ、高校生にもなつて携帯電話持ってない俺って何なんだって思ってたさ。

昼休みに電話番号の話になって携帯持ってないつつたら驚かされた」

「へえー、意外ね。あなたってむしろ携帯何台も持ってるかと思ってたわ」

「ちょっと長谷川さんの中では俺に対してどんなイメージなのさ？」

「……プレイボーイ？」

「むしろこんなシャイボーイ捕まえてなんつー事を」

心外だ。激しく心外。

生まれてこの方どこか生まれる前からモテた事なんか無かったの。

そりゃ転生する前はそう言う付き合いもあつたと言えはあつたけど、プレイボーイなんて言われる程遊んじゃいなかったぞ！

なんて反論しようか考えていたところ、別の図書委員の人が声をかけてきた。

「あ、あのー長谷川さん、ちょっと良いですか？」

「はい、どうしました？」

「実は私達この後急ぎの用事があるので、この後の作業をお願いしたいんですけど、良いですか？」

「そうですね、それなら後はやっておきますので大丈夫ですよ」

「すみません、それじゃお先です……里峰君もごめんね」

「気にするな問題無い」

ペコペコと申し訳なさそうにしながら他の委員たちは帰って行った。

まあ別に今日は仕事もないから明日の引き継ぎ位しか残ってないし……。

とここで今までも気になっていた事があつたのでこの場を借りて思い切つて聞いてみる事にした。

「なあ長谷川さん」

「なあに？」

「ぶつちやけ聞くけどさ、なんで3年生まで長谷川さんに敬語なの？ひよつとして月光館学園の女帝なの？」

3年生が敬語を使った所で俺が敬語を使う理由にはならないし、誰に対しても敬語を使う気など毛頭ないのだが。

俺の事はさておき、他の面々の長谷川さんに対する敬語はなんつか、敬う為の語句とは思えない。

「あ、それ聞いちゃうんだね……」

もしかして地雷踏んじやった感じですか？

「嫌なら別に言わなくて良いけど、何となく聞いてみただけだし」

「ううん、里峰君なら良いかな……私ね、あなたより3つ年上なの。留学……と言うか休学してたのよ。この学校の生徒のなかで、誰よりもお姉さんになっちゃった」

「俺としては年上の方が良いなあ」

「……だから、クラスメイトにも上級生にも丁寧語を使われ……つて里峰君はそんな事で態度を変える人じゃ無かったよね」

「その通りだ。俺を誰だと思っただけやがる！」

なんで俺はこんなに偉そうなんだ。

そんな俺なのに長谷川さんは柔らかな笑みを浮かべている。なんかスミマセン。

「ふふ、ありがとね。他の人にもそういう風に接してもらいたいん

だけど、もう諦めちゃった。

……そうだ、この後携帯電話買いに行くなら私も着いて行っていないかな？私もそろそろ機種変しようかなって思ってた」

「ん、構わんよ。それじゃさっさと仕事終わらせようか」

「そうねー」

長谷川さんは1歳年上ではなく3歳年上らしい。

あれだな。ノープロブレム無問題だな。むしろばっちこいって言うか…

…って何の話だ。

明日担当の委員たちの為の引き継ぎ作業を終えた所で携帯ショップへ向かうべく学校を後にした。

…

「そんな多機能そんな携帯買って大丈夫なの？」

「使う機会が無かっただけで別段機械に弱い訳じゃない」

「じゃあ赤外線とか使えるの？」

「余裕だっつーの」

夜。

携帯電話を入手した俺はあらかじめ岳羽に聞かされていた電話番号に電話をした。

そうして岳羽と合流した後に桐条の待つ寮へと向かう事になったのだが、まずは岳羽の俺に対するイメージを払拭する事から始めよう。

俺は自身の携帯からアドレスと電話番号を送信すべく赤外線通信の欄を選んだ。

岳羽の携帯と通信を交わすと送信成功の文字。ドヤアと言わんばかりの笑みを浮かべていたら、岳羽は何やらにっこりと微笑んでいる。何だその母親のような慈しむような眼は。

「良く出来たね、携帯ショップの人に聞いてきたの？」

「……」

成程ね、一度定着したイメージは中々覆せないと。

いや別に態々否定する必要は無いとは思っただけどさ、妙なイメージ持たれるのもなんか癪だし。

……まあ、別に良いか。勝手に勘違いされる分には損は無いし。

とか何とか、他愛もない話をしながら歩いているとようやく目的の場所に辿り着いた。

「ここね、あなたも1度来たと思うけど」

「うむ」

さて、如何に交渉を有利に進めるか。

先日桐条と話した時は何の証拠も持っていなかったからな。

あの時の桐条を見る限りでは証拠を提示するまでもなく実際に行われた事だと察していたようだが。

10年前、研究所が火に沈んだ日。

俺はあの時ストレガの連中に対シヤドウ用特殊兵装の設計図と俺らに施した実験の内容を記したデータを持って行かせた。まさに火事場泥棒。

今回必要なのはその後者。実験内容に関するデータを開示する事で、少なくとも桐条の闇と密接していたと言う事の証明としよう。

まあそれは万が一桐条が俺の言う事を信じていなかった場合の策だ。

「それじゃ着いてきてね」

岳羽は俺を先導して寮の扉を開いた。

そこには桐条とこないだ髭男の保護を頼んだ男ともう一人……見知らぬおっさんが居た。

「やあやあよく来たね。僕は幾月修司。月光館学園の理事長を務めさせてもらってるよ。」

それじゃあそのソファアにでも腰を落ち着けてくれ」

見知らぬおっさんは俺の姿を確認するとともに陽気な挨拶で俺を迎え入れた。

幾月修司……幾月修司ね、うん。

兎にも角にも名乗られたのなら俺も名乗り返さねばなるまい。

俺は幾月に言われるがままにソファアに座ると共に簡単な自己紹介をする事にした。

「わざわざご丁寧にどうも。俺は里峰竜児だ」

「うんうん、里峰君だね。あ、紹介が遅れたね。君も知ってると思

うがこちらが桐条美鶴君。そしてこちらは真田明彦君だ」

「お前とは何度か顔を合わせる事があったが自己紹介は出来ていなかったな。真田明彦だ、よろしく頼む」

「どーも、お加減はいかがですか？」

「ああ、俺としては十分戦えるんだが「明彦」……このように、美鶴がうるさくてな」

「あつはつは、力があるのにそれを振るう機会が与えられないってのは辛いですよね。俺も入院してた時期があるから分かるわ」

さてさて、これで互いに自己紹介も終わったわけで話を始めたいわけだが。

「岳羽先輩も話聞いてくの？俺としてはどっちでもいいんだけど」

「え？駄目なの？」

下手したら桐条の裏を見せる事になるからなあ……。

ただでさえ桐条グループのご令嬢が率いてると言うのに、それを見せたら不信感を抱かれる事請け合いだろ。

俺としちゃギスギスした職場で働きたくないからそう言うのは余所でやってほしい訳で。

どうするのか、と言った視線を桐条に送った所、意を決したように桐条は口を開いた。

「お前もそこに座れ、岳羽」

「あ、はい」

良いのか？身内の汚いところを見せる事になるけど。

……聞くまでもないか。むしろそんな事を聞くのは桐条に失礼と言うものか。

ならこつちも遠慮は要らないだろう。

「で、だ。こうして会話の場を設けたと言う事は、俺の力を借りた
いと言う事か？」

俺の正面に向き合った桐条は迷うことなく頷く事で肯定した。

「そつだ。私は君が欲しい」

「「ぶつ！」「」

手元に置かれたお茶を一口含んだ瞬間の不意打ち。

先手を取ってきたか、やるじゃないか桐条美鶴。流石次代桐条当
主となる予定の女。

俺どころか味方すら巻き込む一撃、感服した。

「な、なあ美鶴？その言い方だと語弊を招くと思うんだが……」

「む、そつか？」

思わぬところで先手を取られてしまった。

しかも狙ってやっていない辺り末恐ろしいものがある。

兎に角、息を整えよう。

俺は一旦心を落ち着けると、再び桐条と向き合った。

「話を進めようか……まあ別に力を貸すのはやぶさかじゃあない。だが、俺はお前らの仲間になんぞなる気はない」

「……どういうことだ？」

力を貸すのに仲間じゃない。桐条は俺の言った事をよくわかっていないようだ。

「そうだな、時給換算と仕留めたシャドウの数による出来高。どっちが良い？」

「……フリーランス 傭兵 として雇ってくれ、と言う事が」

「そのとおり。俺としては出来高だとありがたいが」

「良いだろう。君も金銭は何かと入り用だろうからな」

「サンキュー、助かるぜマジで」

良いね、その決断力……当主には必須技能だろうよ。

俺は内心これで貯金とか出来るとか所帯じみた事を考えながら桐条に感謝を示した。

・・・

(……私って、別に居ても居なくてもよかったよね？なんで里峰君達はあんな態度とったんだろ)

里峰達が契約の条件を詰めている中で、岳羽は一人悶々としていた。

勝手に人のイメージを決めつけるでない(後書き)

P4の林間学校の回めちゃくちゃ笑った
次回はくぎゅ回と言う事で楽しみだ

狩る者と狩られる者（前書き）

何か勢いで書いてるからどうかで矛盾みたいなのが起きてる気がする

狩る者と狩られる者

幸せになれよ、クソガキ。

火の海に沈んだ研究所。

そこから少し離れた橋の上。

女は死神に誘われ、その命を散らした。

ただ無為に無意味に研究者達に身を委ねる日々の中、俺は一体彼女に何をしてやれたのだろうか。

幸せになる。幸せとは何だ？分からない。

分からないが俺の幸せはもう随分と歪んでしまっていたのだろうか。

その時だ。

俺が一つの を交わしたのは。

...

「……夢、か」

また随分昔の事を夢見たものだ、と俺は自嘲した。すっかり忘れてたつもりだったのに……いや、ただ単に思い出すまいと逃げてただけなんだろうな。

頬には涙の跡が残っており、思わず舌打ちをしてしまった。昔の事を思い出して泣くとは、我ながら随分女々しいな、オイ。

いや、女々しいという表現は男女差別だな。最近の女性は強気なのが多いし。

俺は喉が渴いたので冷蔵庫から水を取り出す。喉を通りぬける清涼感が気持ちいい。

さて。

のんきに昼寝をしていたら夜になっていたわけだが、本日は4月19日、日曜日である。

休日は休むべきだと考え日中は特にする事もなく部屋でだらけていたのだが、夜になっても相変わらず影時間が到来するまで自身の部屋でだらけるつもりだ。うん、たまにはそう言っ日があっても良いと思う。

それはさておき、桐条美鶴ら天然ペルソナ使いの集まりの事を特別課外活動部と呼んでいるらしい。その特別課外活動部に力添えをする事になった俺は（飽くまで傭兵と言う立場なので人寮する事は無いけど）、あいつらがタルタロスに行く日はそれに加わる事になった。

つつても俺はほぼ毎日タルタロス行ってるからそこにあいつらが居るか居ないかという要素が加わっただけである。

たっただけの事で賃金が発生するのだから実にうまい。

ところで話は変わるが、ゴールデンウィーク前日の日に『狩人』と戦うことにした。

この『狩人』と言うのは人型にかなり近いシャドウで二丁の拳銃を手に持ちタルタロス内を徘徊している。以前……確か6年前に1度だけ対峙した事があるのだが全く歯が立たず、タカヤ達の助けが無ければそこでデッドエンドになっていたと思うほどの強敵だ。

その後何度か『狩人』を見かける事はあったのだが勝てる気がしないとその都度逃げ帰っていた。

6年経った今でも勝てる気がしないと言うのは如何なものかと自問するものの、それ程に強力で強烈で凶悪だったのだ。

転生して以来、二度目の本気で死ぬかと思っただ出来事である。

それはさておき、なぜゴールデンウィーク前日なのかと言うと、怪我をする可能性を考慮した上での日程である。

ようは休養に充てたいと言う事だ。その辺に關してはお茶を濁した感じで桐条にも伝えてあるので戦列から離れる事に了承をもらっている。

奴は俺と同じく拳銃を使いながらも圧倒的な威力をもつスキルを連発してくる。

だが、戦いの場はタルタロスと言う名の迷宮……とはいえ室内と言う場所であり、それを上手く利用する事が出来れば奴に食らいつく事も出来るのではと考えている。

それで死ぬようなら、俺はそれまでの人間だったってことだ。

(……死神、か)

思わず手に力が入る。

あの時…… 10年前、俺は何もできなかった。

この身体はシャドウを殲滅する為の物なのに、あの死神に対して傷一つつけてやる事が出来なかった。

結局何もかも失って、八つ当たりのようにシャドウを狩って……。

あの頃から何一つ変わっちゃいないと言う錯覚を覚えそうになる。

10年と言う時を経て何事も変わらないなんて、俺の10年は一体何だったんだと思う事がある。

だからこそ、『狩人』と戦うのだ。

少なくとも、強くなったと言う事を証明する為に、誰に見せるわけでもなく、ただ自分の為だけに。

とここで、俺の中で引つ掛かる何かを感じた。

(……傷一つつけられなかった。確かにそうだ、あの死神は俺の意識が飛ぶまでびんぴんしてた)

なら、俺はどうやって戦っていた？銃撃？剣撃？それともペルソナ？

(そりゃ、ペルソナでも拳銃でも……？)

何か引つかかる。確かに戦ったはずだ。それだけは確実だ。

力のこもった弾丸を装着し、殺意の撃鉄を起こし、ただ感じるままにシャドウを殲滅すべく引き鉄を引いた……はずだ。

だと言つのにその光景が出てこない。記憶障害か何かだろうか。

確かに戦ったという自覚はあるのに、その映像が脳裏に再生されないのだ。

(……まあ、どうでもいいか)

思い出せない事を考えていても仕方ない。

俺は影時間が到来した事を確認すると、タルタロスへ向かうべく移動を始めるのだった。

•
•
•

「……ケツアルコアトル、マハガルダイン」

持ち得る中でも最大級の攻撃範囲と威力を誇るスキルでシャドウを一扫する。

普段ならこの身を以ってじっくりと戦うはずだったが、どうにもそんな気分じゃない。

いつもほどの昂りも無いし、さっさと終わらせてもう一度寝よう、と言う気分にはならないのだ。

だったらタルタロスなんぞ行くの止めてもう一度寝ればよかったのに、とも思うのだが。

……タルタロス行かないとそれはそれで落ち着かないんだ。最早病気だろう、これ。職業病とか表現するのが一番近いかな、お仕事じゃないけど。

(……いや、中毒だな)

と、脳内で突っ込みを入れつついつものように16階の柵がある所まで登っていく。

何の事は無い、いつもの戦闘と同じだ。殴る、蹴る、投げる、斬る、撃つなんでもござれだ。

そうしていつものようにシャドウの巣を荒らして回る。

うむ、いつも通りだ。

だと言っのに何だろうか、この胸騒ぎは。

目の前には15階へ進む階段がある。

確信に近い予感。ここで引き返せと警鐘を鳴らしている。

しかし、この足は止まらない。止められない。

俺は死刑台を上るような気分で階段の上に達した。

「！」

成程、嫌な予感とはこの事か。

15階。

そこには1匹のシャドウも居なかった。

どこかに隠れているとかではなく、気配すら感じない。

そしてその状況下において、高確率で奴が現れると今までの経験上分かっている。

とはいえそれにもタイムラグが生じる為、奴が現れる前にさっさと階段を登り切れば良いのだが。

「来いよ、狩人」

ジャラリ、と鎖の音が鳴り響いた。

それは『狩人』が身にまとっている鎖の音。

その音は徐々に大きくなり、俺の所に近付いていると言っ事がすくに分かる。

急に変な夢見たと思ったら、これの予見でもしていたのだろうか。まあ、そんな事はどうでもいい。

(初手はもらっておきたい……！)

まずは先手必勝。

音の聞こえた方向からして俺の正面に見える曲がり角から出てくるだろう。

挨拶代わりに持ち得る弾丸を眉間にぶち込んでやる。

しかし、俺の目論見は成功しなかった。

「ツツッ!」

真上から感じた「死」。

俺はそれをただ真正面に転がる事で回避した。

それは今まで培ってきた経験ではない。

それは今まで鍛え上げてきた力ではない。

ただ単に偶然である。

自身の影に違和感を感じ、来るかもわからない攻撃を回避したのだ。

しかしそれは正解で、俺が居た地点には狩人が佇んでいた。

まるで回避するのが当然だと言わんばかりに、狩人は二丁拳銃をこちらに向ける。

俺は呼吸する事も忘れて足を動かした。

跳躍し、地を転がり、壁を蹴り、ただ我武者羅に狩人の照準を定めさせないようにする。

俺が持ち得る運動能力の全てを發揮し、空間内を掌握した。

狩人は相も変わらずその場にとどまっております、何と云うか正直何

をしてくるかわからない。

(……だったら、何も出来ねえようにするしかねえだろうが!!)

両腕だけを狙って弾丸を放つ。

一撃で倒す事が不可能なのだから、こうして攻撃手段を奪っていかないと、くしかない。

それ故の局部破壊。

壁を走りながら狙撃。終わればすぐに回避行動。

その壁を蹴り地面に片手を付き側転のような動きで反対側の壁へと向かいながらも、もう片方の手では狩人の腕を狙撃。

何をすることも狩人の腕を狙う。しかし相手は俺が思う中でも最強に分類される敵。

何発か狩人の腕に……特に関節部を狙ったの狙撃だったのにも関わらず、さして効果が見られなかった。

強いて言うなら銃弾が直撃したら少しだけ仰け反る程度か。

それでも関係ない。雨水だつて岩を穿つ事が出来るのだから、狩人の腕が砕けるまで銃弾を叩きこむまでだ。

俺は流れるような動作で銃弾を込める。しかし目だけは狩人を捕えていた。

狩人がこちらに銃を向けたのを視認すると共に引き鉄を引く。

銃弾は狩人の腕に再び当たり、狩人の狙いが逸れる。

「うらアアアアアアアア!!」

今がチャンスだ。

俺は反対側の壁へ到達すると同時に壁を蹴り跳躍する。

狩人の真上まで飛び上がった俺は全力で大剣を叩きつけた。

流石にそれで殺れるとは思わなかったが、手傷の一つでも負わせられると思ったのだが。

甲高い金属音が鳴り響く。それはいつも感じるシャドウを斬った感覚ではない。

「チツ……そう簡単にや殺らせてくれねえ……か!!」

狩人はその二丁拳銃を交差させそれを防御としていた。

しかし、それは防御をする必要があると判断したと言う事に他ならない。

「だったら話は簡単だ……攻撃が通るまで斬りゃあ良いんだろオが!!」

先程の攻撃は防御され弾かれてしまったが、一筋の光明が見えた。俺は地に着地すると共に再び空間内を可能な限り飛び回る。

動かない狩人。

俺はそれがとても不吉な……何かドギツイ一撃が来るのではないかと言う前兆のように思えた。

そして狩人は、おもむろに拳銃を天へ掲げる。

そこに俺は居ない。奴は一体何を狙っている？

ふと以前の戦闘を思い出した。

あれは奴が何かしらスキルを使う時の動作で、あの時は確かメギドラだった……!!

逃げ場が無い。

(……いや、1つだけある)

どうするかなど、考えるまでも無かった。

俺は最短距離をまっすぐ駆けた。それしか間に合う方法が無かったからだ。

数瞬の時をおいて、空間は爆発で埋め尽くされた。

そして訪れる静寂。

先程の爆発が嘘のように戦場は無音に包まれていた。

俺はなんとかかんとか一命は取り留めている。取り留めてはいるのだが……。

「……」

今現在、狩人にしがみついている。爆発を避ける方法、すなわち狩人の懐に入り込む事だ。

右手で拳銃を狩人の頭に突き付け、もう片方の手で狩人の左手を抑え、ケツアルコアトルで狩人の右手を抑えさせた。

正直、抑えるので精一杯です。

ヤバい腕がプルプルする。引き金を引く握力すら狩人を抑えるのに使われていると言うか、正直両手で押さえないと無理だ。

すると突如として狩人から力が消えた。どういうわけだと訝しがる俺だったが、その原因がすぐに分かった。

(影時間が終わる　　!?)

このままでは俺はタルタロスに取り残されてしまう。

俺は狩人から飛び降りると、たまたま見えた窓のような空間から飛び降りた。

ついでに狩人に一発ぶちこもうと拳銃を構えたのだが、そこには既に誰もおらず。

「勝負は預けたって事か……舐めやがって」

俺が背を向けた時点で攻撃することもできたはずだ。

それをしなかったのはいずれ対峙する事が来るのを分かっていたからなのか、はたまたただ単に見逃してもらっただけなのか。

何にせよ分かる事は一つ。

「死ななかった」

我ながら無様な戦いっぷりだと思う。

しかし、生き延びた。生き延びてやった。

それも誰かの助けを使わずに。

それも怪我を負って入院せざるを得ない状況にならずに。

15階から飛び降りた、と言う事で当然宙を舞っている状態。

俺はタルタロスが学校に戻る間、その光景を空中でぼんやりと眺めていた。

・・・

翌朝。

死にそんな目で俺は学校へ向かっている。

流石にあんな事があった後に元気に学校に向かう事など俺には出来ない。無理だ。

しかし学校には頑張っ行って行っていると言う事だけは評価してほしい。

週の頭の月曜日。

前世の時からそうだが、この月曜日は憎たらしい事に毎週毎週やって来る。

この憂鬱は精神年齢が何歳になろうとも衰える事が無い。

大体、奨学生で成績を保たねばならんとはいえ、一度は高三までの内容を修めているのだ。

いくらこつちに生まれてからのブランクがあるとはいえ、一度教科書を読めば結構思いつけるわけで、はっきり言ってテスト前だけ頑張れば良いんじゃないかなと思っっている次第である。

いや、それはどの生徒も同じ事か……まあなんだ、結局いくら御託を並べようと学校に行かざるを得ないと言う状況に俺は居るのだから、諦めるしかない。

諦めるしかないんだが、こうして内心愚痴る分には一向にかまわんだろう？

「月曜日は消えればいいよー火曜日も消えればいいよー

水曜日に木曜日に金曜ー消えーれば最高ー」

「なんつーやる気を削る歌を歌ってんだお前は……」

すると背後から俺の歌に駄目出しをする声が聞こえてきたので後ろを振り向く。

そこには何かテニス部での調子はどうか聞いてほしそうな顔をし

ている佐藤が居た。激しくうざい。

「何だ佐藤か、愛しの岩田先輩を落とせたか？」

「岩崎先輩だ！やー、それがさあ、初心者向けのラケットとかガットとか色々教えてもらうことになってさあ！これってデートだよな！？」

「そーかそーか、頑張れよ」

「おう！じゃ、俺朝練あるから先行くわ！」

どうやら佐藤はテニス部に入部して以来頑張っているようだ。

だからなんだと言われればそれまでなのだが、佐藤は日々を楽しんで生きてるらしい。

「何だかなー」

もし影時間が消えたでしょう。

その時俺に何が残っているのか。

幸せって何なんだろうな。

シャドウが居なくなつた時、俺が幸せを感じる瞬間が来る事があるのだろうか。

「まあ、その時が来たらその時に考える事にしようか」

生きて帰れた。とりあえずそれだけは喜んでおこつ。

生を諦めた前回と違う。それはすなわち成長の証なのだから。

狩る者と狩られる者（後書き）

次回ぐらいからP3本編にも本格的にからんで行くことになりそうです

仄暗い奈落の底から（前書き）

P3の主人公……主人公故にキャラがつかめないと言つか喋る機会
がまるでないぞ……！？

仄暗い奈落の底から

4月19日。本日は日曜日である。

寮の一室で有里湊は自身のベッドに横たわり思考を重ねていた。脳内での議題は「影時間とペルソナ」である。

有里はあの日の夜以降1週間ほど意識不明の状態で入院を余儀なくしていたのだが、土曜日に晴れて退院する事が出来た。

その土曜日の夜に有里は桐条美鶴らから影時間やあの時彼が召喚したモノについての説明を受け、そしてその影時間を消す為に協力することとなったのだが、あの時見た異形を相手取るらしく有里は内心面倒くさいと思っている。

しかし、有里は一つ気になる事があった為、桐条らの頼みを渋々ながら引き受ける事にしたのだ。

記憶が曖昧ではあるが、その曖昧な記憶をたどる限りでは確か、大剣を持った男が何やら文句を言いながらそのシャドウとやらを倒したはずだ。

そしてその男の顔を見て何かデジャヴのようなものを感じたのだが、どうにも記憶が定まらない。

何にせよ影時間と関わりを持つのであればいずれ分かる事もあるかも、と考えた故の判断である。

とはいえあの異形を見る限りでは恐らく命を賭ける事になりそうな気がするのだが、どうにも周りの人間達は些か楽観的な気がする。

(……どうでもいいや)

結局、シャドウとの戦いを知らないのだから後になってみなければ

ば分からない、と考え有里は思考を打ち切った。

すると下の階から誰かを呼ぶ声が聞こえる。

それに耳を傾けると声の主がすぐに判明した。

「あの一、私だけどーちょっといいー？」

岳羽ゆかりだ。何か用があるらしい。

とりあえず岳羽の言われるがままにラウンジへと降りると、岳羽と真田明彦が玄関の前で待っていた。

何の用だろうと首をかしげるものの、どうやら岳羽も真田に呼ばれただけらしくこれから何があるのかは真田しか知らないらしい。

「わざわざ済まないな、ちょっと紹介したい奴がいるんだ」

呼ばれた理由は誰かを紹介したいとの事だ。

その紹介したい奴と言うのはどうやら玄関の先にいるらしい。

……しかし、玄関は開かれる気配が無く、少し待つと真田が玄関の先に向けて声をかけた。

「……おい、まだか？」

「ちっと待つ……重っ……！」

催促の言葉を受け、玄関の先に居ると思われる人物は慌てたように返事を返す。

ガコガコツ、と地面に何かをぶつけたような音を響かせながら玄関が開かれる。

玄関から現れた男を見て、岳羽が驚きを示した。有里はどうでも

よさげに見える。

「順平！？……なんであんたがここに！？紹介ってまさか……」

「恐らくお前達も知ってると思うが、こいつは2・Fの伊織順平だ。今日からここに住む」

「へへ……どーも、伊織っす」

「今日から住むって……嘘！？何かの間違いでしょ！？」

ガラゴロと重そうなスーツケースを転がす音と共に伊織順平は姿を現した。

その荷物を見る限りでは、どう考えてもお泊まり会なんて物ではなく普通に入寮するという事だろう。

驚く岳羽とぼんやりしている有里を置き去りに、真田は話を進める。

「この前の晩、偶然見かけたんだ。

……最も、その時点で既に里峰の奴に救助されていたがな」

「里峰君……どこにでもいるね、何か」

こんなところで里峰童児の話題が上がった事で、岳羽は少し苦笑しながらも状況を受け入れたようである。

一方で「里峰」なる人物を知らない伊織は、会話の内容から自身が影時間に初めて迷い込んだ時、ヒーローのように現れてシャドウをちぎっては投げを地で行っていた男の事だと当たりをつけた。

「里峰ってまさかあの時のめちやくちや強かった人の事っすか！？」

名前知ってるって事はここに住んでるって事っすか?!
クーツ!!どうやってあんな風になれんのか伝授してもらいてー
!」

一人興奮する伊織。

しかし悲しいかな、目的の人物はここにはいない為、すぐさま否定の言葉が伊織を貫く。

「残念だったな伊織。奴はここにはいないぞ」

「な、なんだってー!!!?」

「あ、でもこれからはタルタロスに行くのに協力してくれるんですよね?」

「……タルタル?何それ」「……?」

タルタロスという聞きなれない単語を放った岳羽に対して伊織と有里は首をかしげた。

どうやら真田はそれに関しては今説明するつもりだったらしく、岳羽の言葉を肯定しながら口を開いた。

「ああ、そうだ。立場としては傭兵のような形になる。必ずしもあいつが居るとは限らないが、あいつが居る時は戦い方を学んだ方が良くもしれんな。

それに俺達も頭数が揃ってきたしな。タルタロスには絶対何かがあるはずだから、俺達はその何かを探しに行くんだ」

「……謎を解くカギ、ですか……あれば良いですね……」

はつきり言って目的が不明瞭である。

里峰はシャドウと戦う行為そのものに意味を見出している為タロタロスに行くのも領けるが（ある意味領けない）、あるかもわからない何かを探しに行く、と言うのは流石にどうしろと言うのだと疑問を呈さざるを得ない。

要領を得ない、と言った表情をする有里や伊織に対して真田は言葉が続けた。

「むしろ無いと困る。あんな怪しい場所に何も無いなんて笑い話にもならんからな。

……それで、詳しい話は明日理事長からする事になっているから、忘れるなよ」

真田の言葉によってその場は解散となり、各々が自身の部屋に戻る中で有里は一人里峰と言う男について思いを馳せていた。

（……どうでもいい）

割とすぐに思考は打ち切られたが。

・・・

翌日の夜。一同は寮のラウンジに集まっていた。

昨日真田明彦が言った通り、理事長……幾月修司から話があるから夜はラウンジに集まれと桐条美鶴に言われた為である。

有里湊がラウンジに来た時点で、他の全員が揃っていた。どうやら有里が最後らしい。

「よし、全員来たようだね」

彼の姿を見た幾月は満足そうに頷くと、話を始めた。

「我々の擁するペルソナ使いは長い間桐条君と真田君の2人だけだった。

……どうやら里峰君とは入れ違いになっていたみたいだね。けど、最近は一気に仲間が増えて今や5人になっている。

そこでだ。今夜0時から、いよいよタルタロスの探索を始めようと思っている」

「あのー、昨日もタルなんとかって聞いたんすけど、なんなんすかソレ？」

「タルタロスよ。てか順平、あれマジ見たことないの？超目立つのに」

「はて……？」

伊織の言葉に岳羽ゆかりが呆れたように返答する。

確かに、月光館学園と言う地が一瞬にして頂上の見えない塔に変貌するのだから目立たないはずが無い。

真田が言うには伊織はつい最近影時間に迷い込んだらしいので、ペルソナの存在を知ってから日が浅いという意味では仕方のない事かもしれない。

それを踏まえた上で、幾月は伊織のフォローに回る。

「見てなくても仕方ないさ。何せあれは影時間の中にだけ現れるも

のだからね」

「影時間の中……だけ？」

それでも伊織はよくわかっていないようだ。

「シャドウと同じって事だ。面白いだろ？」

それに、あそこはシャドウの巣だ。俺達のスキルアップにもうってつけの場所さ」

百聞は一見に如かず、と言う事で後で見たら良いだろうと真田はタルタロスについて要約した。

しかし、シャドウの巣と表現されて影時間初心者な伊織が驚かないはずが無い。

まさか虎穴に入るような真似をいきなりする事になるとは思わなかったからだ。

「お、おー。シャドウの巣っすかー……」

タルタロスを楽しそうに語る真田を見て、伊織は少し引いた。そんな真田を見て岳羽は心配したように尋ねる。

「……先輩、まさかとは思いますがその体で行くんですか？」

「明彦は怪我が治ってないから、同行はしてもらったが探索は無理だ」

「……分かってるさ」

今まで黙っていた桐条美鶴が口を開く。恐らく、ここで釘をさしておかなければ真田は確実に特攻を仕掛けるからだ。

桐条の釘刺しを受けた真田は、非常に悲しそうな表情を浮かべながら桐条の言葉に同意した。

恐らく、何も言われなければしれっと探索に加わっていたに違いない。

「まあ、深入りしなければ真田君抜きでも大丈夫だろう。

それに、今日は彼も来てくれるみたいだからね」

「里峰君ですか？」

幾月の言葉に岳羽は少し安心した表情を浮かべながら問う。

何せ少ししか見ていないとはいえ、強さの片鱗を見せつけられたのだからその戦力は計り知れないものがある。

未知なるタルタロスに於いて、これ程頼れるものは無いだろう。

「その通りだ。とはいえ、彼に頼りきりになってはいけないよ。

シャドウを相手にしていく以上、タルタロスの探索は避けて通れないからね」

「大丈夫っす！先輩の分は俺がキツチリ、カバーしますって！」

「なんかふあんだな……」

里峰竜児と言う多大な援軍があるとはいえ、結局は自分達も戦わなければならない。

真田と言う戦力が欠けた中で、自分を含めた新人の3人がどれほど戦えるのだろうか。

ここまで一言たりとも口を開いていない有里は、今現在の戦力をぼんやりと計算していた。

話は終わった。後は影時間を待つだけだ。各々が気合いを入れる中、桐条は幾月に尋ねる。

「では理事長はどうなされますか？」

「僕はここに残るよ。ホラ、僕が行ってもペルソナ、だせないしさ……」

桐条の問いに答える幾月の表情はみるみる消沈して行く。

そう。影時間に棺桶にならないからと言ってペルソナを使えるかと問われれば必ずしもそうではないという回答になるのだ。

作戦室へと向かう幾月の背中へ、まさしく哀愁漂う中年のおじさんだった。

そして時は少し飛び、0時直前。

特別課外活動部の面々は月光館学園へと赴いていた。

そこで何が起こるのか全く把握していない伊織順平は辺りをきょろきょろと見回すと、続いてきょとんとした。どうして学校に？とも言いたげな表情だ。

「えっと、ここって俺らの学校じゃ……？」

「見てればわかるさ。ほら、0時になるぞ」

事態を飲み込めず軽く混乱している伊織を真田は一言でたしなめる。

すると真田の言つとおり0時になった瞬間。

世界は反転した。

他にその現象に似合う表現が見つからない。

それ程までに、生と死が、心と体が逆転していた。

今までただの学校として佇んでいた建物は機械仕掛けのよう
にその構造を変え、明らかに学校の体積を越え更に上へと伸びていく。

初めて見る現象に伊織はおろか有里すら幾ばくかの驚きを示して
いた。

そうして完成した、アートのような塔。

「これがタルタロスだ」

タルタロスを見上げるように見つめていた一同の背後から、一人
の男の声が聞こえてきた。

思わず一斉に振り返ると、そこには。

まず最初に、岳羽が拍子抜けした表情で口を開いた。

「なんだ、里峰君か」

「なんだとはなんだ！」

思わせぶりな登場の割にイマイチ閉まらない里峰竜児の姿があっ
た。

春ののどかな季節とはいえ深夜は肌寒いだろうに、半袖のTシャ

本当は自分が先陣切って行きたいだろうに、人材が足らずにサポートに回っているようだ。

里峰は内心ちよびっとだけ同情しながら（桐条が戦えない事にも、続いて戦力を把握すべく共に闘うと言う3人の武装を確認し始めた。

「はあん。そりゃ別に構わねえけど……こいつらどのくらい戦えるの？」

ええつと、まず岳羽先輩は武装見る限りじゃ弓か……で、有里先輩だったか？」

「うん、そうだよ。僕は有里湊、よろしくね」

「有里先輩ね、了解了解、よろしく頼む。」

んで有里先輩と髭の人……あれ？髭の人なんでここに居んの？」

「里峰さんっすよね！？今日はよろしくお願いするっす！！俺伊織順平、ヨロシクな！！」

「え？ああうんヨロシクね。伊織先輩。俺後輩だからさん付け要らないし、敬語も要らん。」

んで、2人が扱うのは近接武器で良いのな？」

「そうだね」「そのとおり！バツサリ斬っちゃうよ、俺！」

岳羽が遠距離でサポートに周り、有里と伊織で近接で戦う。

シンプルだが極まれば最高の布陣になる事だろう。

「桐条先輩から話を聞く限りじゃ3人とも実質初陣って事になるみたいだし、まあとりあえずテキストに1階を回ってみようか」

何となく遠足気分で先導する里峰だったが、ここで一つある事に気付いた。

(……周りに味方が居たんじゃ思うように戦えなくね?)

例えば銃の乱射も出来ないし、シャドウを振り回す事も出来ないし、大剣で回転切りだって出来ない。
下手したら味方を巻き込んでしまうから。

なんだこれは、フラストレーション溜まる一方じゃねえか!! 舐めとんのか!!

(……まあ、流石に昨日の今日でタルタロスだわーい! なんて気分にならんし丁度いいか……)

前日に狩人との死闘を演じた里峰は、正直面倒くさいと言う思考で頭が一杯になっていた。

...

4月20日、月曜日。

昼休みの事だ、俺が桐条美鶴に呼び出されたのは。

またもやクラスメイトからの辛辣な視線を背に浴びながら俺は桐条と共に屋上へと向かった。

「すまないな、わざわざ呼び出してしまって」

「構わんよ。それで、呼び出したって事はあれか?」

「そうだな、あれだな。今日の夜、私達もタルタロスへ向かう。君にも協力してもらいたい」

「まあ、シャドウと戦うつてのが俺の契約だからな。いくらでも戦ってやるよ」

「感謝する。それでだな……」

ん、まだ何かあんの？俺昼寝の続きをしたいんだけど？桐条が何かもじもじしている。一体何が始まるんです？すると意を決したように桐条が口を開いた。

「今まで言いそびれていたんだが……改めて謝罪をしたい。すまなかった」

それは見事な一礼だった。

全日本マナー検定協会でも一発で合格をもらえるのではと云うほど美しい一礼だった。

謝罪するという気持ちが前面に押し出されているそれは、謝罪以外の何物でもないと言える謝罪だった。

……何の話だ。

気を取り直して、とりあえず頭を上げるよう桐条を促す事にした。

「あのな、別に俺はもう良「私が良くないんだ。これは、私なりのケジメだ」……さいですか」

「それでだな。君の為に何か出来る事があればいつでも言ってくれ。桐条グループが総力を挙げて実現してみせよう」

わーおそりやまた随分大きく出たな……つまり、桐条の後ろ盾を得たと言う事か。

正直別に何かしたいわけでもないのに、そんな事言われても困る。

「……そうだな、桐条先輩は多分、影時間を消し去りたいんだろうけど、俺はシャドウを倒す事でしか生を実感できない」

ビクリ、と桐条の表情は固まる。俺は追い打ちをかけるように言葉を紡いだ。

「……シャドウがいなければ、俺は死んだも同然だ」

「ッ……！そんな事……あるはず無いだろう……君はこうして今も生きている……！それは私が保証する……！！」

俺の言葉に悔しそうに震えている。

桐条美鶴と言う女は、誰かの為に涙を流せる、そう言う良い女だった。

……はあ。少し意地悪が過ぎたな、反省反省。

「……なら、影時間が消えた時、俺がなにをして生きてけばいいか探すのを手伝ってくれねえか？」

生憎と碌な趣味も無くてな。老後が不安になる毎日なんだよ」

「……！！ああ、いくらでも手伝ってやるとも！！」

その時の桐条の喜びようはまるで小さな子供のようで、その笑顔にちょっぴりドキッとしたのは内緒の内緒だ。

「とりあえず、趣味の手始めにバイクとかどうだ？風を感じたくな
いか？オーバードライブしたいと思わないか？どうだ？ん？」

「誰だお前！」

追記、桐条美鶴はバイクの事となると人が変わるらしい。

初めてのアレ

タルタロスに入ると、いつもの気味の悪いオブジェのような階段のあるエントランスが俺達を出迎えた。

いつも思っけど一見するとホラーゲームにでも出てきそうな洋館のロビーだよな。

「しかしこんなデカイ塔が丸ごとシャドウの巣って……」

なんだってうちの学校がこんなことになってるんスか？」

「……」

伊織順平は先程の光景を目の当たりにした事によって動揺しているらしい。

その問いに対して桐条美鶴は何も答えない。いや、答えられないと言った方が正しいだろうか。

まあここは桐条が実験をした跡地で、10年前のアレでこうなったのは実験関係者なら自明の事だからな。ただし、関係者はほぼ全滅。みたいな。

ちなみに、その実験に関する事は伏せるように桐条から頼まれている。

いきなり人体実験だの10年前の実験事故だの言われても困るだろうし、桐条自身負い目があるだろうからその辺は仕方ない。

ま、桐条が自身の感情と折り合いをつければこいつらにも話す事になるだろうよ。

別に俺も不幸自慢したいわけじゃないしな。言うなって頼まれたら言わないさ。

「先輩達にも分からないんスか？」

「……ああ」

「きつと色々あるんでしょ……事情が。知らなくたって私達は戦える訳だし、いいじゃん別に」

岳羽ゆかりは桐条が何かを隠していると何となく察しているのだろつ。

……そう言えば、どうして岳羽は桐条達に協力してんだ？どう考えたって真田明彦やら伊織順平みたいなゲーム感覚でこんな危険な事に参加するタイプの人間には思えない。

（何かしらあるんだろうな……ひょっとしたら本当に岳羽詠一郎の親族だったりして）

多分俺の予想は当たりだと思う。ペルソナ使いの名字がシャドウの研究者と同じだったなんてどんな偶然だよ、絶対なんか関係あるだろ。

しかしそれを口に出すと何故詠一郎の事を知っているのかと言う話になり、それは桐条との関わりを露見する事になるだろうから何も言わない事にする。

「分からなきや調べればいい。里峰はもう何度も来てるみたいだが、ここを本格的に探索するのは俺や美鶴にとっても今夜が初めてだ。どう見たってここには絶対何かがある。影時間の謎を解く、鍵になる物がな」

とかなんとか真田は言っているがどうなんだろ。少なくとも16

階までは何もないだろうな。

「だけど、ああやって上に行くのを封じるって事は上に何かあるって事の証明に他ならないよね……。」

「……ってああ、そうだった。そういえば16階までしか今行けないんだっとな、いつになったら上に行けるんだろうか。」

「どうせ16階まで昇ればわかる事だがとりあえずこの事実は教えておこう。」

「そうだ。16階から上に昇る階段が変な柵で封じられてるから今はそこまでしか行けないぞ、俺がいくら試しても開けなかつたし。」

「まあそれこそ上の階に何かあるよってアピールしてるようなもんだから、多分何かあるんだろうよ。」

「それが真田先輩の言う謎を解くカギだったら良いよねー」

「……良いよねーって里峰君はタルタロスに何かあるとか気にならないの？」

「他人事のように言う俺に対して岳羽が呆れたように突っ込みを入れた。」

「まあ興味無いと言ったらウソになるかな。あんだけ高い塔なんだから、もっと強いシャドウも居るだろうし。」

「流石に狩人よりも強い奴が出てきたらヤバいけど。ただでさえ狩人相手でもヤバいのに。」

すると伊織が俺に対して疑問を抱いたようで質問してきた。

「ていうか里峰っていつから戦ってたんの？俺ツチも鍛えたらあんな風にシャドウ相手に無双が出来ちゃったりするのか!？」

「確かにそれは俺も気になるな。どうだ、俺の怪我が治ったらスパ
ーリングでもしないか？」

正直あんまり聞いてほしくない所に突っ込んできたな。いや、ま
あそうなるのは予想ついてたけどさ。

そして真田もそれに便乗し、岳羽も口には出さないが興味津津の
模様。そんな中有里はどこ吹く風……って言うかエントランスの隅
っこでボケーっとしていた。マイペースだな、オイ。そして桐条は
俺の事情を知っている為小さく眉をひそめている。

ホントの事言つと自然と桐条に結びつきそうなので適当に誤魔化
す事にする。

何言つてもそれが嘘だと言う証明は出来ないからな。適当に話を
でっちあげればいいさ。

「5年前くらいか？影時間に入ったと思ったらシャドウに襲われて
よ。いやーあの時は死ぬかと思ったね」

「えっと、その時はどうやって生き残ったの？当たり前だけど召喚
器なんて持ってなかったんでしょ？」

ああそうか、召喚器が無いと召喚出来ないって思ってるのか。

まあ、その辺の認識を改める位なら問題ないかな。

「そらご都合主義のようにペルソナを召喚したんだよ。こんな風に
な」

ペルソナ。

一言呟くと、俺の背後からケツァルコアトルが現れた。

そついやこいつ等の前じゃペルソナ出したの初めてだったっけか。等とどうでもいい事を考えていると、一同の顔は驚愕の色に染まっていた。有里は未だにぼんやりしている。

「どうして召喚器無しに？って思っただろうが、召喚器なんぞ無かったって適性がありゃ誰でも出来ると思うぞ。

いや、ある意味じゃ誰にも出来ないかもしれないが」

タカヤの場合はあれは特殊な事例だろうな。あいつが余生に興味が無い刹那主義な生き方をしているから召喚器無しに召喚出来るんだろう。

俺自身も無駄死には許容しがたいが、死自体は受け入れているし。

死ぬ事は言うまでもなく、誰にでも訪れる当たり前の事だから。

「召喚器を使ってペルソナを召喚する条件は、死と言う恐怖を乗り越える事だ。

召喚器をこめかみに突き付けて引き鉄を引くって行為が疑似的に死を覚悟する事だからこそ、死の恐怖を飲み込んでペルソナを出せるんだ」

「……それって、里峰君は10歳の頃に死ぬ事を受け入れたって事……？」

ある意味嘘だけど同意しておく。本当は5歳のころからペルソナ出していました。

「まあそう言う事だな。細かい事を知ったのは結構最近なんだがな」

「へー、拳銃型の召喚器ってそういう意味があるんだ……」

でもまあそんな事はどうだっていいよね。シャドウとやり合っのに俺の過去話（虚偽）なんて聞いててもしゃーないしさ。

……ところで有里君、君は一体何をしてるんだ？マイペースそうな人だと思っていたがとんでもなくマイペースだな。

多分今までの会話何一つ聞いてないだろ。いや、聞いたところで利のある話などなかったけどよ。

ちよつと気になったから話しかけてみようと思ひ、俺は有里の下へと歩みを進めたのだが。

「ッ……！？」

すると何だ？一瞬鋭い頭痛が俺を襲ってきた。本当に一瞬の事でリアクションを取る暇も無かったけど。

……なんだ？有里は何を見ている……？何か……人間大の面積の……長方形っぽいものが見える。……扉、か……？

しかしそれはすぐに見えなくなり、それと共に有里がこちらに氣付いたように振り向いた。さっきのは一体なんだ？たんだ？氣のせい？

「……ひよつとして、有里君今までの話全く聞いていなかった？」

「……何の事？」

驚き半分呆れ半分で問う岳羽に対して、有里は本当に何も聞いていなかったという事が分かる反応を返してきた。

有里はあれだな、将来大物になるに違いない。

「よし！いつまでもここに居た所で影時間が終わるだけだし、ちゃっちゃんと行こうか」

「うっしやー！やってやるぜえええ！」

傭兵つて立場なのになんか仕切っちゃってるけど気にしない。

俺の言葉に対して伊織が気合いを入れる為か咆哮したが、岳羽は不安そうにしている。何せ桐条はナビ役をしなければならぬし、真田は怪我人だからな。

そんな中でも冷静さを保ってるのは有里だけだ。うん、大物だな。

「ふっ……意気込むのは良いが、ペルソナの召喚。ちゃんと出来るか？有里は大丈夫そうだがな」

「私は大丈夫です」

「も、モチ大丈夫っす！つかこいつだけ大丈夫そうってどういう事っすか！」

「彼は一度ペルソナの召喚をしているからな。恐らく問題無いだろう」

召喚器を使う事で片手が封じられるのだからキツチリ召喚出来ないと言っただけで、そのものが弱点になりかねない。

これからはスムーズな召喚を求められるだろうけど……そこは要訓練ってところだろうな。飽くまでも俺はシャドウを倒すという役割を果たすだけだからそんなことまで手伝う気は無いけど。

「ま、召喚に関しては各自練習しとけよ。片手封じられるっただけ

でハンデになってるんだからな。それじゃ行ってみよーか」

・・・

タルタロスの一階。

そこはやっぱり趣味の悪い洋館みたいな内装をしていて、更に迷路のように入り組んだ構造をしている事が見て取れた。

この光景に岳羽ゆかりは溜息をつくと言。

「なにこれ迷いそう……」

俺も最初は迷いまくった。困った時の窓から飛び降りだったよ、うん。

『皆、聞こえるか？』

「うおっ、先輩!？」

『ここからは私が声でバックアップするから覚えておいてくれ』

桐条美鶴からの無線に一瞬驚いたものの、すぐに気を取り直した伊織順平は桐条に質問する。

「中の様子が分かるんスか？」

『私のペルソナの特性でな。このタルタロスは日によって中の構造が変わっていくから、外からのナビが不可欠なんだ』

「うっわー……ますます迷いそう」

その言葉に岳羽はますます辟易したような表情になるが、俺の方をみるとにつこりと笑った。なんだよその期待してるぜ、みたいな顔は。

「まあ、こつちにはタルタロス熟練者が居るから大丈夫よね！」

「あんまり俺を当てにしない方が良いぞ？」

いつも一緒についていけるとも限らないし、何より俺の脱出手段は窓から飛び降りるか階段を逆走するかしかないからな」

「「……」」

ああ、俺でも分かってるさ。あまりにあんまりな脱出方法だった。だからそんな目で見るな。意外と使えない奴だな、みたいな目で俺を見るな！

『……あー、君はタルタロスの中にある転移装置は使った事無いのか？』

「何それ？変な装置っぽいのは見たことあるけど、俺がイジって面倒な事になったら嫌だから使った事無い」

『成程、一理あるな。だがそれは1階に戻る為の装置だから帰るときはそれを使うと良い』

「マジかよ……」

「仕方ないわよ、里峰君機械音痴だから」

「だから違つっ！……」

「へえ、里峰にも意外な弱点があったんだな！
ま、何にせよ戦闘は期待してるからな！よろしく頼むぜ！」

……あれだ、機械音痴キャラが定着しそうだ。流石にこうなるとそれを払拭するのは難しいだろう。

どうしたものかと頭を抱えていると、何か有里がこちらを見つめている。ったくなんだなんだよなんですかっての。

「……ドンマイ」

「グハアツ!!」

謂れなき同情を受ける事ほど悔しい事は無い。心が吐血しながら俺は崩れ落ちた。

つかここシャドウ居てもおかしくない場所なんだけど、こいつら結構呑気だな。何も知らないから仕方ないのか？

『すまないな、本来なら私がそちらに居るべきなのだが……里峰、3人を任せたぞ』

「了解。それじゃ行くか」

「うっす！」「うん！」「……」

とは言ったものの、集団で戦闘なんて経験が無いからどうしたものか。

俺の戦い方は雑も雑でとにかく広域を殲滅するという物だから周囲に味方が居る状況では本来の戦い方は使えない。

ちびちびと戦うことになるんだろうが……戦ってるのにストレス

溜まりそうだなあ……。

軽く駆け足しながら適当に通路を進むとすぐにシャドウを見つけた。

それと同時に桐条からのナビが入る。

『気をつけるよ、前方から3体来ている』

「普段なら拳銃ぶっぱするところだが……とりあえず3人は見てろ」

俺は3人の返答を待たずに一気に駆け上がる。

シャドウも俺の存在を視認したらしくこちらへ向かってきたので、まずは一番近い一体を振り下ろしで真っ二つに裂く。

続いて振り下ろした大剣をそのまま地面へ叩きつけると、棒高跳びの要領で飛び上がり2体のシャドウの背後へと回る。

「おーしまい」

横薙ぎに一閃、二閃。

「……さ、参考にやらねえ……」

伊織の呟きが聞こえてきた。岳羽も伊織の言葉にしきりに頷いている。

まあ確かに、模倣から入るのも悪くないが……こつこつのは習うより慣れろって奴だ。

「とりあえず、3人で戦ってみてくれ。本当にヤバくなったら手伝うから」

シャドウと戦うという契約に反する形になるが、俺ばかり戦ってたって仕方ないだろう。

俺は3人の後ろに回ると、先に進むように促した。しかし急にみんなのと戦えと言われてもやはり戸惑いがあるのだろうか、中々第一歩が踏み出せないようだ。

(……どーしよっかな)

「……なるようになるよ。里峰も助けてくれるみたいだし」

どうしたものかと頭をひねったが、それは杞憂に終わったようだ。有里が悠然と前に進んで行く。それを見た2人も慌ててそれに続いて行った。

『気をつけるよ、曲がり角を行った所にも3体居る。弱点を探っておくから慎重にな』

「……うむ、苦しゅうない」

有里の返答に2人はずっこけた。

まさかそんな偉そうな(ふざけた?)態度を取るとは思っていなかったからだろうな。

しかし有里は落ち着いてるな。本当に初めての实战なのか？

「行くよ、オルフェウス」

有里はゆったり歩きながら召喚器をこめかみに突き付けると、真っ白なペルソナを召喚した。

『そいつらは「臆病のマーヤ」！弱点は火炎属性の攻撃だ！！』

桐条のナビを受け、有里はニヤリと笑った。

「オルフェウス、アギだ」

その言葉を受け、オルフェウスはおもむろに背負っていた琴を手に持つと、それを弾き始めた。

すると臆病のマーヤと呼ばれたシャドウ……俺がヘッド叩いして
る奴のうち1体が一瞬にして燃え上がる。

弱点の攻撃を受けたからだろうか、臆病のマーヤは攻撃を受けた
というのに動けないしており、それを好機と見た有里は更にアギによ
る追撃をかけた。

これによつて3体のシャドウは火炎を身に受けてひるんでいる。

『チャンスだぞ！一気にやれ！！』

「！！！！」

桐条の叱咤で岳羽と伊織も動き出した。

初めての实战とはいえ動いていない敵をやるのは簡単だろう。

(ま、俺も初めて戦ったときは碌に動けなかったしな)

異常なのは有里の方だ。

あのような異形を目の当たりにして全く物怖じしない度胸は凄ま
じい。

『よし、見事な勝利だ！』

うむ。初の実戦にしちゃ上々だろう。

この調子なら岳羽も伊織もすぐに慣れるはずだ。

「うへえ、何かベチヨツてしたぞベチヨツて」

「あんまり慣れたくない感覚よね……」

……ある意味では慣れない方がよいよね、うん。

「基本的にシャドウは動きが緩慢だからな。落ち着いて対処すりゃどうにでもなる。まあ何だ、せいぜい頑張れよ」

「オツス！」 「りょうかい」 「……」

俺の気の無い激励に対し、三様に返答する。最後のは返答なのか？ ひょっとして今日俺は、アドバイスを徹することになるのだろうか。

この後、俺達は……否、有里と伊織と岳羽は数回の戦闘を終えるとペルソナの扱いにも慣れていた。この分なら普通に探索も出来るはずだ。

その間俺はただの一度も剣を抜く事は無かったが。こいつら普通に戦う才能あるわ。

とはいえ3人にとっては初めての戦闘だったからか、すぐに疲労がピークに達した為今日の所は帰ることにした。

「……嗚呼、斬りたい」

「物騒な事……言わないでよね……」

息絶え絶えに岳羽から突っ込みを受けた。

初めてのアレ（後書き）

有里湊「オルフェウス……バルス!!」

マーヤ「目がアア!」

マーヤって言うとは本真綾さんだよ。 I・m a ドリーマー
潜むパワーだよ

くっ……銃の反動で腕が……！！（前書き）

自分の身の丈に合った武器を持ちましょう。

くっ……銃の反動で腕が……！！

「以上で、全校朝礼を終わります。

……続きまして、生徒会から新しい役員を紹介します」

全校朝礼ってホント何のためにあのかな。校長の話は案の定長
いしだ。

それを自覚してる校長って居ないもんなのかな？ひよっとして自
覚した上であんな長話してんのかな？救いようねえな。

「生徒会代表、生徒会長、3年D組、桐条美鶴さん」

……ああ、そう言えば出馬するとか何とか言ってたな。面倒だか
ら投票は白紙で出した気がする。

なんで桐条先輩前に立ってんのって思ったら挨拶の為だったのな。

「おい、おい！」

ぼんやりとその光景を眺めていると、隣から話をかけられた。

「なんだ佐藤か」

佐藤だった。

出席番号順に並ぶから佐藤 里峰という順番になる為、こうい
う場では自然と行動を共にすることが多い。

まーた岩崎先輩か、と溜息をつきながら俺は返答した。

「なんだとはなんだ。

……まあそんなことどうだっていい。桐条先輩って、あの桐条

だろ？お前どうやってあんな人とお近づきになったんだ？」

「あ？あー、家庭のジジョーって奴だよ。業界用語で言う家庭のジジョージだな。なんかエロい。」

それはさておき人に話すようなことは無いし面白い話もないぞ」

「ふーん……つかお前ってあれだな、結構謎が多いよな」

「はい？」

まーた佐藤が世迷い事を言いだしたな。

何を言い出すのかと思ひ佐藤が口を開くのを待つ。

「新入生実力テストじゃ1年全体で2位に食い込んでるしさ。体力テストだって50m走とシャトルランで陸上部と争って勧誘されたりしてるのにやってるのは図書委員だけでさ、そんで桐条先輩と関わりがあるという謎の人脈と来たもんだ。周りの連中も噂してんぜ？あいつは一体何なんだってよ」

佐藤の口から飛び出したのは俺が学校で行ってきた所業の数々だった。いや、別に悪い事なんてしてないけど。

「あー……あんまり目立たないようにしてたんだけどな……」

奨学生だから実力テストで本気を出すのは仕方ない。前世の分と言つハンデ付きにも関わらず2位だったのはちよつとへこんだけど。1位は確か同じクラスの……伏見？だっけか。何か控え目そうな子。

実は次こそ勝つとひそかに対抗意識を燃やしていたりする。

そして体力テストも本気出す気は無かったけど、一般とどの位開きがあるのかって思ってたらあんな事に……。

「いやー、あれは目立つだろー……」

「ま、そんなくたらん噂みたいのはそのうち終わるさ……っと、桐条先輩の演説終わったぞ」

ようやく挨拶が終わったらしく、ペコリと一礼をして教壇から下りて行った。

話し半分に聞いていたが、ありや校長が触発されてなんか緊急で全校朝礼とかはじまるんじゃないのか？そして始まる無駄な長話。結局長話なんだよなー。

話つてのは要点がいつまんで分かりやすく話すもんだつてのに、校長ときたら何もわかつちやいねーよ。

「えー、それでは、これで全校朝礼を終わります。起立！礼！」

号令に合わせて気だるげに挨拶をする。

そして学年順に教室へと帰って行き、全校朝礼は終わりを告げ、各々が1限の授業の準備を始めて行った。

……1限は国語。

担当はうちの吉岡の思い人・鳥海である。

しかしこれがまたフリーダムな授業で中々に楽しませてもらっている。

「さーで、今日は不朽の名作「歩くなメロス」の話に入ろうと思います。」

テレビでも宰太治の名前はよく見るし知ってる人も多いと思うけど、先生この教科書の中じゃ一番好きな話なのでテストはこの範囲しか出しません。

後は漢字の問題をちょこちょこ入れると思うから、頑張ってね。それじゃ、教科書の10ページから……」

「これはひどい」

いや、テスト受ける側からしたらありがたいのか。しかし、教育者としてこれはどうなんだろうか。

ぼんやりと教科書を広げながら既に眠る体勢に入っている佐藤の背中を眺める。

しばらくすると完全に眠りにいたらしく、佐藤の頭がふらふらと揺れている。

とはいえ相手は鳥海。以前も佐藤は居眠りをしたのがバレて反省文を書かされた上にシャガールのケーキを買わされたはずだ。懲りない奴め。

まあ確かに、国語の授業って朗読が多くて眠くなるのも分からないが。

するとやっぱり眠っているのがバレた。

「こら！後ろの男子！里峰君！？まさか寝てるんじゃないでしょうね！？」

！？

「先生、一生懸命読んではいるのよ?! 可哀そうじゃないの!」

何と言う理論だ。いや、つーか俺寝てないし！

なんとか釈明をしようと口を開こうとするのだが、鳥海は俺の弁解を認めないつもりらしい。

佐藤は佐藤で呑気にもあくびをしながら現状を理解していない様子でキョロキョロと辺りを見回している。

「反省文と、ケーキを買ってきなさい！シャガールの日替わりケーキセット！モンブランじゃない日のやつ！」

「チツ……！ばれちゃあ仕方ねエ……しかし、生徒の不手際は担任教師の不手際だ。」

つまり、真に反省文を提出すべきは吉岡で、ケーキを買ってくるのも吉岡だ！！後で吉岡に買ってくるように言っておいてあげますよ、鳥海先生」

こんな不良生徒に育てた吉岡が全部悪い。釈明の機会をもらえないのなら、罪をなすりつけるまでだ。どうせ反省文は二の次でケーキさえあれば何でもいいと考えているはずだからな。

「そ、ならいいわ。次から寝ないようにな」

「はい」

こんな緩い空気の中、授業は進んで行った。

・・・

夜である。まじうこと無く夜だ。

しばらくしたら影時間が訪れる程度には夜だ。

だというのに里峰竜児の表情は暗い。もうすぐシャドウ達と戯れる時間なのに彼の表情はやっぱり暗い。

それは何故かという、彼の部屋で呑気にお茶をすすっている半裸の男のせいである。

部屋の中で半裸とは、一体何が起きたんだという話になるのだが、この男はこの部屋で半裸になったのではなく元々半裸だ。いや、それはそれでおかしいけど。

ところで、どうして半裸の男……タカヤが里峰の部屋に訪れたのかと言うと、彼がかねてより依頼していた対シャドウ用特殊兵装の弾薬及び本体を届けるためである。

影時間に取り引する方が人目も避けれるから便利なのだが、何かタカヤにも事情があるらしいという事で里峰もこの場で受け取る事にしたようだ。

タカヤが里峰の部屋に持ちこんだギターケースのような物を開くと、そこにはギター等はもちろん存在せず、バラバラになっている部品が敷き詰められていた。

それを一つ一つ確認しながらタカヤはゆっくり口を開く。

「さて、当然ながら対物自動小銃を持って堂々と出歩くななんて真似できませんからね。と言つてもギターケースも大したカモフラージュにはなりません」

「突っ込み待ちか？突っ込み待ちなのか？」

どう見ても半裸の時点でアウトだろう。ギターケースだろうと自動小銃だろうとアウトだ。

タカヤはそんな里峰の言葉など馬耳東風と言った具合に慣れた手つきで小銃を組み上げていく。

それは本来、対装甲車用の対物ライフルだった。

その威力は破格でコンクリート製の壁など障子を破るように砕く事が出来、それだけでも凄まじい威力を誇っていたのだが残念な事に欠点の一つだけある。

あまりの威力で反動を抑えきれない為に銃口に特大のマズルブレーキを装着しており、これによって反動を約30%程抑える事が出来ているのだが、マズルブレーキから噴射する発射煙が射手すら覆うほど発生してしまい下手に連射する事が出来ないという物である。

しかし、この改造された対物ライフルは驚くべき事に、その欠点を更に伸ばしたものとなっている。

と言うのも、以前タカヤに依頼した際に威力はそのままに連射を出来るようにしてもらったのだが、それだとライフル自体が威力に耐えきれなくなるのだ。

具体的に言うと、装弾数を30+1にし、マズルブレーキを取り外した上で発射形式をフルオートにしたと言う物であり、2000メートル先の装甲車を撃破したと言う伝説を持つ程の威力を持った原型のライフルを連射できるように改造したかなり無茶な代物であった。

最も、当時の里峰自身も反動で肩の関節を少し痛めてしまったのだが、それでもさらに威力を上げようと言うのだから中々にクレイジーである。

兎に角、一言で言えば連射は捨てたと言う事だ。

そして、一撃必殺を地で行く為に本来50口径だった銃口を60口径にし、戦闘の邪魔になる発射煙を防ぐためにマズルブレーキは

外したままで、装弾数も10+1に戻して発射形式も原型と同じくセミオートにした。

原型から変わった所と言えば口径とマズルブレーキを外した点なのだが、これだけでもかなりの差がある。

当時里峰が反動で肩を外したと先述したが、それは飽くまで高威力のライフルを連射したせいであり、今タカヤが組み立てているライフルは1発の威力は上がっているものの、連射は出来ないのが当時より成長した里峰にとって、負担はそこまで大きくなる物ではない。と言つても一般人が撃とうとしたら反動で大変な事になる事請け合ひであるが。

「さて、こちらはご存知の通りバレットライフルを改造した物ですが、今回のメインはこれではありません」

「ああ、ようやく出来たんだろ？お待ちかねの弾薬が」

「ええ。11発あつたのですが、1発は試験も兼ねてシャドウに使ってみました」

「威力は？」

「シャドウ10体程まとめて風穴を開けましたね。

強敵に対して使うもよし、対複数の際に開幕の狼煙として使うもよし、と言つたところでしょいか。

ただ、これ程の威力ですので物理反射や物理無効を持つ相手には注意してください」

「パーフェクト完璧だ、タカヤ」

「ありがたきお言葉」

何故今までこの兵装を実装出来なかったのかと言うと、対物ライフルを元に口径を変えた物を1から作ったのはいいのだが対シャドウ用となる弾薬の方がまだ出来ていなかった為にこのライフルの実用化が遅れてしまったのだ。

そして今回タカヤが持ってきた10発分……つまり里峰の目の前に置かれたライフルの装弾数分だけの弾薬は完成した為、こうしてタカヤがライフルも含めて届けに来たと言う訳である。

「ところで、天然のペルソナ使いの集まりに加わったそうですね」

「おう、流石桐条のご令嬢ってとこだな。何が良いつて金払いが良
い」

「ああ……やはり桐条が率いていたのですか」

机の上におかれたお茶の入った湯呑の横にタカヤは弾薬を置いた。どうやら桐条が関係していると言うのは何となく予想がついていたらしく、小さく口元に弧を描いていた。

「あれだけのことをやらかしておいて、ハイお終いつて訳にもいかないでしょうね。どこかで桐条の名が出てくるとは思っていました
たが……」

よもや自分達とは違う、天然のペルソナ使いとして活動しているとは何とも皮肉なものだ、とタカヤはシニカルに笑った。

里峰自身も特に感慨は無いらしく、タカヤの言葉に冗談めいた笑みを浮かべる。

「ジジイの尻拭いを孫娘にさせるなんざどんなプレイだよっつー話だな」

「笑い話にもなりませんね。警察に通報した方が良いんじゃないですか？老人が若い娘に尻を拭わせてますと」

「はっ、死人に口なしだぜ？今更どうしようもねーっつーの。何ならお前が警察にチクツてきたらどうだ？」

「止めておきましょう。それ以前に自首しに来たとも思われそうですしね」

その言葉に対して、里峰はまたしてもニヤリと笑った。

「自覚あるなら服を着ろ」

「……さて、弾薬もライフルも渡しましたし、こちらからもお願いが一つあるのですが」

「聞けよ！！」

里峰の言葉を無視して話を進めるタカヤに、彼は盛大に突っ込みを入れた。

毎度のことながら結局里峰が折れる形に終わるのだが、それでも彼はタカヤの服装を矯正する事を諦めない。

それがタカヤの為になり、ひいては自身の為になると確信しているからだ。

……それはさておき、タカヤの「お願い」とは。

「……あ？お使いだ？ヤダよめんどつちな」

「まあまあ、そうおっしやらずに。」

ある男にこの『制御剤』を渡してくるだけの簡単なお仕事を引き受けていただくだけで、今回私達が受け取るはずだった報酬を免除しますから」

「やる。どこのどいつに渡せばいいんだ？」

条件を聞くと同時に即答で了承する里峰。

予想通りの反応を返した里峰に、タカヤは優しく微笑んだ。

「……荒垣真次郎、と言う男にです」

・・・

「ゲホッ」

とある路地裏。不良が屯している近くで男は壁に寄りかかり佇んでいた。

そんな中で男は小さく咳を吐く。

それは単なる咳払いなどではなく、男にとっては一種の「兆候」だった。

その兆候を感じ取った男は思わず舌打ちをする。何せ男にとってのそれは、とある薬の効果が切れた証であり、すぐに薬を服用しなければ命の危険が迫る程なのだから。

しかしその薬自身もかなりの劇薬で、服用すればするほど寿命が縮むというとんでもない薬であり、それ程の薬で無くては男の『暴

走』を抑える事は出来ないのだ。

「チツ……そういやもう無いんだっただな……」

しかし、男の手元には既に薬は存在しない。

この場合どうするかと言うのももちろん薬を調達せねばならないのだが、この男……荒垣真次郎が先程舌打ちをした理由は、この薬を調達せねばなるまいという事実に起因する。

……またいけすかない連中と取引をしなくてはならない。そう思うと溜息を通り過ぎて舌打ちも打ちたくなるものである。

荒垣は、ストレガから薬と言う名の『制御剤』を受け取らねば延命すらままならない状況にあり、それでもしなくては自身のペルソナに飲み込まれてしまうのだ。

そうなった場合被害に遭うのは自身はもちろんのこと周りに居る人間や建物であり、ペルソナの暴走とはそれ程の危険を秘めているものであった。

兎にも角にも制御剤を得る為にストレガの連中に会いに行かねばと考えた所で、周辺に居た不良達が棺桶姿に変貌を遂げた。

「ああ、もうそんな時間だったか……」

影時間。

ペルソナ使いの本領を發揮する為の時間であり、同時にシャドウ達の本領を發揮する為の時間でもあるこの空間で、荒垣は相も変わらず同じ場所に腰をおろして月を眺めている。

恐らく薬が切れたという事実は、以前取引した時と現在との間隔でストレガの連中も把握している事だろう。

ならば自分がわざわざストレガの連中の所まで赴かなくてもそのうちやって来るに違いない。

それがいつものストレガの行動パターンであり、荒垣と言う男にとってもそれが当たり前になっていた。

しかし、今回はストレガが到着する前にシャドウに見つかりそう
だ。

と言っても、シャドウの動きは非常に遅いので、先に見つける事が出来れば逃げる事など容易い。

そんなわけで荒垣は気だるげに立ち上がると、影時間が明けるまでの暇つぶしに散歩をする事にした。もちろん、シャドウには気をつけるが。

「……いや、散歩は必要なさそうだな」

シャドウから退避する為にこの場を移動しようと思ったと言うのに、そのシャドウが何者かに倒されたらしい。背後からはシャドウの断末魔と発砲音が鳴り響いている。

ストレガの一人であるタカヤと言う男が拳銃を使っていたので、恐らくはタカヤなのだろうと当たりをつけて振り返った。

しかし、そこにいたのは彼の知る半裸男ではない。

「おーっす、お前が荒垣真次郎か？」

「……誰だテメエ」

そこには二丁の拳銃を両手にぶら下げた男が居た。半裸ではない。そして自身の名前を知っているその男の事を、荒垣は知らない。

半ば威嚇するように荒垣は男に質問する。その威圧感を男は何もなかったかのように受け流すと、一言。

「タカヤの友人。制御剤をお前に渡すよう頼まれてな」

「……成程な。嘘はついちやいならしい。それで、報酬は次にストレガの奴らに会う時に渡せばいいのか？」

「……いや、俺に渡してくればタカヤに渡すけど？」

荒垣の問いに対して、何でもないように里峰は返答した。しかし、その瞬間荒垣の目つきが鋭くなる。

里峰から渡された薬をポケットに突っ込みながら荒垣は口を開いた。

「報酬の金は『確実に』渡すようあいつらに言われてるんでな。

お前が使いに出されたのは構わねえが、俺としてはお前と言う人間を知らねえし、はっきり言わせてもらえば信用できねえ」

「そーかそーか、だけど俺だってタカヤに金は受け取ってくるよー
にって頼まれてんでな。

それで手ぶらで帰ったあかつきにはケツが鼻の穴みたいになっち
まっ」

「……お前、嘘は苦手って言われねえか？さっきから嘘ついてそう
なタイミングで右の脛がヒクヒクしてんぞ」

「うえっ、マジ?!」

「いや、嘘だ」

「畜生！！覚えてるよ！！」

「あつ、おい待っ…………！！」

あつさりと嘘を見抜かれた里峰は荒垣の制止の言葉を振り切ると一瞬にして見えない位置まで走り去って行った。

そうして取り残された荒垣は、ガリガリと頭を掻くと散歩を再開する事にした。

「…………あいつ、なんて名前なんだ…………？」

ストレガの人間と交友関係にあるという点と影時間でも動けるといふ点を鑑みると、再び相見える事もあるだろう。その時に聞けばいいか、と荒垣は思考を打ち切った。

・・・

「なんや竜児の武器完成したらしいやないですか」

「ええ。すこし試運転も兼ねてシャドウを撃つてみたいと思うのですが」

「ほー。せやったらわしが撃つてみてもええですか？ペルソナの身体能力の底上げがあればわしでもなんとかなるやろ」

「…………やめといた方がいいんじゃない？」

「なんやチドリ、わしの力が信じられん言うんか」

(その言葉自体がフラグにしか聞こえませんが……面白そうなので放っておきましょう)

ぐるぐると腕を回しながら意気込むジンに対し、チドリは呆れた口調で止めに入ったが、ジンは全く聞いていない。

チドリはそこまで止める気も無いらしく、影時間が明ける前に家に帰ろうと踵を返した。

「……はあ、好きにしたら？ 私は先に帰ってるから」

「分かりました。それではおやすみなさい」「なんやねん、一体」

ジンはチドリの態度に納得行っていない様子だったが、タカヤは気にした様子も無くジンにライフルを渡した。

「さて、丁度いい所にシャドウの群れが居ますね。あれを狙撃して見て下さい」

「おう、任せとき！FPSはわしの得意分野じゃ！」

銃器の扱いはある程度心得ていたのだろう。

とはいえ訓練されていたわけでもないので構え方はゲームで見たのを真似ただけのお粗末なものだった。

そんなジンの姿を見てタカヤは内心黙祷を捧げている。

「ヘッドショットや！」

引き鉄を引いた瞬間、シャドウの群れは吹き飛んだ。後ジンも吹き飛んだ。

今日タカヤが里峰竜児の下に一人でやってきた理由としては、ジ

ンの看護をチドリがしているからである。

改造対物ライフルの反動によって、ライフルがデコに直撃した上に、吹き飛んでこけた際に頭を激しく強打した事によってデコにも後頭部にもたんこぶが出来たジンは、とてもじゃないが人前に出られる姿ではない。

ましてや相手はあの里峰で、事情が知られば間違いなくしばらくの間ネタにされるだろう。

そんな訳でジンからの要望でタカヤは一人里峰の下へ向かったのだった。

くっ……銃の反動で腕が……！！（後書き）

銃の威力で肩が外れるってただの比喩表現らしいですね。

銃について調べてたんですがその事を知って急遽内容をちよびつと変更しました。

あ、でも里峰君が使うのはものすごい威力のライフルって事だし、やっぱり肩外したって表現はありなのかな？かな？

守銭奴じゃねえ！こつでもしないと生活が成り立たねえんだ！（前書き）

武器は高いよなって話

守銭奴じゃねえ！こうでもしないと生活が成り立たねえんだ！

5月。もう5月である。

せつかく対物ライフルを入手したと言うのにそれを振るう機会が無く悶々とする日々が続いている俺。

大体、あいつらが一緒に居たんじゃあんな変態ライフルぶっ放すわけにもいかねーしさ。

いや、まあ今のところ狩人相手にしか使う気ないってのもあるんだけど。

どうせタルタロスの1階とかそんな場所に居るシャドウごときにぶっぱなしたって弾薬の無駄遣いだ。

1発10万円つてお前どういうことだつてタカヤに声高々に突っ込みを入れたのが記憶に新しいし。

何にせよ、こないだ狩人とやったししばらくお預けなんだろうな。とはいえいつ遭遇するか分かったもんじゃやないから一人でタルタロス昇るときには一応装備してるだけどさ。

すると、教室の扉が開かれ、そこから吉岡がズンズンと教卓へと向かって行った。何急いでんだろ？

「うーっし、連絡事項ねーし今日は終礼なしだ。今から用事があるんでなー。じゃーなお前ら」

なんかボケーっつと終礼待ちをしていた俺だったが、足早に教室に入ってきた吉岡は捲くし立てると足早に教室を去っていった。

……なんなんだ？ひよっつとしてあれか？シャガールのケーキ買ってこいって奴か？頑張るなあ、オイ……吉岡の恋、実ればいいね）

他人事)。

まあ別に吉岡の恋路なんて欠片も興味無いから俺も帰ろう。
そうだと晩飯代わりにカツサンド買って帰ろう。

とかなんとか思いながら席を立つと携帯にメールが。
なになに……放課後暇でしょ？真田先輩に用事があるから一緒に
行かない？真田先輩検査入院してるみたいだから病院まで。
ははーん、なるほどね。

……なんで俺が暇な事前提なんだよ！いや、暇だけど！暇だけど
さー！

暇ですと返信するのも癪なので暇じゃないですうと返信。
携帯をポケットに突っ込み購買に行った後帰る事にした。

そうしてカツサンド片手に辿り着く下足箱。そこには岳羽ゆかり
と有里湊に伊織順平の先輩3人衆が居た。
その姿を見て俺は思わず声を漏らしてしまう。

「うげっ」

「あ、里峰君だ。てかうげって何ようげって」

「いえ、実は俺今暇じゃないですうので」

「嘘でしょ？」

「ち、違いますホントです」

「……嘘、でしょ？」

ジト目怖いよジト目。なんかこう……全てを見透かされている気分だ。こないだ荒垣真次郎に嘘を見破られた時の気分だ。

畜生、上手く行つてたらあの時お金をねこば……いや、未遂の話をして仕方ないだろう。とりあえず素直に嘘を認める事にした。

「……はい、嘘です。本当は暇です……でも暇ですってはつきり言うのが何かあれでした……是非ともお供させて下さい……」

「よろしい。それじゃ行きましょ」

俺の言葉に満足したのか岳羽はずんずんと歩いて行った。それについて行く伊織と有里に俺も並んで歩いて行く。

そう言えば用事ってなんだろう？

「なあ。真田先輩に用事って何？」

「いやー、それがさー。俺、真田先輩に届け物……なぜかはしらねーけど、2・Eの名簿を届けるように頼まれちゃったんだけどさー。ゆかりっちにそれ知られちゃってさー。つーわけでゆかりっちが里峰も誘って4人で行く事になったわけ」

「なんで嫌そうな顔してんだ？」

「だって「俺」に頼まれたんだぜ？やー、頼られちゃってるなあって思ってたらゆかりっち達も来るって言うからさー」

ああ、成程。

仕事を頼まれたのは自分だ、つてのにそれを取られた気分にも

なってるのか？

どうせ大した仕事じゃねーだろうし、そんな事にこだわらなくても良いんじゃないか？

しかし名簿ってなんで？そのクラスに誰かいるのか？

……居るとしたら、ペルソナ使い候補ってとこだろうな。それ以外の事わざわざ人を遣ってまで名簿なんぞ持ってこさせないだろうし。

ま、俺にはどうでもいいな。有里もどうでもよさげな表情だ。

「……どうでもいい」「せやせや」

「何を！」

「ほら、早く行くわよ！」

「はいよー」「おう……」「……」

こうして、俺達4人は真田の待つ病院へと向かって行くのだった。

・・・

病院についた俺達。

岳羽ゆかりが受付の人に真田明彦の病室を尋ねたので、俺達は言われた通りの部屋へと向かっている。

どうやらその部屋は個室らしいので他の患者はいないようだ。検査入院だし、周りに人がいる部屋にわざわざ入れる必要もないってことかな。まあどうでもいいけど。

そんな事より、入院した時もそうなんだがやっぱり綺麗な部屋だよ

な。病院食は味がものつそい薄かったけど。

「病人のくせに良い部屋に住んでんな」

俺。
これが格差社会か、と自身のボロアパートと比較して愕然とする

「いや、病人だからこそちゃんとしたところにすまないと体に悪いでしょ」

「ですよね」

しかし懐かしいな。6年前に10年前、俺はこの病院に入院したんだよな。

だけど俺が入院した理由がシャドウと戦ったせいですなんて言うはずもなく、影時間で起きた出来事も別の事件に置き換わる為俺はひき逃げにあったという設定になっている。もちろん犯人など見つかるはずもない。

すると俺達の向かう先……真田の病室の手前に一人の医者がカルテか何かを手に持ちながらこちらに向かって歩いてきていた。

「あ、お前ら先行っててくんない？」

「お？どうした？」

「ん、知り合いが居るからさ。ちょっと話してくるわ」

「そーか、じゃあ行くうぜ」

伊織が岳羽と有里を引つ張って先に向かつて行った。

そして俺は先に行った3人とすれ違った医者に対して手を振る。

この医者の名前は葛木。

10年前は新米の主治医として俺の身体にメスを入れ、6年前も俺の手術の執刀医を担当したという、何とも数奇な縁が目の前に居る医者と俺には結ばれている。

すると俺の姿を視認した葛木が手を振りながら歩いて来たので俺もそれに対して返答した。

「おーっす葛木イ」

「やあ、里峰君。見た所入院しに来たわけではないみたいだね。よかったよかった」

「はん、そんな毎回入院してたまるかよ。もうこれ以上世話になる気はねえさ」

「それならいいんだけど……また随分無茶をしているようだね」

「ヤダ……そんなにジロジロみないでよ……」

「こやつめハハハ、ぬかしおるわ」

さて、葛木は普段は物腰柔らかかな割にたまにキツイ一撃をお見舞いするような男ではあるものの、実はかなりのキレ者である。

いや医者になれる奴が頭悪いわけ無いじゃんってのは当たり前だけど、俺の体にメスを入れた事で俺の体の『異常』に気付けたのだから。本来何も知らない奴がイジっても分からないように造られて

いたのに。

とはいえ俺の体をいじくったのはあの桐条だ。たかだか医者ごときがどうにかできるはずもなく、俺から簡単な事情を聴くだけに留まっているがそれ以降やたら俺の体の心配ばかりしてくると言った感じだ。

「ま、何かあつたらいつでも来ると良い。君なら治療費0割引で請け負ってあげるよ」

「それってつまり正規の料金だろうが……まあ世話になる気は無いんだが、万が一何かあつたとしてもここ以外で世話になる事は無いと思うけどな。」

それじゃ、俺あ人の見舞いに来てっから」

「ああ、さっきの子たちはやっぱり友達なんだ。よかったよかった。学校ではちゃんと関係を築けているようだね」

「まーボチボチってところか。そっぴや秋成の奴は元気してっか？」
神木秋成。病人。

俺が10年前に入院した時も入院してた。そして6年前に入院した時も入院してた。

まあなんだ、なんだかんだで仲良くなったものの何か達観した奴だったなあ。

「いやあ、それがねえ……最近身体の調子が良いつてんで外ばっか行つてて、こつちとしては心配で仕方ないだ。見かけたら声かけておいて」

身体の調子が良いつてんならそりゃ外に出た方が良いだろ。特にあいつの場合は、病院って場所自体がもう体に毒だろ。

「はん、いーっくらきれいな病室だからってこんな場所にいつまでも閉じ込められたそら飽きるわい」

「そりゃあそっただけどさ……」

「それにあいつは普通の奴と違って色々弱いんだから、それなら太く短くで生きた方が楽しいだろ」

「まあ……ね」

俺の容赦ない言葉にどんどん意気消沈する葛木。しまったな、何か俺がいじめてるみたいなのが構図だぞ。

「そんな悔しいんだったら、もっと勉強するこつたな。秋成みたいな奴も救える程度にはさ。」

それは多分、お前みたいな奴にしか出来ない事だと思うし」

これは偽りなく本心だ。医者と言う職業をただの飯の種として見てる奴と、本気で人を助けたいと思ってる奴。葛木は間違はなく後者だ。

普通の医者が諦め、無駄に費用を発生させないようにするところをこの男は何に代えても助けようとする。

共に喜び、共に悲しむ。それが葛木正志と言う男の信念だった。

「……そんな事、君に言われなくなっただって分かっているさ。それに、神木君の事だっただけ諦めちゃいない」

「はん、そんだけ言えりゃ上等上等。そっいう前向きなところは嫌じゃないぜ」

「ふう……すまない、止めてくれないか？僕に男の趣味は無い」

「ぶちころがすぞ」

こういつ一言多い部分を除けば、葛木とは良い酒が飲めそうだ。

……こっちに来てから酒なんて飲んでないけど。

「ま、そう言う事だからよろしく頼むよ。神木君も喜ぶと思うし」

「そーだな。確かに最近見舞いに来てなかったし、外で見つかなかったらそのうちまた来るわ」

「ああ、そうしてくれると嬉しいよ」

俺は簡単な挨拶の後に葛木と別れ、病室へと向かう。

すると誰かが病室から出てきた。個室だったはずだし、見舞いの客だろうか。

……と思つたら、何と病室から出てきたのは先日「制御剤」を渡した男だった。

「げげっ」

見知った顔に思わず声を漏らす。

「……お前は、あの時の」

荒垣真次郎が居た。なんでこんな所に。

そこは真田の病室のはずでは？確かにあいつらの話声も聞こえるし。

てことは真田の関係者って事か。影時間に適性があるのもなんか関係あるっばいな。

しかし、そんな事はどうでもよかった。

「俺が制御剤代をねこばばしようとした事、タカヤに言ってねえだろっな！」

「馬鹿が、誰がいちいちんな事言うかよ。つかそんなくだらねえ事考えてやがったのか……」

本当だな？その言葉、信じてるからな！

あ、つか名前乗って無かったっけか。

「俺は里峰竜児。まあなんだ、ヨロシク」

「……荒垣だ。それでお前は、こんなところに居るって事は……」。

アキの……真田達の仲間なのか？」

「んー、仲間っつーか金で雇われてるだけのドライな関係か？色々と金がかかってるもんでな」

俺は手で拳銃の形を作り荒垣に向ける。

荒垣は驚いたような呆れたようなよく分からない表情を浮かべると、何も言わず去って行った。

「なんだっただろ」

まあいいや。俺は思考を打ち切り、病室へと入って行くのだった。

・・・

あいつらがタルタロスの調査を始めてから何日たったっけか？

1週間は経ってるかな？まあ何にせよシャドウとの戦闘にも慣れ
てきたようで、俺が居なくてもホイホイと先に進めるようになって
いた。

とはいえまだまだ門番と呼ばれるフロアおきに出現する割と強い
シャドウにはちょっと手こずっているようだが。

「にしても暇である」

「そう！思うなら！戦うの！手伝ってよね！」

俺がフロアの階段に座り込んでいる視線の先には岳羽ゆかりが必
死の形相で弓矢を放っていた。

だって俺が暴れると周りが危ないし……。

銃弾だってホロ ポイントとかダムダム弾でもあるまいし、もし
シャドウを打ち抜いた先に味方がいたらどうするよって感じだし。

したら自然と前衛をこなすことになるだろうけど、前衛には有里
湊と伊織順平がいるし。

「……そうだ、ここは里峰君に任せよう」

「あ、良いわねそれ、名案」

「それだと俺達居る意味無くなーか？里峰だとあつという間に全部
倒しちまっじゃん」

「ほほう」

有里は何かもう面倒くさくなったらしく、働かない俺に丸投げし
ようと言っらしい。

「よろしい、ならば戦争だ」
クリーク

「うわ、なんかこっちもノって来てるし」

「まあなんだ、疲れたろ。こっちで休んでろよ」

3人を階段のあるフロアへ呼び戻すと、俺は1人シャドウ達へと
向かっていく。

十字路に広がる通路。

前と右、そして左の3方向からそれぞれ数体のシャドウがこちら
に向かって来た。

こういった場合は流石に同時に相手は出来ない為、1方向に集中
する。

「てなわけで前に居るてめえらから終了のお知らせをいたしますっ
てなア!!!」

足に力を込め、前方へ駆ける。

背後からはシャドウの気配が感じられ、恐らく挟み打ちの形にな
っているのだろう。

3方向でもペルソナと2丁拳銃で相手出来ない事も無いのだが、
2方向の方が楽だし。

まずは前方に居るシャドウに向かって大きく横薙ぎにシャドウを
斬り倒した。

一度の斬撃で複数を巻き込み、大きく隙を作った所に銃弾をぶち込む事で挟み打ちの状態が解除される。

「ハッハア！！もうオネムの時間ですかあ！？ちつとばっかし早すぎんだろーが！！」

続いて背後から向かってきているシャドウと向き合つと、最近こ無沙汰だったケツアルコアトルを召喚、軽くマハガルダインで一掃した。オーバーキル。

「まあ、こんなもんか」

俺は一息つくとゆったりと3人の待つフロアへと歩いて行く。

「……………あなたの力つて、本当に規格外よね」「すっげー……………」

なんか3人とも驚いた様子だった。

「……………ただこれでも勝てない奴も居るんだが……………。狩人とか狩人とか。」

でもそれを言うとなら3人の自信消失につながりそうだから何も言わない事にする。

「……………しっかし里峰みたいに強い奴が居ても今までタルタロスはどうにもならなかったんだろ？」

「俺らでなんとか出来るもんなのかー？」

「おいおい、そりゃ俺の事を過大評価しすぎだろうよ、伊織先輩。」

そもそも俺がタルタロスに行くのは人の為なんかじゃ無くて戦いたいからってだけだし、タルタロスの上の階だったらもつと強いのに

がいるかもって思ってお前らにも協力してるけど、別に影時間を無くしたいって思ってるわけじゃないからな？

かといってタルタロスをなんとかしたいって心から思ってもなんとかあったとは思わねえけど」

「やっぱなー……。俺らだってちつとは強くなったかもだけど里峰にはまだまだ及ばねえし」

シヤドウと戦いたいだけ。

こんな命知らずな言動を放てる奴はそうそう居ないんじゃないかと自負している。

しかし俺の言葉に誰も驚かないのは今までの戦闘時のほっちゃけぶりを見ているからだろうか。

「ま、3人寄れば文殊の知恵ともいうしな。何事も一人じゃ限界つてものがあらあな。

それに、最初に比べりゃ強くなって……!!」

「な、なに？どうしたの？」

俺の様子が変わった事に岳羽は不安な表情を浮かべる。しかし、その言葉に返答する間すら惜しい。俺は人差し指を立てて3人に静かにするように指示する。

3人は首をかしげているがとりあえず俺の言うとおりにしてくれた。

「あそこに金ピカが居るだろ？あれ、あんまり出ない奴だけど倒せば良い金になるんだ」

「……里峰君って、守銭奴？」

「装備に金がかかって毎月やりくりが大変なんだよ。こないだ届いた特注のライフルなんかそれだけで150万飛んでったからな？」

「ひゃくごじゅう!?」「シート！」

家賃2万のボロアパートに住んでるのにこの出費。どゆこと??
て話だ。

更に特製弾薬も1発10万だしふざけんなよ!1発10万て高級ソープかなんかかよ!?

……いや、そういう話はやめておこ。それはさておきあの金ピカを仕留める事が先決だ。

銃に弾を込めようと懐に手を伸ばした所で岳羽が先程金ピカの居た位置を指差した。

「あれ、もう居なくなってるわよ」

「dumb shit!!なんつー逃げ足だ!」

お空の上のお母さん、どこにいるのかも分からないお父さん。
お金の大切さをかみしめながらも僕は今日も元気です。

俺はとぼとぼと脱出用の転移装置へと歩いて行くのだった。

(里峰君って生活大変なんだね……)

(ひゃ、ひゃくごじゅ、まん……)

(……どうでもいい)

続いて三者三様の表情を浮かべながら3人も俺の後ろについてく

るのだった。

守銭奴じゃねえ！こうでもしないと生活が成り立たねんだ！（後書き）

佐藤とか吉岡とか葛木とか無駄にモブオリキャラが出てきてますが、
一応理由はありますのでご了承ください。

敵とか味方とか原作に大きくかわるような人物のオリキャラ（里
峰君を除く）は出てこないのその辺は安心してください。

買なんかに頼らず、レベルを上げて物理で殴れよ（前編）（前書き）

満月です。

「買なんか頼らず、レベルを上げて物理で殴れよ（前編）」

「里峰、君に渡しておきたいものがある」

「ほあ？なにこれ？」

「小型の無線だ。周波数は合わせてあるから、ボタンを押すだけで相手側に言葉を伝える事が可能になる」

「桐条の特別製って奴か」

「ああ、そうだ。この特別製なら影時間内でも動かせる」

影時間の中では本来、機械の類は動かせない。

恐らく、影時間の中を動けるのはペルソナを持つ者……すなわち心を宿している者ではないと動けない為に、人間以前に無機物である機械は動かせないのだろう。

と言っても、機械の範疇がよく分からないけど。手動で動くような物なら普通に動かせそうだし、多分電気を使うか否かとかその辺だと思う。

まあ、何にしても連絡用としては便利だろう。俺は軽い気持ちでそれを受け取った。

・・・

ナニかが呻く声。俺はその声の持ち主に引導を渡した。

しかし、未だにあふれるシャドウ、シャドウ、シャドウ。

今日は何だかいつもの20割増し位にシャドウが出てきている気

がする。

いや、そちらの方が楽しいから一向に構わない……むしろもつとやれと思っっているが、こんな事を言ったら岳羽ゆかりやら伊織順平やらにドン引きされそうだ。

しかし、楽しいんだから仕方ないだろう。刺激があつてこそその人生なんだから。

「んっん〜……いつにもましてご機嫌じゃねえか！あア！？」

タルタロス。今日は俺一人で探索している。

ちなみに、今日は満月だ。

先月の時もそうだったが、今月も何やらシャドウ達の動きが活発だった。

今まではそんなことなかったと言うのに、一体どういう事だろうとは思うものの、強い奴と戦えるならありがたいから気にしない。

街中でもそこそこシャドウの姿を確認出来たし、影時間に迷い込んだ奴は多分桐条美鶴達がなんとかするだろうと俺は一人タルタロスに乗り込んだ次第である。

したらその選択は正解も大正解で、シャドウ達がバリバリ襲ってくるので俺は楽しく戦わせてもらっている、と言う訳だ。

そして今現在、タルタロスという迷宮にしては珍しく教室2つ分程度の割と広い空間で俺とシャドウ達は仲良くじゃれあっている。

円を作るように俺を取り囲むシャドウ達。

前から後ろから、右から左から飛んでくる炎や雷の中を、俺は縦横無尽に駆け巡る。

中々に刺激的な光景だが、1発たりとも被弾してやるつもりは無い。

この程度の攻撃を喰らってるようじゃ狩人と戦った時に大変な事になるだろうしな。

しかしここは先述した通り入り組んだ通路のような場所ではない為、壁を利用して攻撃を回避する事は出来ない。

そのような場所で大量の攻撃を避けようと思っても、いずれ瓦解するのは俺自身よく理解している。

何かきっかけが欲しい所だが……と思ったらおあつらえ向きの攻撃が目の前のシャドウから放たれた。

ブフによる氷塊が俺に向かって飛んできており、まさにグッドタイミングだ！と心の中でブフを放ったシャドウを称賛しながら俺は氷塊に飛び乗った。

「テメエらの仲間から、つまらない物ですがつって差し入れがあるらしいぜえ！！」

続いて氷の塊を両足でつかみ取ると、近くに居たシャドウに向けてそれを投げつける。

それがシャドウ達にぶつかる直前に、俺は両手に持った拳銃から銃弾を放ち、氷の塊を砕いた。

……即席散弾銃の完成だ。つぶてとなった氷を受けたシャドウ達の体には小さな穴がたくさん出来る。更に追撃を加えちやる！

「止めにもう一発！」

ここで地に降り立つと足を止め、前方に居るシャドウ達に対して

大剣をブーメランのように投擲すると、回転する大剣にシャドウ達が巻き込まれていく。

続いて足を再稼働させながら、二丁拳銃でシャドウ達の動きを止め、勢いよく飛んでいる大剣まで追い付きそれをつかみ取る。

大剣に追いつく為の運動エネルギーをそのまま流用し、全霊を込めた一撃を目の前にいるシャドウに叩きこんだ所で俺は一息ついた。

「……………うっし！」

ふう………やっぱり戦いは一人でやるに限るな。周りに余計な要素があると集中できない。いや、まあどんな状況下でも結果を出すつもりではあるんだけどな。やっぱり一人の方が楽だし楽しいよ。

……シャドウを斬る時はね、誰にも邪魔されず自由で、なんとうかが救われてなきやあダメなんだ。独りで静かで豊かで………って何の話だ。

いつにもましてヒートアップしているシャドウに比例して俺も心を滾らせる。

頭は冷たく、心は熱く、だ。

まだまだ獲物は沢山いる。それを確認した所で俺は軽く口角を上げた。

「さあて、死にたい奴からかかってきなア！！」

嗚呼、今日も良い夜が過ぎそつだ。

楽しい、愉しい、タノシイ。

思考が快楽で埋め尽くされる感覚。

脳内麻薬が過剰に分泌される感覚。

「ここ最近は特別課外活動部の面子とつるむ事が多かったからか、思い切り武器を振り回す事が無かった為にシャドウを一気に切り裂くこの感覚が殊更気持ちいい。」

俺は再び大剣を投擲……今度は回転させず、槍投げのように真っ直ぐと正面の敵を貫くように投げた。

剣は数体のシャドウを貫きそのまま壁に礫にすると、貫かれたシャドウ達はさながら焼き鳥の具のような姿になっている……不味そうだ。

「ハハハ！団子三兄弟かつーの！！どっちが長男ですかア！？」

俺は動けなくなったシャドウに引導を渡すと同時に跳躍。

壁に突き刺さった剣の柄に踏切板を踏む要領で飛び乗り、更に跳躍する。

宙高々に舞い上がった俺は格好の標的だったが、そんな事は関係ない。

「無駄無駄無駄無駄無駄アア！！！」

重力に従って地面に落ちるまで、俺は両手に持った拳銃を乱射し地面で蠢いていたシャドウ共を一掃した。

ギリギリまで頭から落下していた為、そのまま顎を軽く引き前転する事で落下の勢いを殺しながら立ち上がる。

そうして辺りを見回すと、シャドウ達の数も残りわずかとなっていた。

先月は巨大なシャドウが街中に現れていた為、今日もこうして暴れていれば何かしら出てくると思ったのだが。

「拍子抜け甚だしいな、オイ。それとも、街ん中じゃねーと駄目なのか……いや、そんなの関係ねーってか？」

大量に沸いたシャドウを殲滅するのに結構時間をかけた。

長時間一つのフロアに居座った時（具体的な時間は分からないが）、奴が現れる。

奴とは言わずもがな

ジャラリ。

懐かしく感じると同時に、その音に恐怖する。

絶対的強者が、越えるべき壁が、そこには居た。

冷めかけた熱が、炎が再び心に灯る。

それと同時に、6年前の恐怖と、先日味わった危機感が胸に宿る。

怖い、嬉しい、恐い、楽しい、コワイ、タノシイ、タノシイ、タノシイ
ノシイ ! ! ! !

「イレギュラーとか知った事か！！出るかも分かんねーのに街中探しまわるなんてつまんねーしなあ！！」

絶対だ、絶対にお前とやり合った方が楽しいよなあ！！ええ！？
狩人さんよオオオ！！」

狩人は何も答えない。答える知能などないのか、はたまた。

俺は小さく笑みを浮かべると、行動を開始した。

「 I · m a b s o l u t e l y c r a z y a b o u t
i t ! ! ! 」

楽しすぎて狂ってしまいそうだ。

……いや、俺は既に狂ってしまっているだろう。

・・・

影時間。

今日は特別課外活動部はタルタロスには赴いていない。

とはいえ、先月のような巨大シャドウが現れるかもしれない為に、桐条美鶴は影時間に入ってからタルタロスの周辺……タルタロスの内部まで調べる事は出来ないので、タルタロスの外周を調べる事でシャドウが外に出て行っていないか調べ、更にそれだけではなく自身の力が及ぶ限りの範囲でずっと索敵を続けていた。

流石に感知がメインのペルソナではないので索敵範囲に限界はあるものの、何もしないよりはよっぽどマシだ、と考えた結果である。

「ぶっ……」

索敵範囲の限界まで探知した結果、異常なしと出た為桐条は一息ついた。

「なんだ、まだやっていたのか？」

「まあな、敵はいつ来るとも限らない」

すると、作戦室から聞こえた物音を確かめる為に部屋へと入ってきた真田明彦は驚いた表情で桐条を見つめる。

いくら異常が無いとはいえ、いつシャドウが現れるか分からないと言っのにずっと気を張り続けるのは難しいだろう。しかし、桐条の言っ通りいつ現れてもおかしくは無いのだ。

「しかし、タルタロスの外まで見張るなんて、出来る事なのか？」

桐条がタルタロスに行かない日には毎日それを行っている事を真田は知っている。

あまり無茶をして身体を壊れたらどうするのだと、真田は桐条に尋ねた。

「本音を言えば、力不足だな……私の『ペンテシレア』では情報収集を行うのはこの辺りが限界なのかもしれない」

やっぱりか、と真田は呆れた表情を浮かべる。

身体を酷使して、限界ギリギリまで探知の包囲を広げているのだから、いつもよりも負担がかかっているだろう。

そんな真田の思考をスルーして桐条は話を切り替えた。

「しかし、ペルソナと言っ力は想像していたよりだいぶ幅広いものらしいな。

何しろペルソナを次々と替えながら戦っ者まで現れたのだからな」

桐条の言っペルソナを替えながら戦っ者とは、有里湊の事である。彼は驚くべき事に、何種類ものペルソナを扱っ事が出来、覚醒して間もないと言っのにその力は里峰竜児すら称賛したものだった。

その応用性は幅広く、特に戦闘に於いては弱点を持つペルソナを

入れ替える事でその弱点を帳消しにする事が出来るのだから、その力は計り知れないものがある。

「確かに、有里のようなヤツが現れるとは驚きだ。

しかし、ペルソナを使うのは俺達自身。それを生かせるかはあいつ次第だな。

……俺としては、里峰の方が気になるな。どうやってあそこまで鍛え上げたのか……」

「ッ……」

里峰竜児は桐条グループの傘下にあつた研究所が生み出した人工ペルソナ使いである。

その事を特別課外活動部の中で知っているのは桐条美鶴と里峰本人だけで、理事長すら知らない。

余計な混乱を防ぎたい、と言うのもあるが何より桐条本人の気持ちの整理がついていないと言うのが大きい。

里峰からしたら別に減る物でもないし教えても気にはしないだろうが、「幼少時に身体をいじくられて強くなっちゃった」なんて特殊すぎる幼児体験を聞かされて人間関係がギクシャクしてもあれだろう。

そんな訳で真田の言葉に対して、里峰について黙っている事を桐条は申し訳なく思う。

自身の罪を知られたくない、と言う醜い部分を見られたくないとか考えているのだろうか。里峰からしたら「いや、桐条先輩は関係なくね？」程度のものだろうが、そう簡単に思考を切り替える事など出来まい。

桐条が何と返答しようか逡巡している時、探知の為の道具から反

応が示された。

「ん……？これは……シャドウの反応？」

どうやらシャドウが索敵範囲に入っただけらしい。

桐条の言葉に真田も驚きを示した。

「何？本当に見つけたのか！」

「でも待て、反応が奇妙だ。大きすぎる……こんな敵は今まで……」

ここまで言ったところで真田も桐条も気がついた。

先月にも居たではないか。大型のシャドウが。

恐らくこの反応も、先月のような大型シャドウと同じなのだろう。

「まさか、先月と同じデカイ奴か?!」

「……間違いないだろう」

「そうか……思いがけず楽しめそうじゃないか」

「明彦、お前は戦列には加えないからな」

「わ、わかってる!……とにかく、他の奴らも起こさないと」

先日検査入院をした真田は、ほぼ快方に向かっていると云っても差支えないだろう。

しかし、それでも今回の戦いで完治が長引くかもしれない。そう考えた桐条の言葉は正しいもので、真田は言い返す事も出来ないまま、他の面々を起こしにかかるのだった。

・・・

前回と違って、今回の戦場は開けている為、回避するのに跳躍してしまふと格好的になつてしまふのは確定的に明らかだ。

「さて……どーしたもんかね」

先日の戦いで引き分けに持つてこられたのは、狩人に攻撃をさせないように壁も地面も天井も何もかもを利用して無理矢理移動を重ねた事で被弾を最小限に減らしたからだ。

今回はそう言う訳にもいかず、地に足をつけてどっしりと構えなければならぬのだが、どっしりと構えて物量で押しつぶされたら話にもならないだろう。

やはり、足で攪乱するしかない。

頭をフルに回転させて簡単な方針だけ決めた所で俺は動き出した。隙あらばライフルをぶちこむ。出来れば零距离で。

となればやる事は簡単だ。

いや、そもそもいつもやっている事だ。

「……攻撃は最大の防御オオオ!!!」

俺は地を駆けながらケツアルコアトルで自身にスクカジヤをかけ、移動速度の上乗せを行った。

そして駆ける速度を上げた俺は、まっすぐ愚直に狩人へと向かう。そんな俺に対して、狩人は悠然と二丁の拳銃をこちらに向けてきた。

拳銃がどういつ武器かっつのは、俺だつてよく分かつている。
双眸見開き、二つの銃口に意識を割く。その射線上に入らなければ、どうという事は無い！

「ッ……！」

銃弾を回避する為に身体を無理矢理捻る。

腹部と左肩をかすめたが、それだけだ。まだまだ動ける。

照準を少しでもずらす為に俺は身体を小さく左右に揺らしながら直進する。

もうすぐ、剣の届く範囲内だ。

俺は左手の銃で銃弾を放ちながら、右手で大剣を握り更に狩人に向けて駆ける。

極限まで濃縮された時間の中で、銃弾が踊る中で、限界まで筋肉を稼働させ、跳躍した。

「オッラアアアアア！！！！」

剣撃一閃、兜割り。

俺は前回の戦闘時と同様に、狩人に対して全霊を込めた一撃を振り下ろした。

しかし、それはやはり前回と同様に受け止められる。

軽く鏝迫り合いのような状態になるものの、やっぱり力負けするようだ。

剣を弾かれた事で、再び宙に浮き上がってしまった。

「チツ……!!」

空中では動けない。後は地面に落ちるだけの的と化した俺に対して、狩人は容赦なく二丁拳銃を向けた。

しかし、空中では動けないと言っても、攻撃できない訳ではない。

時間を稼ぐ為に大剣を狩人に向けて投げつける。
対して狩人は煩わしそうに大剣を右手で弾いた。

(今ッ!!)

俺は背中中のライフルを狩人の左手に向けて、必殺の銃弾を放った。
それは左手の拳銃を撃ち抜き、更には左手を大きく後ろにのけぞらせる。

しかし、左手どころか拳銃すら貫く事が出来なかった。

……どんな素材で出来てんだよ、あいつの銃は。だがしかし、左手の拳銃はあらぬ方向へと飛んでいった。

(チャンスだ!!)

地面に降り立つと同時に右手に向けて狙撃。

こちらも左手と同様に大きく後方へ仰け反り、拳銃を弾き飛ばす事に成功した。

無理矢理連発した事で肩が少し痛い、そうも言ってもらえない。

俺は接近し顔面に撃ち込むべく照準を定めようとしたのだが。

『里峰、聞こえるか?!』

聞きなれたナビの音が、俺の下に届いた。
思わず振り返る。しかし誰も居ない。

……そうだ、影時間での連絡用に小型の無線を受け取ってたんだ
った　　！！

ジャラリ、ジャラリ。

瞬間、嫌な音が、目の前で鳴り響く。

狩人の武器は拳銃しかない、そんな俺の先入観が、反応を遅らせてしまった。

「ツ~~~~！！」

狩人の至近距離まで接近した状態で、狩人の操る鎖をよける事は
かなわず、俺は両手を鎖で縛られてしまう。

「ケツアルコ……ガア！！？」

ミスを悔やむより、現状を打破する事が先決だ。

なんとか反撃すべくケツアルコアトルの召喚を試みるが、簡単に
それを許すはずもなく、時すでに遅し。

『里峰?! 里峰!?!』

俺の懐からこぼれおちた、無線の声だけが虚しく辺りに響き渡る
のだった。

・・・

「クソツ……！開かねえ！！ちつくしよ、ヤラレた！！」

伊織順平が開かない自動ドアを無理矢理開けようとするが、どうやら閉じ込められたようだ。

ここはモノレール。大型シャドウがこのモノレールの中から反応を示しているとの事で、桐条美鶴のナビの下、有里湊と岳羽ゆかり、そして伊織の3人は線路の上を渡りモノレールの中へと入って行ったのだが。

「つか指いてえし！ほらここ見て、指へこんでるっしよ！」

ここに来る前に、桐条から機械は影時間中では動けない（ただし特別製は除く）と言われ、それを信じてモノレールに向かったのだが、なぜか動いた自動ドア。
いや、そもそも本来移動中だったはずのモノレールの扉が全開だったこと自体がおかしい。

その二つが示す事は一つ。

『どうした、何があった？！』

「それが、閉じ込められたみたいで……」

シャドウの仕業、と考えて間違いないだろう。

『成程、間違いなくシャドウだな……確実に君らに気付いていると言っ事だ。』

何が来るかわからない。より一層、注意して進んでくれ！』

「りよ、了解です」

罾を仕掛けてくるようなシャドウだ。間違いなくそこらのシャドウよりも強いはず。

それを考えた岳羽は息をのみながら桐条の言葉に頷いた。

そうして、車両を何台かまたいだところでようやく初めてのシャドウと出くわした。

しかしそのシャドウは何を思ったかすぐに奥の車両へと引っ込む。

「あ！待て！」

伊織はそれを見てシャドウを追おうとするが、桐条が引きとめた。

『待て！何かシャドウの動きが妙だ。ひょっとしたら罾かもしれない』

「そんな！のんびりしてたらシャドウに逃げられちまつかもしれないっすよ！？」

伊織の意見も尤もであるが、里峰が居ない時における探索のリー

ダーは有里と決めている為、まずはそちらに意見を求める。

『有里、現場の指揮は君だ。この状況……君はどう思う？』

「……慎重になるべきだ。こんな罾を張るシャドウ相手に、特攻するのは僕達の力量では身に余るかもしれない」

『私も同意見だ。迂闊に追うべきではないな。』

里峰を呼ぶ。それまで固まって待機は出来そうか？」

「……僕もそれが良いと思います」

岳羽も有里の言葉に同意するように無言で頷く。しかし、伊織は納得がいかないようだ。

いや、そもそも彼は有里が里峰不在時のリーダーを務めていること自体に不満があるらしく、自身の意見が否定された事に言葉を荒げる。

「なんでだよ！？イチイチお前の意見なんか要らねーよ！」

あんなの俺らで倒せんじゃん！てか、オレ一人だってやれるっつーの！！」

「あ！コラ、順平！？」

『危ない、後ろだ！！』

伊織が岳羽の制止を振り切り、先の車両へと進む。

すると、狙い澄ましたかのようなタイミングで2人の背後からシヤドウが急襲してきたのだった。

・・・

「……初めてのパターンだな、これは」

桐条美鶴は一人、探知用のバイクに跨り思考をしていた。

ちなみに真田明彦は怪我の為理事長が作戦室に来るのを待つ……
要は留守番だ。

それはさておき、今までのシャドウなら人間を視認して初めて襲いかかるような、本能的な行動が多く見られていたのにもかかわらず、今回は罫を仕掛けると言う知的な行動が見られている。

これは今までにないパターンで、ひょっとしたら新人の3人には手に余る問題かもしれない。

……安全圏に居る自分が戦いに行けないと言う事がもどかしい。

桐条はそんなネガティブな考えを打ち消すと共に無線を取り出し連絡を飛ばす。

相手は里峰竜児。恐らくはタルタロスで行動しているはずだ。

彼に援軍を頼めば戦局もかなり違ってくるかと桐条は考えている。

このような事態を踏まえて、桐条はあらかじめ里峰に影時間でも稼働する無線を渡していたのだ。

ここからタルタロスまでなら電波は十分届くので、急いで無線を飛ばした。

「里峰、聞こえるか?!」

しかし、最初に聞こえてきたのは戦闘音……ジャラジャラと不吉な予感をさせる鎖の音だった。

無線越しでも分かる、圧倒的な敵意。その場にいたら一瞬で戦意が喪失しているのでは、と考えられるほどの濃厚な死の気配に桐条は思わず息をのんだ。

しかし、里峰竜児と言う男は今その戦場の真ただ中にあるのだ。それをすぐさま思い出し、里峰に呼びかけようとするが。

『ケツアルコ……ガア……!!?』

「里峰?!里峰!!」

無線からは、轟音と里峰のつめき声が聞こえ、残ったのは静寂だけだった。

闘なんか頼らず、レベルを上げて物理で殴れよ（前編）（後書き）

戦闘に夢中で無線の存在を忘れる里峰君ってばうっかりさん

刈り取る者が鎖じゃらって攻撃してくるのはせつかくあるのに使わないってもつたいないよねって思って攻撃手段としてみました。
スキル？ああそんなのもあったよね

買なんかに頼らず、レベルを上げて物理で殴れよ（後編）（前書き）

ヘルシングが届きました。

セラスちゃんマジドラキュリーナ

買なんか頼らず、レベルを上げて物理で殴れよ（後編）

青に包まれた部屋。

俺はそこで誰かと対面していた。

しかし、その誰かは霞がかっており、誰かが居ると言う事実しか分からない。

明らかに見慣れぬ景色。しかしそれを俺は以前にも見た事がある気がする。

確か、あの時は……………駄目だ。何も思い出せない。そもそも、意識が、思考がまともに働かない……………。

俺が自身の記憶を探っている中で、目の前の誰かが口を開いた。

「……………そ、…べ……………へ……………」

何だ？何を言っている……………？
定まらない視界に定まらない意識。

「……………だ、届いよす……………」

誰だ……………誰の声なんだ……………？
いや、今はそんな事を気にする暇は無い。
俺は確か、狩人と……………戦って……………？

その時、視界が一気に晴れた。

「いい！？」

意識が覚醒した瞬間、目の前から鎖が飛んできた為に思わず転がって避ける。

そうだ、狩人とやり合っていたんだっただけ！！それで、不覚取っちまったんだ……クツソ、右腕折れちまってんな……。

とりあえず桐条美鶴から連絡があった、と言う事はシャドウが出現したのだろう。

ならば早急に桐条と連絡を取り現場に行く必要がある。

そう考えた俺は足元に落ちている無線を拾い上げ、連絡を飛ばす。

「聞こえるか、桐条先輩」

『無事だったか、里峰！』

桐条は驚きと安堵を一緒くたにしたような声色で返答をよこした。まあ確かに第一声がぐはあとかそんなんだっただらびびるわな。

とりあえず何があったのか知りたいので、狩人に威嚇射撃とケツアルコアトルによる牽制を行いながら返答する。

「シャドウか？俺はどこに行けばいい？必要事項を最低限述べろ。それ以外の言葉は邪魔者でしかない」

『……！今現在私達はポートアイランド駅からモノレール内にてシャドウと交戦中。』

敵は私達を畏にはめる程の知性を持った敵だ。故に君の力を借りたいが、しかし……』

桐条の言葉尻からは「大丈夫なのか？」と言う心配がありありと見て取れたって言うか聞いて取れた。

しかし、そうか……やっぱり出たのか、先月と同じく強力なシャドウが。

ならば向かわねばなるまいな。

そういう命令オーダーが今まさに下されようとしているのだから。

「ポートアイランド駅だな？了承した。シャドウの詳しい位置を後で教えてくれ。今は撤退が優先だ」

『そ、そうか。分かった……気をつけるよ』

「そつちこそ」

兎に角、契約している以上いつまでも狩人とお楽しみと言う訳にもいかないか。

つか、右手が動かない状態で戦闘しても勝ち目などありはしない。
いやまあ手段が無いわけでもないんだが……。

自殺したいならこのまま戦うけど、かといってそう言っつもりなど毛頭ない。

……とはいえ、そう簡単に狩人が逃がしてくれるわけがないのだけれど。

さて、ある人が言いました。「逃げる手段が無ければ作れば良いじゃない」と。

俺はそれを今まさに実行しようと思います。

「……ケツアルコアトル、マハガルダインだ」

俺の言葉と同時に、嵐が吹き荒れる。

暴風と言う名の透明な塊は狩人を食い破るべく突き進んだ。

対する狩人も拳銃を天へ向け発砲。

俺と同様にマハガルダインを放ってきたようで、嵐と嵐がぶつかり合った。

しかし俺と狩人との地力の差は大きく（もちろん狩人に分がある）、俺のマハガルダインはじわじわと押されてきている。

まあ、ちよつとの間だけ時間を稼げばよかつたんだけどな。俺は意識を自分に向け、脳からの指令を変更した。

「リミット解除。60%」

人の筋肉は、普段は全力の30%程に制限がかけられている。

と言うのも筋肉を100%稼働させるとそれに身体が追いつかなくなり、筋繊維や関節、腱等が壊れる恐れがあるからだ。

しかし、裏を返せば身体を壊す事と引き換えに、人間は人智を超えた動きを可能にする。

ましてや人体実験で基礎体力の底上げを行っている俺なら、理論上その恩恵は計り知れないものとなっている。

10年前の人体実験に於いて、運動能力や戦闘技能以外で俺が得た物。

それは『意図的な筋肉の制限解除及び意識的な細胞分裂の促進』である。

前者で運動能力の更なる向上を図り、後者で前者による身体の破壊を修復及び外的要因による損傷の回復を行う、というものだ。

だが、細胞分裂と言う現象は1度の人生において、数に限りがある。

すなわち、リミットを解除する事は命を削るに等しい行為なのだ。故に俺は実験を除いてリミットを解除した事は今までに2度しか無い。

言うまでも無く、6年前と10年前。いずれもシャドウに敗北を喫した日だ。

(あー、間違いなく葛木にどやされるわ)

二度にわたる手術において葛木にバレた事。それがまさしくこのリミッター解除の事であり、これを行ったら必ず病院に来るようにと言われている。

先程まで頭に血が上りすぎているのではと言うほど興奮していたのだが、狩人の攻撃を受けた事でその血が抜けたからか思考がやけにクリアだ。

「脚部強化及び右腕修復 完了。」

……ついでにケツアルコアトル、スクカジャだ」

肉体の稼働率を30%から60%に引き上げた事で、単純に今までの2倍速くなる。

更にスクカジャで移動速度と回避能力の向上を図り、後は逃げるだけだ。

俺が逃げようとしている事に気付いたのか、狩人は拳銃をこちら

に向け更に追撃をかけようとする。

しかし、もう遅い。遅すぎる。

……まあ、急激に俺の動きが変化したからだろうけど。もしこの状態で戦ってもすぐ対応してくるんだらうけど。だから対応される前に逃げる。

「オーブンセサミってなァ！」

両手に持った拳銃から弾丸を放ち前方に見える窓ガラス……のようなかにかにひびを作ると、そこに突進。

ガラスの割れたような甲高い音が鳴り響くと同時に俺はタルタロスから飛び降り、離脱するのだった。

「じゃあな！俺の負けだよ、クソツタレ！！」

宙を舞う最中、俺はリミッターを通常状態に戻す。

それと同時に脚部を中心に筋肉痛のような痛みが走った。

しかし……2敗1分か……。はあ。

やっぱり弱いな、俺。

・・・

「里峰！？里峰、返事をしろ！！」

桐条美鶴の思考は真っ白と化していた。ただただ里峰竜児の安否を気遣うばかりで他に何も見えていない。

しかしそれも仕方のない事かもしれない。何せあれだけの力を持つていた里峰と言う男がシャドウに後れを取るとは思ってもみなか

ったのだから。

だがしかし、これは現実で、返事の無い里峰から察するに深手を負って返事を返す事が出来ないと考えるのが妥当なのだろう。

そんな中でも事態は更に悪化して行く。

伊織順平が独断で行動を始め、更にそれを止めようとした有里湊と岳羽ゆかりはシャドウに足止めを食らい、伊織と2人は分断されてしまったのだ。

指示を出さなければならぬ。

かといって里峰を放っておく事など出来ない。

しかし桐条が逡巡しているさなか、無線から声が発せられた。

『聞こえるか、桐条先輩』

「無事だったか、里峰！」

桐条は思わず安堵の息をつく。

何せ最初に聞こえてきたのが里峰竜児の呻き声なのだから、心配するなと言う方が難しいだろう。

しかし、里峰はそんな桐条の心配をよそに淡々と言葉を発した。

『シャドウか？俺はどこに行けばいい？必要事項を最低限述べろ。それ以外の言葉は邪魔者でしかない』

「ッ……！今現在私達はポートアイランド駅からモノレール内にてシャドウと交戦中。

敵は私達を畏にはめる程の知性を持った敵だ。故に君の力を借りたいが、しかし……」

大丈夫なのか？そんな疑問が頭をよぎる。

人間には、自身が危機に陥った際、二種類の傾向が見られる。

一つは無駄に口が達者になる事と、もう一つは逆に必要最低限しか言葉を発さなくなる事。

明らかに里峰は後者で、いつもの軽口が見られない程に余裕がなくなっているのだろう。

しかし、そんな桐条の思考を知ってか知らずか里峰は一気に捲くし立てた。

『ポートアイランド駅だな？了承した。シャドウの詳しい位置を後で教えてくれ。今は撤退が優先だ』

ここまで言われては引き下がらざるを得ないだろう。

と言うより、時間の無駄を避けたいと言うのは桐条も同じな為、里峰が心配いらないうのならば心配しなくていいのだろう。

それでも、里峰の身を案じてしまうのは仕方ない事だ。

「そ、そうか。分かった……気を付けるよ」

『そつちこそ』

桐条は里峰の言葉にうろたえながらも受け入れた。対する里峰は軽い口調でその場の会話を締めくくる。

そして再び静寂が戻り、桐条は一息ついた。

……しかし、戦況は待ってなどくれはしない。

『桐条先輩！！順平の奴が突っ走ってシャドウに囲まれています！ナ

「ピをお願いします!！」

「ああ、分かった!里峰ももうすぐやって来る!出来るだけねばってくれ!」

『了解です……キャ!?!』

「どうした、岳羽!?!」

『い、いえ……このモノレール、動いてる!?!』

「なっ!?!」

そんな馬鹿な。と考えた瞬間、その考えを自分で否定した。

何せモノレールの自動ドアが勝手に動いていたのだ、モノレール自体が動いたってなにもおかしくは無い。

しかしこれでは里峰が追いつけないではないか、と桐条は悪化する現状を齒がみした。

「……いや、出来ない事を数えていても仕方ないな。有里!岳羽!そいつらは両方火炎属性が弱点だ!」

『了解です!』

再び通信が途絶える。

桐条が空を仰ぐと、そこには爛々と輝く満月が視界にちらついていた。

・・・

「オルフェウス！アギだ！！」

「イオ！順平にディアを！」

有里湊のペルソナ『オルフェウス』が放った火炎がシャドウを焼き払う傍ら、岳羽ゆかりのペルソナ『イオ』が傷ついた伊織順平を癒した。

一人先行してシャドウに囲まれた伊織は強がっているのか、無然とした態度を保っている。

そして有里が最後の1体に止めを刺した所で一同はようやく落ち着きを取り戻した。

「言わんこつちやない！一人で無茶するからよ、もう！」

「ただ、大丈夫に、決まってるんだろ？」

「っ！あんだねえ……！！」

岳羽が伊織の独断専行を責める傍ら、有里はボーッと窓の外を眺めている。

いつもなら有里のマイペース、と言う一言で済ます所だが今回はそう言う訳ではないらしい。

「……モノレール、動く速度が上がってる。

早く止めないと、影時間で止まってる別のモノレールに追いつくかもしれない」

「「……！！」」

有里の言葉に2人は驚愕した。

確かに0時に発車するモノレールは多くないかもしれないが、0ではないのだ。

となると他のモノレールに追いついてしまえば衝突は免れない。

あり得る未来を思い描き顔を青くする2人に対し、有里は落ち着いた様子で足を前へと進める。

「モノレールを動かしているのがシャドウなら、倒すしかない」

明らかな危機を前にして、この落ち着きようである。

「……そう、だね。よし！2人とも、頑張ろう！」「……そーだな」

それは岳羽の緊張をほぐし、伊織の心を強く揺さぶるものだった。しかし、今は仲違いなどして暇は無い。伊織は自身の思いを飲み込むと、先導する有里と岳羽について行くのであった。

・・・

「うわー……何あれ……」「どこのインリンだよ!?!」「……」

先頭車両に辿り着いた3人を待ち構えていたのは、やはり大型のシャドウ……なのだが、女性型のシャドウらしく、白と黒を半分に分けたような色の肌と長い髪の毛。スレンダーな体にM字開脚とパピヨンマスクと言う何とも悪趣味な格好をしたシャドウであり、こんなのの罫にハマったと思うと何だか悔しくなる。

しかしこれを倒せばモノレールも止まるだろう。そう考えた3人は一斉に攻撃を開始した。

「イオ、ガル！」 「ヘルメス、スラツシュだ！！」 「オルフェウス……アギ！！」

風が火炎を煽り、その傍らで伊織のペルソナ『ヘルメス』が翼をはためかせ大型シャドウへと向かっていく。

しかし大型シャドウはそれに対して2体のシャドウを召喚し、これを壁とする事で防御した。

『チツ！召喚とは小賢しい！こいつの名は『プリーステス』！

氷結属性は反射する奴だ！物理攻撃か、スキルを使用する場合は火炎と疾風属性をメインに戦え！』

「了解！！」

桐条美鶴の指示を受け、3人は更に攻撃を続ける。

モノレールと言う非常に狭い場の中なので、攻撃を放てば避ける事など出来ない。

……それは3人にも言える事なのだが。

『召喚する間を与えるな！3人でタイミングを合わせて攻撃しろ！』

「だったら俺から！ヘルメス、アギ！！」

「イオ、ガルよ！」

「……オルフェウス、アギだ」

伊織がアギを放つと、続いて岳羽がガルを放つ。

更に遅れて有里もアギを放ったが、それらは全て召喚によってガードされてしまう。

「まだまだあゝ！！ヘルメス、スラーツシュ！！」

「もう一度、ガル！」

「オルフェウス、突撃！！」

タイミングをずらしての攻撃を繰り返す事数度。

最初はシャドウを召喚する事で壁を為していた大型シャドウ……プリーステスだったが、徐々に3人の波状攻撃に召喚が追いつかなくなり、ついには攻撃を受けるようになった。

「オルフェウス、アギだ！」「ヘルメスもアギ！」「行くわよ、イオ！ガル！！」

火炎と暴風を身に受けたプリーステスはひるんで動きが緩慢になる。

それを好機と見た3人は一気にプリーステスへと駆けだした。

「「おおおおお！！！！」」

3人による総攻撃によって、プリーステスはその身を床へと落としました。

あからさまに弱まっている姿を見て伊織は心底安堵したように溜息をつく。

「はあ……これで電車も止まんのか？」

その場に座り込む伊織だったが、その背後から倒れ伏しているプ
リーステスの髪の毛が伊織を狙っていた。

しかし伊織は気を抜いてしまっているようで全く気付いていない。
岳羽がそれに気づき声を上げようとしたのと同時に、有里は行動を
開始した。

「……………フッ!!」

手にしたショートソードを振るい、プリーステスの髪の毛を斬り
裂く。

続いてオルフェウスを召喚してそのままプリーステスに止めを刺
した。

その光景を啞然とした様子で伊織は見つめていたのだが、そんな
伊織に対して岳羽は諭すように口を開いた。

「……………順平、あんたなんか言うことあるんじゃないの？」

「……………悪かったよ。自分勝手に動いて」

「いや、構わない。それより……………」

サラリと流した有里だったが、その視線は伊織にはなく、窓の外
を向いていた。

その風景はモノレールが動いていると理解出来る光景であり、と
てもじゃないが速度が減速されたようには見えない。

「……………止まって、ない」

それもそのはずで、世の中の物理法則には慣性なるものが働いて

いるのだから、ブレーキを踏まない限りは徐々にしか速度が減少する事は無い。

『どうした、3人とも?!前のモノレールにもうすぐ追いつくぞ!』

「嘘でしょ!?!」「ウガー!こんなモンの運転なんて分かつかよ!」

自然に止まるのを待っていると衝突は免れないらしい。

とはいえ列車の操縦席の構造など知る由もなく、伊織と岳羽は慌てふためくのみだった。

操縦席からも前に止まっているモノレールが見える。しかしこの車両が残りの距離で止める気配は無い。

「きゃあああ!」

岳羽が悲鳴を上げた瞬間、有里は操縦席へと駆けだした。

...

「あー、足痛エ」

俺は今屋上から屋上へと飛び移りながら移動を続けている。

どうやら有里達はモノレールの中にシャドウがいてその中に入ったら閉じ込められたらしい。

そういう罠を仕掛けるシャドウってのは俺も初めて聞いた為、興味が沸いてきた。

更にはそのモノレールが動き出したとついさっき連絡が入った為、

俺は桐条の居る駅ではなくモノレールの方へと直接向かう事にした。しかしあれだ、やっぱり足が痛い。どれ位の速度でモノレールが走ってるかは知らないが、場合によっては追いつく為の手段を講じる必要があるかもしれない。

「……とりあえず、モノレール発見」

俺の視線の先には影時間だと言うのに走行を続ける車両。

ビルの屋上からレールの上へと飛び移ると、モノレールの100メートル程後ろから追跡を始めた。

俺とモノレールは速度としては同じくらいだが、同じでは駄目だ。追いつけない。

更に言うところやらあのモノレールはまだ速度を上昇させているらしく、じわじわと差が付き始めていた。

「モノレールを乗っ取り、あいつらを誘いこんだ理由……そんでモノレールを走らせてるってところを見ると……別の車両にぶつける気か？」

なんでまたそんな自殺めいた事を……と、思うがシャドウの考える事なんか分かる訳が無い。

兎に角モノレールの衝突だけは避けたい為、俺もまた速度を限界まで上昇させてレールの上を走る。

そうしてしばらくの間徐々に差を縮める事に集中したからか、俺とモノレールとの差も残りわずかとなっていたのだが、ついにその

時がやってきてしまったようだ。

「h o l y s h i t ! ! !」

思わず悪態をつく。

それもそのはずでレールは長い曲がり角に入ったんだが……その曲がり角の終点には動かないモノレールが鎮座してやがる!!

しかもモノレールの方は加速する事は無くなったがかといって減速する気配を見せない。まあブレーキかけなきゃ当然だわな!!

一先ずモノレールを操る大元が居なくなつたか確認だけ取る為、俺は桐条と連絡をつないだ。

「オイ! シヤドウは倒したのか?!」

『里峰か! 今どこにいる!? 3人は敵シヤドウの殲滅に成功したんだが、モノレールが止まらないんだ!』

「オーケーあの暴走特急を止めろつて事だな!?!」

俺は桐条の返答を待たずに無線を切ると、意識を脳内へと集中させ、モノレールを止めるべく行動を開始した。

「ッ……! リミット解除、80%! ケツアルコアトル、スクカジヤだ! ! !」

もっと早く、もっと速く、もっと、もっとだ!!

「だあああ!! クソツタレがあああああ!! ! ! !」

俺がモノレールの前に立った時、モノレール側からもブレーキの音が響き渡った。

レールから火花を散らしながらも突き進むモノレール。後は俺がそれを抑えるだけ　　！！

「んがあああああああ！！ケツアルコアトルウウウ！！ガアルウウラアアアア！！！」

真正面から鉄の塊を受け止めた事で、全身をハンマーでぶん殴られたかのような衝撃が走った。

しかしそれによる身体の損害は逐一修復されていく。

続いてブチブチ、と筋肉から嫌な音が鳴り響くがそれも言ったられないだろう。

足を踏ん張り、更にケツアルコアトルの生み出した暴風をモノレールの正面にぶつけ運動エネルギーを無理矢理相殺していく。

それでも圧倒的質量を前にじわじわと後ろへと押されていくが、なんとかモノレールは衝突することなく、止まった。

今日は今までになく冷や冷やさせられた日だったな……。狩人然りモノレール然り。

「ハア……流石に帳尻合わせで元の場所にモノレール戻すとか……言わないよな？」

流石に身体がもたんわ。

車両の運転席から見える有里のサムズアップに応えた後、そのまま俺の意識は途絶えるのだった。

買なんかに頼らず、レベルを上げて物理で殴れよ（後編）（後書き）

クリスマスが今年もやって来る……胸が熱くなるな……

夢と現実の狭間で（前書き）

キャラ崩壊注意です。

読んで不快に思われる方も居るかもしれないので注意です。

意味なんて欠片も無いネタ回

夢と現実の狭間で

起きろ、里峰

んあ……？誰だ……？こっちは眠いんだ、ゆっくり寝かせてくれ……。おや……すみ……。

里峰、起きるんだ！起きろ！起きなさい！！

う、うるせええええ！！？誰だようるせえええ！！

「何！？何だよ！？人の安眠を妨害しやがって！！」

「やっと起きたか、里峰」

「なんだ桐条せんぱ……何そのカツコ……？」

「趣味だ」

「趣味？！そんなアブノーマルな！？」

「喧しい！！黙らんとこの鞭で叩くぞ！！」バシィッ

「痛い！！あれ、痛くない！？つかもう叩いてますが！！！？」

「さあ、私の恐ろしさを理解した所で周りを見てみる」

「はあ、はあ……こ、ここは、何処だ……？」

「よくぞ聞いてくれた！ここは……言うなれば訓練場だ！！」

「は、はあ……訓練ですか……？」

「そうだ！里峰がバイクを乗りこなす為のな！！」

「そ、そうですか。で、そのバイクはどこに……？（そついえばバ

イク好きだったんだっけか、この人。つかその格好だとう見ても三角木馬にでも乗せられそうなんだけど」

「うむ、やる気だな。里峰？そうかそうかそんなにオーバードライブしたいか」

「いえ、あなたの格好程オーバードライブしてないと思いますが」

「はっはっは、謙遜などするんじゃない。さあ、乗れ！！」

「……え？」

「何をしている、早く乗れ！！」

「いや、乗り物なんてなんてないじゃないですか」

「私に乗れ！！」

「まさかのどM！？どう見てもS側の恰好してるくせに！！」

「喧しい！！風を感じたいのではなかったのか！！？」

「どう見ても自分で走った方が早いわ！！」

「！！！？」

「いや、何だよその発想は無かったみたいな顔は」

「そう、か……私もまだまだ鍛えが足りないらしい。ならば見ているといい！いずれ君よりも速くなる！！」ダダダ…

「ちょ、待てよ！……って意外に足速いなあの人！！

……で、何なんだ、ここは」

テレットツテゝ順平は、レベルアップウゝ

「そ、その声は！！伊織先輩！？」

「そのとおお〜り!!!全てのレディ達に無償の愛をふりまく天才高校生、ジューンパー様とはこの俺の事さ!!!ホオオオオオオオオオオオオオウ!!!」

「お前誰だああああ!!!?」

「ご無事か、主よ!!!」

「その声は真田先輩!?」

「先輩ではなく、パンチャーと呼んでくださらないか?我が主よ」

「何の話だああああ!!!?」

全くもう、いつまで寝てる気なの?

「岳羽先輩……(よかった、普通だ)」

「そんな偽物達に構ってないで、さっさと起きなさい」バンバン

「うぎゃああああ!!!」

「伊織先輩いい!!!真田先輩いい!!!つーかどこから取り出したその二丁拳銃!?!」

「一ついいこと教えてあげる。

「こんなものはね、撃てて当たれば良いの」

「いや、それでフレンドリーファイアしてりゃ世話ねーよ!つか明確な殺意を持ってやったろアンタ!!!」

「!?!」

何だ今の夢は、ありえねえぞ!! つかなくて夢ってどんなに異常な状況でもそれが夢なんだって理解できないんだ!?

あれ程ありえん夢なら明晰夢的な感じで夢だって理解しろよ!!

しかし寝汗が酷い。それほどまでに酷い夢だった。普段なら夢なんぞあつさり忘れると言うのに、強烈過ぎて記憶から抹消出来ない。俺は一度落ち着いて汗を一拭いすると、驚いた表情を浮かべている見知った女生徒が視界の端に映った。

……長谷川さんだ。俺はうろたえながらも目覚めの挨拶を交わすべく口を開く。

「お、おお、長谷川さん。おは、おはよー……」

「え? お、おはよう……里峰君、うなされてたけど大丈夫……?」

もし俺が目覚めて最初に見た人間があいつらだったら間違いなくもっと狼狽していたに違いない。

それ程までに酷い夢で、酷い目覚めだった。ありがとう長谷川さん、あなたのおかげで俺の平静は保ててます。

さて、平静を取り戻した所で俺はあたりを見渡す。

どうやら病院の個室らしい。患者衣を着てるところを見ると案の定入院してるらしい。

いや待て……そういやあの場でぶっ倒れたって事はライフルも拳銃も剣も桐条にボツシュートされてんのか?!

「冗談じゃねえや！もし勝手にいじってみろ！桐条の名がついてる会社片っ端から襲撃するからな！！」

「えと、里峰君？大丈夫「だいじよばない！」「ご、ごめんなさ……」

おつといかん、長谷川さんは何も悪くないのに当たり散らしてしまった。

しかもここは病院だ。いくら個室とはいえ騒いだら周りの迷惑になるだろう。

俺は一度咳払いをすると長谷川に謝罪した。

「……すまん長谷川さん、何か俺錯乱してたみたいだ。それで、長谷川さんはどうしてここに？」

「ええつとね、里峰君が入院したって聞いたから……来ない方が良かったかな……？」

あれ？そういや俺が入院した理由、どんな理由なんだろうか。モノレールと正面衝突して入院しました、なんて言えるはずもないし。つかモノレールはどうなったんだ？まあ入院に関しては有里も1週間位意識飛ばしてたみたいだし適当に理由つけてくれてんだろ。

それでも疑問は尽きないのだが、それは後で桐条にでも聞いた方が良さだろう。今はちよつとしょんぼりしている長谷川さんのフオローに回るべきだ。

「そんなことないさ、むしろもつといてほしい位だ」

それもこれもすべて妙な夢を見たせいだ。

言葉では言い表せないようなおかしな夢だったんだ。

「つーかたかだか夢ごときに俺は落ち着きを奪われたのだから洒落にならない。」

「そんな中俺を癒してくれた……そう、戦場に咲く一輪の花とでも言つべきだろうか、長谷川さんは。癒しです。」

「それはさておき長谷川さん。今日って何日？」

「16日だけど……あ、そうだ。お医者さんに里峰君が目を覚ましたって事知らせなくちゃ」

「16日ってーと……うげ、1週間寝てたって事か……やっぱりミット解除あぶねーな。」

「つかそんなに意識とんでた奴が目を覚ましたってのに長谷川さんは中々肝が据わってるっつーか。マイペースだな。」

「長谷川さんが病室から出て行った事で俺は一人になった。」

「つか長谷川さんよ、ナースコールを使えば一発なのに……気がきくのになとここで抜けてるな。」

「まあいいか。お陰で心を落ちつける事が出来た。」

「……あの時出た大型シャドウとやら。俺はそのご尊顔を拝見する事が出来なかったが、モノレールに誘い込んで自分ごと別の車両に突っ込んでやるうってほどのクレイジー野郎だ。」

「先月もそうだったが、そんな奴がどうして急に現れ出したのか……どうにもきな臭いな。誰かの差し金か？それとも……。」

「と、ここまで思考を広げた所で長谷川さんが葛木を引っ張ってきた。」

「……君にはいちいち説教するのも飽き飽きしてた所なんだ」

「そりゃ気が合うな。俺もいちいち説教喰らうのに飽き飽きしてた所なんだ」

「……はあ……とりあえず、傷はあらかた治ってる。簡単な検査を終えればすぐにでも退院できるだろうさ」

「そら重畳だ。月曜から中間テストなんでね、真面目な生徒としては勉強しねーと思って思ってたんだ」

「そつだ、18日から試験があるのかなんとか吉岡が言っていた。奨学生的にはちゃんと成績のこしとかねーと。」

「そもそも入院自体必要ないか思ってるんだが、流石にそれと言ったら葛木にぶっ飛ばされるので何も言わない事にする。」

「俺の思考を知らない葛木はうんうんと頷きながら俺の言葉に返答した。」

「そつだね。学生は勉強が本分だ。決・し・てそれを忘れるんじゃないぞ。」

「後、今日一日は入院してもらおうからそのつもりで」

「はいはいわかってますつての。それよか他の患者さんの検診にも行ってこいよ。俺はここで寝てるから」

「俺が素直に入院する事が分かったからか葛木は踵を返す。すると一度だけ長谷川さんの方を向いて声をかけた。」

「全く……ああ、君は彼のご学友かな？」

「あ、はい。そうです」

「見ての通り彼は馬鹿なんでね。学校で無茶しないように、君からも注意してほしいな」

……一言多いぞクソ野郎。

「分かりました、出来るだけやってみます」

「それじゃ、頼んだよ」

言いたい事言って満足したのか、葛木は何も言わず去って行った。つか長谷川さん、出来るだけやってみますっておま……。学校じや大人しくしてるつもりなんだけど？借りてきた猫以上に静かだろオイ。

「とりあえず何だ。中間試験の勉強せねばらんから、ちよつと手伝ってもらっていい？」

「うん、良いよ。私も復習出来るしね。何からする？」

「つつても教科書もなんもねーしな。適当に数式の証明でもするか？」

「うん、分かった。……じゃあ、微分と積分辺りから攻めてみようかな？」

長谷川さんはそう言って病室に置かれた紙と筆記具を取り出し、問題の記述を始めた。

……少しの間位、シャドウの事は忘れて勉強に集中してみるか。

あれ？つか微分積分つてもう習ったっけ？……まあいいか。

長谷川さんが紙にペンを走らせている間、微分と積分の定義を脳内の記憶から抜き出す作業を行った。

「じゃあこの式を導いてみて？」

「はいよー」

こうして俺は、ちょっとした青春を素直に享受することにしたのだった。

・・・

「桐条のラボに君の武器は保管してある。」

……モノレールに関してはやはりニュースになってしまったな。

流石にあれを元に戻すのも誤魔化すのも無理だった……その責任が運転士に向けられてな。

なんとか彼は桐条グループで秘密裏に援助しようと考えている」

「あ、ああ……さいですか」

「ん？どうした、里峰」

「いや、何でもないっす……」

長谷川さんは夕方位に帰って行った。それと入れ替わるように桐条美鶴がやってきたのだが、夢を思い出してしまい顔が引きつってしまった。

それを見て怪訝そうにする桐条だったが、全部俺が悪いんで気にしないでほしいです。つかやっぱり武器は桐条の所かよ……。

桐条先輩自体は信用しているが、桐条と言うグループは信用できない。今はどういふ行動を取っているかは知らないが、警戒するに越した事は無いだろう。

とはいえ警戒してる事を悟られたら桐条先輩が嫌な思いしそうだからバレないようにするつもりだが。

武器の話をしたと言う事は返してもらおう話になるのかな、と思っていたのだが、桐条の口からとんでもない言葉が飛び出してきた。

「だがしかし、中間試験の間は返さないつもりだからそのつもりでしっかり勉強しろよ」

……？

……??

……!!!?

「……once more please?」

「里峰、君は試験中でもタルタロスに行く気だろうか?」

「イ、イカナイヨ、オレ。タルタロス、イカナイ。オレ、ツカナイヨ、ウソ。ダカラ、ブキカエシテ」

ふざけるな！武器が無いと落ちつかねーんだよ！おしゃぶりから抜け出せない赤ん坊のように落ちつかねーんだよ！！

後生ですから！！後生ですから！！戦わないとストレスで死んじやうんです！！禁断症状でちやうんですよ！！？

「駄目だ。ちゃんと勉強しろ」

まさに取りつく島も無い。

「しました！ほら！」

俺は勉強具合をアピールする為に昼間長谷川さんと勉強した内容を記した紙の束を見せる。

それを受け取った桐条は式を一つ一つ見ていくと感心したように頷く。ふふ、これで分かったろう？俺にテスト勉強は不要で、必要なのは戦いだと言う事が。

「ほう……これはよく出来ているな……。しかし里峰、前半は使えるだろうが後半はテスト範囲から逸脱しているではないか」

「それはほらあれ、前半だけ見てもらえたらなって」

「見てみる、最早複素解析学のレベルだぞ。これ」

「いや、でも巡り巡って何かに使えるんじゃないかって」

「つまり、試験範囲の勉強は碌に出来ていないんじゃないか？

更に言うと、君は奨学生だから成績は残さねばならんだろう？

……明日はみっちり復習するから覚悟しておけよ」

「いやいやいや、一人で出来るから！今までもそうやってきたし」

「……テストが終われば桐条のラボに案内してやる。下手に襲撃でもかけてみる？ 桐条が総力を上げて君を捕まえに行くからな」

「そんな殺生な……」

「諦める、病み上がりでタルタロスに行かれてもこっちが心配するんだ」

思考すらトレースされる始末。

成程、無茶やらかした代償がこれと言う事か。何も聞かない代わりに試験期間は何もさせない、と。

クソツタレ、仕方ねえな。それなら素直に勉強してやるよ畜生め……。

俺は親の仇を見るような目で桐条の提案と言う名の命令に従う事にした。

「……テスト終わったその日に武器は返してもらっからな。あれ無いと深夜にグズツちまうから」

「分かってるさ。しかし、あの時君はモノレールの衝突を真正面から防いだそうだな……」

「どうやって、と言うのは見当ついているだろう。何せ俺は桐条の下で開発された存在なのだから。」

しかし、だ。

モノレールと言う重量にブレーキがかかっていたとはいえ殺しきれない速度を持った塊を受け止める等、いくら人より動けるからと

言ってそのような事を実現するには何か「代償」が必要なのではないか。

多分、桐条はそんな事を考えてるに違いない。それ故の発言だろう。俺が一体何をしたのか知る為に。

「そーだな、桐条先輩なら教えておいても良いか……？まあ別に減るもんでもねーし」

「そ、そうか……」

「……一言で言えば、人知を超える引き換えに命を削ってるってところか」

さらりと俺の力の全容を告白する。まあ、あんなもんを止めようと思ったら普通の人間じゃ無理だもんな。

俺の言葉に理解が及ぶものの、当然納得していないようで桐条は俺に対して口を開いた。

「ッ……！君はどうしていつもそんな無茶を……！」

「こんなもん無茶にも入らねえよ。「あれ」と相對するのに比べりゃ」

桐条の俺に対する思いやりみたいなもんは感じ取れる。しかし、俺は止まらない、止まらない。

俺の生きる理由が、シャドウを倒す事である限り、俺は命を削る事を厭わないだろう。

桐条はまだ納得いってない様子だったが、俺の言葉に渋々引き下がると続いて「あれ」という言葉に興味を示した。

「そうだ、あの時君は何と戦っていたんだ？」

「……俺は「狩人」と呼んでる。はっきり言ってる俺じゃまだまだ敵わない相手だ」

狩人。いつか絶対地べたに這いつくばらせてやる。

とはいえ俺の我がままにこいつ等をつき合わせる気は無い為、有里らと行動する時は細心の注意を払って狩人と遭遇しないようにしてきた。

と言ってもさっさと次の階へあがるだけなんだがな。

「……！そんな敵が居るとはな……しかし、私達が探索してる時は一度も遭遇した事無いぞ？」

「そらそうだろうな。あのクソツタレが現れるのはタルタロス内で同じ階層にある一定時間留まった時だけだからな。」

その時間は結構長いから出くわす事は無いだろうさ」

俺すら敵わないシャドウが居ると知り驚愕を露わにする桐条だったが、俺より強いシャドウなんて上の階層に行けばうじゃうじゃいそうな気がするけどな。

あんなだけ高いのに上の階まで雑魚で溢れてる訳が無い。RPG的に考えてあり得ないだろ？

「そうか、それならいいんだが……君はいずれその狩人とやらに再び挑むつもりなのか？」

「まあなー。あいつ倒すのが一つの分岐点だと思ってる」

そう。あいつを倒して初めて力の証明が出来る。先に進む事が出来るんだ。

「成程な……分かった。それなら私は何も言わない。出来る事があれば協力しよう、何でも言ってくれ」

「マジでか？サンキュー！手始めに武器をかえしてくれ」

「それは駄目だ」

「畜生……」

思わずうなだれる俺を見てクスリと微笑む桐条。

用事はもう済んだようで、見舞いの品を置くとそのまま帰って行った。

果物詰め合わせか……。

詰め合わせの内容を確認すると、以前初対面の時に言った事を覚えていたらしく、梨だけは詰め合わされていなかった。

夢と現実の狭間で（後書き）

ほんつとすみませんつした
何か調子乗ってました

信じるだけなら簡単だ(前書き)

前話があったので再び真面目ちゃん

信じるだけなら簡単だ

豪勢な車内。ふかふかの座席。

俺は何やら執事っぽい人から受け取った高級そうなオレンジジュースを一口飲むと、あまりにハイレベルな対応に舌を巻いた。

「しっかしたかだか移動の為にリムジンとは豪気だねえ」

「む、そうなのか？」

「たかだか武器引きとりの為だけ？電車と徒歩でも十二分だったのに。まあ別に楽できる分には構わねえけどさ」

さて、先の会話から見て分かる通り、俺は桐条のラボへと向かっている。もちろん武器を引き取る為だ。

桐条は約束を守ってくれるようで、テストが終わったその日に校門前からリムジンのお出迎えで周囲の下校する生徒達を驚かせたものだった。

そんな事はさておき、俺は一つだけ納得のいかない事がある。

「つーかみんな酷いよなー。タルタロスの新しい階層に行けるようになったって教えてくれたら良かったのに」

そう。

この間の大型シャドウを倒したからか知らないが、16階から上へ行くのを邪魔していた柵が取り払われていたのだ。

俺が一体どれほどの瞬間を待ち望んでいた事か。

それこそ10年単位なので1、2週間位知るのが遅れた所でどう

ということは無いのだけでも。

「いや別に教えても良かったんだがな。

……里峰、君は間違いなく武器を持っていなくてもタルタロスへ向かっただろっ？」

「そりゃそっだ。待ちに待った上の階なんだ、手ぶらでも行く気だっただぜ？」

「それを防ぐ為に皆には黙って居てもらったんだ。

武器を持ったら普通にタルタロスに行くだろうし、武器を持たずともその情報を知ったら間違いなくタルタロスに行っていただろうからな。

まあ、たまには戦いから離れて羽を休める位の方が良いと思うぞ、私は」

「羽休めって……この1週間、放課後は延々と寮に拘束して次の日の試験勉強させた事が羽休め!？」

タルタロス以外で死ぬと思ったのは生まれて初めての体験だったぞオイ!!

あんなんで体力回復出来んなら世の中のサラリーマンは不眠不休で働けるっつーの!!」

一生分の勉強をこの1週間で行ったのではないか、と言う程に桐条の指導は厳しかった。

なぜか俺だけでなく伊織やら岳羽やらも混ぜって勉強してたし。流石にあれだけやれば成績は問題ないだろうが、最終的に試験範囲から逸脱した問題を解かされる始末でアンタ人の事言えねーじゃんって心の中で愚痴っていたのが記憶に新しい。

「いや、しかしだな……存外にスラスラと問題を解くものだからついヒートアップしてしまつてだな……」

「まったく……俺はもうあんなの勘弁だからな！テストなんざその場をしのげれば問題無いつてのに……」

「何を言うか、これから大学へ進学するか就職するかするだろう！その為に知識と言う物はありすぎても損は無い！」

「ああー……大学、ねえ……」

そつだ、俺は高校生だつた。

正直高校通い出したのも必要に駆られてと言う理由以上の物は無く、将来の展望などかけらも無いに等しい。

いずれは卒業し、大学やら就職やら……まあ選択肢はその二つだけつてわけでもないんだが、大まかに分類したらそのようになるだろう。

今までシャドウとじゃれあつ事を生きがいにしてきた俺が、一体何が出来るとのだろうか。

そこで、参考として桐条の卒業後について聞いてみる事にする。

「桐条先輩はさ、卒業したらどうすんの？」

「私は……いずれ父の後を継ぎ、桐条グループの総帥として生きていくつもりだ。

とはいえ、まずは桐条グループが行つてきた事の清算をしなければならぬがな」

「……いいのか、それで？」

「……ああ、構わない。覚悟はとうの昔に出来ている」

桐条美鶴は関係ない、と俺は思うけどな。

俺からしたら、たまたま桐条に生まれただけで全てを背負いこも
うとしてるようにはしか見えないのだが。

(ま、人の人生に口出す程立派な人生歩んできてもねーしな)

桐条の真剣な眼差しを見ていると、口を出す気が失せてしまった。
いいや、そもそも偉そうに口出しする権利など俺には無い。

化物にも人間にもなれない、中途半端な俺には。

「そうか、まあなんだ。頑張れよ」

「……そういう君はどうしたいんだ？前から言ってるように、全力
で支援させてもらうが」

「いーよいーよそう言うのは。自分の選択した道は、自分の力だけ
で歩きたい。

補助輪つけないとチャリに乗れないガキンチョでもあるまいし。

まあなんだ、もし仮に何か悩む事があれば相談に乗る位はしてほ
しいけどな」

「ふっ、それくらいならお安い御用さ」

「十二分だよ、それだけで」

ここで何とはなしに会話が途切れる。

特に話す事も思いつかないのでぼんやりと外の景観を眺めていると、ようやく到着したようでリムジンが駐車場へと入って行った。外には如何にも言った感じの研究所が佇んでおり、10年前の事が自然と思い出され身体が勝手に警戒してしまう。

俺はそれを無理矢理抑え込むと、リムジンから下りた桐条に着いて行き研究所の中へと吸い込まれていった。

「ラボつってもさ、何やってんの？」

「ラボとは名ばかりの物だな。商業的価値のある研究は一切行われていない。」

ここで行われているのはシャドウの分析と召喚器の製造だけだ」

一見広い研究所ではあるが、実際に使われている部屋はそう多くは無いらしく、桐条は一直線に一番奥の研究室に向かっていく。

桐条に連れられて俺もその研究室へと入ると、そこにはうちの高校の理事長兼特別課外活動部の顧問である幾月修司が居た。

中年のおじさんらしい優しい笑みを浮かべたその男は俺達の到着を心から歓迎している様子だった。

「やあ、遅かったね。待ちくたびれちゃったよ」

「申し訳御座いませぬ、少し道が混んでいたのです」

「いやいや、気にしないでくれ桐条君。さて、今日は里峰君の武器の返却だったね。こっちにあるから持っていくと良い」

幾月が指差した先には拳銃2丁に大剣、ライフルと俺の装備が全部そろっていた。

俺は嬉々として肩に担いだギターケース（ラボに来る前に俺のアパートに寄った。桐条は俺の部屋のポロさに戦慄していた）を下ろし、武器を全てそのギターケースの中へと納めていく。

「そつだ、信用してねえってわけじゃねえんだが、俺の武器勝手にいじって無いだろうな？」

悪いが銃器は特別製なんでな、変にいじられても困るんだよ」

「心配しなくてもいいよ。何一つ触ることなくあそこに置いておいたからさ」

ニコニコしながら俺の質問に答える幾月。

……まあいい。いずれマンツーマンで話す時も来るだろうし。聞きたい事はその時に。

俺は思考を切り替え桐条の方を向くと、一つ質問を投げかける。

「そつか、なら良いや。で、今日はタルタロス行くのか？」

「いや、今日は休みにしようと思ってる。テスト明けで疲れているだろうからな」

休みか。俺も気になることあるしタルタロスは行かないでおこう。ならもうここにも用は無い。さっさと帰ろうかな、後でタカヤ達に電話しねーと。

「分かった。そんなら俺はこのまま真つすぐ家に帰るわ」

「そうか。私はこのままラボで私用があるのでな、車と運転手だけだそう」

「いんや、送迎は要らねえよ。ちっと散歩したい気分だからよ」

「ん、良いのか？それなら明日は恐らくタルタロスに行く事になるだろうから、また明日会おう」

「おう。17階以降のお楽しみは明日に回す事にするぜー。理事長も武器の保管感謝するぜー」

「うんうん。気をつけて帰るんだよ」

そして俺は桐条と幾月が見送る中、研究所を後にする。この胸の内にあるもやもやは、無理矢理胃袋に納めてやった。

俺は散歩がてらの帰り道、あの薄っぺらな笑みを浮かべた男を思い出して吐き捨てるように呟いた。

「……チツ、幾月の野郎。何考えてんだ？」

幾月修司、と言う男の名には聞き覚えがあった。

もちろん10年前の関係者である。はっきり言って桐条と言うグループが信用ならないのは、あいつを手元に置いているからに起因する。

奴は一体何を隠している？奴は一体何をしようとしている？

勿論俺の考えすぎ、疑いすぎと言う可能性だってあるのだが、考

えなしに信用するには10年前の出来事が強烈すぎる。

何より、ペルソナ使えるだけのガキどもに何もかもを放り投げて
いる事が納得できない。

シャドウと戦う術は何もペルソナだけではない。ペルソナが一番
有効なだけだ。

本気で影時間をなんとかしたい、タルタロスをなんとかしたいと
言うのなら何かしら行動を起こしていたっておかしくは無いはずだ。
例えば無駄にデカイ研究所をフルに活用して何かしら武器を開発
したり、とか。

だと言うのにあのおっさんははっきり言って某フライドチキン屋
さんで鎮座しているカーネルおじさんよりも働いてない。ニートか
何かかと勘違いしてしまう位に。

……って途中から幾月の悪口大会になっちまってんな。兎に角、
10年前の関係者だと言うのにその尻拭いを無関係の奴にやらせて
るっただけで信用ならねえ。

あいつがもし仮に10年前の桐条鴻悦のように何かを企んでいる
のだと仮定すると、恐らくあちらも俺の存在がどういったものか気
付いているだろう。何せ人体実験に携わった研究者だ。

まがいなりにも優秀な人材であるはずで、俺の顔……まあガキの
頃と比べて面影がある程度だろうが忘れるはずもないだろうし。

それでも何も行動を起こさないのはどういう訳だろうか。ただ動
くだけの便利な手駒は既に揃っているだろう？ 特別課外活動部とい
う名目で。

だったら俺みたいな異物を使っているのにどうして何も行動を起
こさない？

俺みたいな部外者なら、いつでも排除できると言う余裕の表れだろうか？それともやっぱり俺の考えすぎか？

……何にせよ、奴が何かアクションを起こしても良いように警戒は怠らないようにしよう。

ただの考えすぎで終わるならそれに越した事はないのだが……。

ちなみに、今日タルタロスに行かないと決めたのも、幾月から武器を受け取ったのが原因だ。

……全部分解して点検してやる。

背負ったギターケースをチラリと見やると、俺は引き続き散歩を続けるべく足をゆったりと前に進めるのだった。

・・・

「ほう、10年前の生き残り……それも私達被験者側ではなく実験者側の生き残りが居たとは」

「悪いな。もつと早くつたえりや良かったんだが、あいつが信用に値しないってイマイチ判断つかなくてよ」

俺のボロアパート。

今現在、俺はタカヤ達にも武器の点検を手伝ってもらっている。

と言うのは飽くまでも名目で（っ）か手伝ってるのタカヤしか居ないし）、近況報告をする為でもあるのだが。

するとジンがパソコンのキーボードを叩く手を止め、俺に対して

口を開いた。

「せやったら何を以って信用出来へんって判断したんや？」

「あいつの笑み。見ててムカつく」

一言でバツサリと幾月修司と言う男を切り捨てた俺に対し、ベツドの上で正座しながら絵を描いてるチドリが一言呟く。

「……単純」

「うるせーやい」

「しかし貴方らしいですね、その判断は……それでいて貴方の判断は割と信頼できるのだから性質が悪い」

ライフルの部品を1個1個検品するタカヤは、手を絶え間なく働かせながらもこちらを向いてにやりと笑った。

俺はそんなタカヤに対してシニカルに笑って返答する。

「ちなみに、お前の笑みも信用ならん」

「ふっ、言ってくれますね。どうしたら信用されるのでしょうかね？」

相変わらずニヤついているタカヤに対して、チドリが俺の言おうとした事を先取りした。

「……多分、上着を着たらいいと思う」

「ふむ……ゴスロリの貴方に言われたくありませんね」

「むっ……！」 「何です？間違った事を言いましたか？」

俺の不用意な一言から何やら発展したタカヤvsチドリ。
大人しめな2人ではあるが自身の恰好に絶対の自信を持っているらしく、互いににらみ合っている。

正直五十歩百歩だ、と思うがこんなボロ家で暴れられてはたまらないのですかさず俺は止めに入る。

「おいおい、勘弁してくれ。ここは闘技場コロシヤムじゃねえんだ。争いたいなら外いけ外」

「仕方ありませんね……」 「むう……」

俺の一言であっさりと身を引く二人。いやはや、話の分かる奴で助かったよ。

「いや、拳銃突きつけといてその言葉はありえへんで」

……ジンの一言で全部台無しだよ畜生。

そうだよ脅して2人を止めたんだよ悪いかハハハ！！結局最後に立って居た奴が勝者なんだよ！！

「分かった、分かったからパソコンに銃突き付けるのやめえや！パソコン撃つたらわいも死ぬで！！」

「成程、1度で2度おいしいと言う奴か。何と言うつお得感」

「だからやめえや……！！」

すると騒がしくし過ぎたせいか壁ドン一発入り、一気に静まり返る部屋。

カチャカチャとタカヤがライフルをいじる音だけが響き渡った。一旦クールダウンした俺は軽く息を吐き、テレビをBGM代わりにしようとりモコンに手を伸ばしたのだが。

「ああ、影時間になっちまった」

「おや珍しい。貴方なら嬉々としてタルタロスに向かうでしょうに」

「いんや。今日は武器点検のみに集中する気だったからな。戦えねーのに影時間来てもなーんも嬉しくない」

俺は点検の終わった2丁の拳銃を机の上に置くとその場に寝そべった。

それと同時にタカヤの方も点検とライフルの組み立てが終わったようで、ライフルを壁に立てかける。

「……どうやら、本当に何もしていないらしい。とはいえそれが信用する理由になるかと言えばそんな訳無いのだがな。」

ところで、影時間と言えばタルタロス。タルタロスと言えば……と言っ事で思い出したかのように俺は言葉を発した。

「ああそつだ、何かタルタロス17階以降行けるようになったらしいぞ」

「ほほう、それは良かったですね。しかしどうしてまた急にそのよくな事に?」

「ホンマかいな。ワシは正直どうでもええねんけど」

「……」

ジンは興味なさげではあるものの一応の返答をしたが、チドリなどはガン無視である。悲しい。

タカヤは上に行ける事よりも上に行けるようになった事の方に興味が行っているようで、誰も俺の喜びを共感してくれる者が居なかった。寂しい。

「それがよくわかんねーんだ。時期的にはイレギュラークラスのシヤドウ……こないだの満月の夜にな、大型シヤドウがモノレールのつとつて別のモノレールに突撃したって事があつただけだよ」

「ああ、先日記事になってましたね。モノレール衝突寸前！？とかそのような見出しで」

「どうやらその次の日らしいんだ、上に行けるようになったの。その時は俺寝てたから知らねえんだけどよ」

「そついや竜児、お前またリミット解除したらしいやないけ。ホンマに無茶したらアカンで？」

わしらとは違つてある程度の適性があつたおかげで、人工的なペルソナの開発をされたにも拘らず寿命は縮んでないっちゅーのに、結局寿命削つてどないすんねや」

「はん、よぼよぼのジジイになつて何しろっつーんだよ？日がな一日盆栽いじつてポリデントに入れ歯突っ込む日々をどう楽しめつての。

刺激があるから人生は楽しい、違つか？だつたら刺激のある人生を求めて死んだ方がよっぽどマシだね」

「はっは、そら違い無いわ！！」

「だろ？」

影時間なのでいくら騒いだって問題は無い。

先程の鬱憤を晴らすかのように馬鹿笑いする俺とジンを横目にタカヤは何やら思案顔だ。

「どうした、タカヤ？」

「いえ……先月も満月に大型シャドウがでた、と仰ってましたね？」

「そうだけど……毎月満月に大型シャドウが出るってか？今まではそんな事無かったのにな」

「もし仮にその予想が正しかったとして、その原因を考えると……ふむ、最近外から誰かがやって来た、とかどうでしょうか？」

「外から誰かが……？」

俺は一人一人特別課外活動部の面々を思い出して行く。

あいつらは今まで月光館学園に居た生徒だ。特に伊織や岳羽は今年の4月になっていきなり……それも次々とペルソナ能力を覚醒させて行っている。

そんな中で、ただ一人。ペルソナをあっさり扱えるようになった転校生の存在を思い出した。

「……有里、湊」

俺がポツリと名前を漏らすと、タカヤは微笑んだ。

「その有里なる人物が何かしらのキーになっているのかもしれないね。幸い、貴方は特別課外活動部なるものに参加なさっている。それならこれからは様子をみていけば問題無いのでは？私達も復讐代行の傍らで適当に動いてみましょう」

「良いね、何か楽しくなってきたな。いい加減ルーチンワークにも飽きてきたとこだしな。探偵紛いの事をするのも悪くねえ」

狩人と戦う、これも良いだろう。

しかし、それ以外を求めてはいけないなんて理由も無いしな。

俺はこれから始まるだろう激動の予感に興奮を隠せずにいたのだ。
った。

信じるだけなら簡単だ（後書き）

学校行く　タルタロス行く　寝る　学校行く

なんて繰り返したと間違いなくマンネリ化するので日付はとびとびになります

選択と責任

(……ちよつとだけ強くなった、ってどこか?)

それが俺の感想。

17階以降に出現するシャドウ共を駆逐し終わった後の感想。

拍子抜け甚だしい……とまではいかなかった。というのも16階と17階で何か大きく変わる物でも無いと、何となく予想はついていたので。

ならばする事は一つしかないよな?……キリの良いところまで登る。

「多分次もどつかで階段が封鎖されてる……と思う。だからそこまで登るのを一つの区切りにしようか」

「でも本当にそんなのあるの?無かったら延々と登るはめに……」
このシャドウのレベルで、階数も1階から16階と言う範囲と同じくした17階から32階とかだったら1日で登りきれんだろうが……。

岳羽ゆかりの言うとおりで、俺の予想が間違っている可能性も無きにしてもあらずであり、下手したら何も得られないままただ上へ上へ突き進むだけに終わる可能性も大いにありうる。

しかし、俺の予想通りなら恐らくはどこかに次の階をさえぎる柵か何かが存在するはずだ……その事は口にしないけど。

「まあ俺は別にどうだっていいんだが……お前らはタルタロスを、影時間をどうにかしたいんだろ?」

だったら上に登れる分には一向に構わねえだろ。

ひよつとしたら強い奴と出くわす事もあるかもしんねーし」

「それはそうだけど……」

俺の言葉に言い淀む岳羽。確かに岳羽の気持ちも分からなくてもない。

俺と違ってシャドウと戦って楽しいなんて思えるはずもなく、こんな状況で無かったら終わりの見えないタルタロス旅行なんて死んでも御免被るだろうし。

だったらチリも積もれば山となるって事でちよつとずつ進んで行けば良い。

「それならあれだ。一回の出撃につき登る階数を決めておくとかどうだ？一回につき3階とか5階とか」

「お、それ良いんじゃない？闇雲に進んで疲れた時に襲われたら洒落にならねーしな」

「僕もそれが良いと思う。一回につき……とりあえず3階登ってみて、その時の余裕のありなしで今後どうするか決めたらどう？」

『私も特に異論は無い。あまり根を詰めても良い事は何一つ無いからな。』

登る階数の過多は現場の者しか分からないだろうから、その辺は君達で話し合ってくれ』

伊織順平の言葉に続いて有里湊や無線越しから桐条美鶴の賛同の声を得る。

話は決まった。後は登るだけだ。つっても、後2階登るだけの簡単な作業であったが。

今日もまた、いつもと変わらぬ影時間を過ごす。

(……人工島計画書)

淡々とシャドウを倒して先に進む中、俺は一つの単語を頭に思い描いていた。

・・・

「ハア？身体を鍛えたい？んなもん部活のトレーニングを真面目にやってみよ」

「だってお前すんげー細マッチョじゃん？てことは何かしら鍛えたりしてんだろ？」

「どんな理論だよ、それは」

中間テスト初日に堂々と元気に登校してきた俺に対してクラスメイトは何やら驚愕を隠せずにいた。

何せ俺は1週間入院していたと言つのに普通に登校してきて驚かないはずがない。更に中間試験の結果発表が行われた際、俺の名前が一番上にあつたものだから(伏見さんに勝って嬉しい。こればかりは桐条美鶴に感謝せねばなるまい)うちのクラスでは衝撃が走つたものだ。

そんで入院して大丈夫だった？とかいつ勉強してたの？とか言つた質問攻めに対してイチイチ返答するのも煩わしくなってきた頃、佐藤は唐突に先程述べた提案を俺にしてきたと言つ訳さだ。

確かに身体は鍛えてるし(実戦で)、幼少時まだ人体を改造されたての頃は常人が行うような普通のトレーニングをしていたが、そ

れも大人を片手で捻れるようになるのに時間はかからなかったので、すぐに実戦形式にシフトして以来、普通の筋トレだのと言ったものは行った事が無い。

「つーか何だつて急にそんな話しだしたんだよ？」

そもそもなんで鍛えたいんだよ。俺は素直にそれを口にした。

「実はよ、こないだ練習試合があつてさ……」

「ほう」

どうやら岩崎先輩とやらを振り向かせる為にテニスの方も頑張っているらしい。

動機としては不純だが、しっかり頑張っているという点は評価しても良いのかもしれない。俺の高評価を得た所で何のメリットも無いんだけども。

「それなりにラリーは続いたんだけど、体力が無くてよー。テニスって意外と体力使うんだぜ？知ってたか？」

「はあ。それで部活とは別に身体を鍛えたいって事か？」

「その通り！別に毎日じゃなくていいんだ！たまにで良いからトレナーみたいな事やってくれ！」

幼少時の記憶を少し漁る程度ではあるが、一応身体を鍛えるノウハウは知っている。

近代スポーツ科学に基づいた理論でもあるそれは、徹底的にやればかなり効果が出るのではと思う。

しかし、わざわざこいつに付き合つのも面倒くさいし。

「えー、メンドイ」

「メンドイって言う理由って事は、ある程度鍛えてるって事だろ！
？頼む！このとーり！」

……イチイチ勉強教えれだの入院って病気してたの？だの聞かれるのもうつとおしかつたが、こいつはこいつでうつとおしい。

断る理由を「そう言った知識が無い」にしたら良かった。自分に素直な俺の性分をこの時ばかりは呪った。

とはいえ、そうだな。こいつの本気具合は見てとれるし……。

「そうだな、だったら俺にテニス教えるよ。したら鍛えてやる」

影時間がなくなったら、俺はどうするのか？

とりあえず最低限趣味の一つでもねーとやってられんだろつ。

て事でこれから色んな事に手を出して行こうと、今決めた。しつこい佐藤をあしらうのと同時に趣味探しの第一歩。悪くない、悪くないぞ。

「マジでか？つーか俺そんな上手じゃねえし、だったら入部……」

「入部するほどテニスに思い入れがねえからパス。なんつーかよ、最近気付いたんだが俺って無趣味なんだよな。」

だからちよつと趣味を探すのも悪くねえって思ってたよ。そんな訳で、俺はお前を鍛える。お前は俺にテニスを教える。おーけー？」

「……分かった。俺も基礎を繰り返してるとこだからあんまり期待

すんなよ？」

「分かってるよ。すぐにお前よか上手になってやるから覚悟しとけ」

「ぐっ……お前の場合ホントにやりそうで怖いっつーの」

まあ確かに、ダブルスと言う条件下なら前衛としてネットに張りつけば後は動体視力と瞬発力でどうにかなりそうな気はするが。しかしそんな与えられただけの力に頼る気は無い。

この力は、シャドウと戦う為だけに使うものであり、他の事に使う気はさらさら無い。

だって何かずるいじゃん。

こないだの体力測定ですら手加減してあれだったというのに……。それ故に俺は部活に入って大会に出るなんて事はするつもりは無く、のんびり佐藤とラリー100回達成だワハハ、とかそんな温泉卓球のような軽いノリでするつもりだ。

「ま、それなら次の土曜か日曜だな。両方部活は午前中で終わるから、午後から空いてるか？」

「ん、どっちも問題ねえ。場所はうちの学校で良いつてことか？」

「そーだなー。それじゃあよろしく頼むぜトレーナーさん？」

「はん、血反吐吐く程鍛えてやるよ」

「はっはっは、そりゃ勘弁だ」

「オラお前ら座れー！お前らの大嫌いな数学の時間が来たぜー！！」

とここで、担任兼数学教師である吉岡の登場で俺と佐藤の会話は中断された。

にしてもテニスカ。テニスも前世じゃ結構好きな部類に入る。実際にテニスをした事は無いけど。

特に漫画の王子様のテニスは人気を博したもので、あれを読んでテニスを始めた者も少なくないと聞いた。

まあ俺は見る方が好きだからウィンプルドンとかをネットで見る位しかしなかったが。

中間試験で出した問題の解説を吉岡が行う最中、俺はぼんやりと虚空を眺め、楽しい事ないかなーと投げやりな思考を脳内で垂れ流すのだった。

・・・

「お、そこに見ゆるは有里先輩」

「……里峰か」

放課後。

俺は何とはなしに巖戸台駅前の商店街でちよつと早めの晩飯を食おうと思ひ、どの店に行くか吟味していた所、有里湊の姿を見つけたので声をかけた。

どうやら俺と同じく飯を食べるべく店選びの真つただ中だったようだ。俺は有里と少し話をしたいと思つていたので、とりあえず飯に誘つてみる事にする。

「飯食うなら一緒に食わねえ？」

「はがくれで良いなら」

「よっしゃ決まりだな」

有里の言葉に即答で了承した俺は、有里と共にはがくれへと入る。ここはラーメン屋なのだが、隠しメニューのはがくれ丼が美味しいんだ。

吉岡は牛丼屋の海牛をいたく気に入っているが、俺的には丼物系統ならこのはがくれ丼を一押ししたい。

更に常連のみに教えられる隠しメニュー坦々タン麺と言うもあり、こちらも隠しだけあってかなり美味しい。

今日は定食屋わかつかハンバーガーショップワイルダックバーガーのいずれかにしようと思っていたのだが、別にはがくれなら何も問題は無い。

そうして店内に入ると濃厚な出汁の匂いが俺達を迎え入れ、一瞬にして俺の胃袋を臨戦態勢にした。

……のだったのだが。視線の先のカウンター席。

「……あア？」

5月だと言うのに厚着にニット帽と言う、何とも見てるだけで暑そうな格好をしている男。

荒垣真次郎がそこにはいた。丁度ラーメンを箸で掴み、口へ持つていく所で俺達の姿を発見したようでそのままの状態で固まっている。

「ああ、どうぞお構いなく。麺がのびちまつ」

「そうか」

ラーメンを食べてる奴の邪魔をするなんてもつての外だ。出来たてアツアツのうちに食べるべきラーメンを、少しでも冷ましてしまつような事があれば俺だったら激怒するに違いない。

そんな訳で荒垣は気にすることなくラーメンを食べ進め始めた。俺はそんな荒垣の隣の席へと座り、有里にも俺の隣に座るよう促した。

「……何の心算だ」

「ま、ちつと話をと思ひましてね。おっちゃん、はがくれ井一つ！」

「……はがくれ井？」

とりあえず俺も飯を頼むと、有里が俺の頼んだメニューに対して首をかしている。どうやら有里ははがくれ初心者ようだ。

まあ、4月に転入してきた相手に裏メニューの存在を求めるのは無理があるか。

「裏メニューって奴だ。美味しいぞ？有里先輩も食ってみたら？」

「へえ……じゃあそれで」

「オツケーオツケー、おっちゃん！はがくれ井をもいっこ！」

「へえ……お前、はがくれ井知ってたな」

ラーメンを食べる手を止めた荒垣が感心したように俺へと話しかけた。

荒垣は意外にもグルメらしく、坦々タン麵の存在も知っていたので俺も驚いた。

常連のみに教えられるメニューだと言うのに、今までよく荒垣と遭遇しなかったものだ。

「まあな。ここら一帯の店ん中にある丼物の中でもはぐくれ丼は一位二位を争うと言ってても過言じゃあない。

あのチャーシューがたまんねえんだ」

「……ふん」

荒垣は俺の言葉に対して、特に異論も無いのか再びラーメンへと向き合う。

カウンターの奥の方で店長が中華鍋を振るっており、珍しく周りには客はおらず、話をするには丁度いいだろう。

続いて有里の方へと俺は向いて、話したいと思っていた事を話す事にした。

「さて、有里先輩に一つ聞きたい事があるんだ」

「何？」

「危険を冒してまで戦う理由。何かあんの？」

先日、有里湊と満月の夜に現れる大型シャドウには何か関係があるのではないかと予想して以来、俺はタルタロス内で有里の戦いに注視するようになった。

初めてペルソナを入れ替えて戦う姿を見た時は、便利そうだなーと軽い気持ちで流したものだだったが、よくよく考えるとおかしいよな。

ペルソナとは、己の存在そのものであると言って間違いないだろう。

それが複数存在すると言うのはどうにも納得のいかない話である。

まるで、何者にも属さない「愚者」のような……ッ……！？すると、一瞬だが鋭い頭痛が頭を駆け巡った。

それはあまりに一瞬だったのでリアクションを取る事すらなかったのだが、どうにも引つ掛かる。

俺は、何かを、忘れている……？

「気になる事があるから」

「へあ？」

思考していた所に有里の言葉で遮られた為に変な声が出た。

「気になる事があるから、タルタロスに行ってる。別に誰かの為だとかそんな理由はないよ」

「成程ねー……それは、命懸けになってまでしないといけない事なのか？」

「……僕は命懸けなんてするつもりはないよ。でも、自分で選んだ事の責任は、自分で負う」

「へえ……だけどさ、タルタロスは危険な場所だぜ？」

不良がうつついてる路地裏を無防備に散歩するなんて屁みたいなレベルに成り下がる程に。

そんな場所で発生する責任は、否応にも命の危機に関わるはずだ」

有里の言葉を受け、俺は少しだけ驚いた表情を浮かべるが、気がつくとも自然と笑みに成り替わっていた。

続いて感心したように声を漏らしたのだが、有里は相も変わらず無表情で言葉を紡ぐ。

「……そうだね。タルタロスっていう場に限定しなくても、僕はきつと選択を間違える事もあるだろうし、同時に後悔する事もあると思う。」

それでも、僕は選択の果てに生じる責任を誰かに押し付けるつもりは無いよ。そして僕は選んだんだ……戦いと言う選択肢を。

だからこそ、僕は命懸けじゃ無くて、命を賭けるんだ。僕がベツト出来るのは、手元にはそれくらいしかないから」

「……良いね、そういう「生きる覚悟」ってのは嫌いじゃない」

「……シャドウとの戦いで未だ何も失ってねえから、そんな事が言えるんじゃないかねえのか？」

すると、ラーメンを食べ終わったらしい荒垣が口を紙ナプキンで拭いながら話に加わってきた。

確かに自分の選択ミスの代償を、自分で払うのならまだいい。しかし、その選択によって仲間が危機にさらされたり、それどころか手遅れになってしまったらどうするのか。

荒垣は睨みつけるような強い視線を有里へとぶつける。対する有里はそれに物怖じすることなく再び口を開いた。

「確かに、僕一人の力なんてたかが知れてる。」

そんな中で僕の力が及ぶ範囲の選択肢を考えるとそう多く無いと

思う。

……それでも僕一人の力じゃ不可能な選択肢を選ばざるを得ない事もあるかもしれない。

だったら、素直に助けを求めたらいい。仲間と力を合わせればいい。

皆がこの戦いで生き残る為なら、僕は何だつてするつもりだよ」

……これがシャドウと戦い始めて1カ月かそこらの少年の言葉だろうか。

はつきり言つて、感心を通り越して感動すら覚えてしまった。

普通の人間には無い「力」を持った人間が、次にどう行動するかと言つととりあえずその力をふるつてみるものだ。

伊織なんかは特にそんな気がするのだが、「自分は人とは違うんだ」とか「自分は特別なんだ」とかそんな考えで気軽にタルタロス等と言う危険な場所に首を突っ込んだりする中で、有里湊は既に命を賭す覚悟も、ベットした命をきっちり回収する覚悟も出来ているらしい。

そして有里の目的は不明瞭だが、結果としてその目的の為に動いている事となる仲間達を護る為に俺に頼る事もするだろうし、逆に護ろうと思っている人々にすら頼ると、有里はそう言つてのけたのだ。

……ペルソナと言う力を得た当時の俺に、果たしてそんな事が言えるだろうか？

ペルソナを複数操る力もさながら、有里と言う人間自体にも興味があわいてきた。

すると、はがくれ井が完成したようで俺と有里の目の前にはチャ

「シュー山盛りの丼がおかれる。
それを確認した俺は、話を切り上げ飯を食う事にした。

「……丁度いいか。俺は帰るぞ」

「んあ？おお、何かすまん飯時に」

「気にすんな、中々良い話も聞けたしな。アキにも聞かせてやりたかったぜ」

伝票を手にレジへと向かう荒垣に対し簡単なあいさつと飯の邪魔をした謝罪を述べ、別れを告げる。

そうしてはがくれに残った俺達は、まず目の前の丼を消化する事から始めた。

「里峰、あの人って……」

「ああ、荒垣……先輩なのかな、まあ多分先輩だろ……荒垣先輩な。ちよつと野暮用で会う機会があつてな。

多分だけどあいつは元特別課外活動部だろうな」

「……でも、今は違うみたいだけど」

「何か事情があるんじゃないかねえの？さつきはああして普通に話したけどよ、付き合い自体は超短いからそんな深い事情は知らねえ」

「そっか」

「そうなんだよ」

会話も途切れ、俺達はチャイシューとタレとご飯のマッチ具合に舌鼓を打つ作業に没頭するのだった。

選択と責任（後書き）

有里君が今までで一番しゃべった回な気がする
シャベッタアアアアアアアアアア！！

殴り合いと夕の空（前書き）

お久しぶりです。

長らくお待たせしました。

これからはボチボチ更新いたす

殴り合いと夕の空

「うん、この分なら心配はいらないね」

五月末日。

白衣を着た眼鏡の男……葛木正志は手にしたカルテを引出しにしまうと、ベッドに横たわっている患者……真田明彦の怪我の完治を伝えた。

最も真田の怪我自体は1週間ほど前には完治していたのだが、彼の身を案じた桐条美鶴がひそかに葛木に検査の期間を少し長めにとつてもらおうよう進言していた為、真田が病院から解放されるのが遅れたのだ。

事実真田は隙あらばトレーニングを重ね、隙あらばタルタロスに行こうとしていた為、この休暇と言う名の謹慎的なアレは結構堪えたらしく、真田は内心あのような怪我はもうするまいと誓っている。

「ありがとうございます。お世話になりました」

「うん、それじゃあお大事に。病院なんて来ないに越した事はないからね」

真っ白なシーツが敷かれたベッドから起き上がると、真田は葛木に頭を下げる。

それに対して柔らかな笑みで返答する葛木は、遠回しに無茶はしないよう真田に告げた。

葛木は里峰竜児の取り巻く環境に関しては少しだけ事情を知っているが、真田や桐条がそれに関わっている事までは知らない（何か

あるのではと勘繰ってはいるが)。

しかし、何となく里峰と真田が同じような人種……無茶を無茶とも思わない人間だと直感したのだ。

そんな意図を知ってか知らずか、真田は苦笑しながら診察室を後にする。

一人取り残された葛木は軽く一息つくくと、引出しからカルテ……真田のものとは別のカルテを取り出した。

そこに書き込まれている患者の名前は、里峰竜児。

10年前と6年前に里峰がこの病院に運び込まれた際、彼の執刀医を担当したのがこの葛木であり、前者は新米外科医……当直医が葛木しかおらず、時は一刻もあらずと言った状況だった為には彼は里峰の体にメスを入れることとなった。

その時はただ助けたいという一心だった為里峰の体の異常に気付けなかったが、後者の6年前……運命なのか否か、数奇なものだ。今回も彼が当直医だった為、里峰の体に再びメスを入れることになったと言っただ。

そして葛木はある違和感を感じた。今までの患者とは違う、何かがこの身体にはある、と。

その違和感とは本物で、事実里峰の口からには信じられない言葉を聞かされた。

「俺の体はサイボーグです。なーんつつてなー」

当時の葛木は何を馬鹿な事と一笑に付したが、彼の感じた違和感にぴったり当てはまるのが「改造人間^{サイボーグ}」であった。

実際に身体を機械化されているわけではないが(と言うよりそん

な技術など葛木は聞いたことも無かった）、人為的に何かを施された痕が見られたのだ。

故に葛木はそれについて、独自に里峰の個人情報調べたのだが、何の変哲もない普通の少年であると言っ事しか分からなかった。

と言ってもその情報は里峰が自分で偽造した情報にすぎなかったが。

それでも葛木は時間を見つけては里峰に関する事柄を過去に遡って調べていき、そうして10年前里峰が病院に運び込まれたあの日にまで辿り着く事となる。

ところで、ムーンライトブリッジ、と呼ばれる橋がある。

巖戸台と人工島を結ぶ橋なのだが、10年前に謎の爆発事故によって半壊している。

そんな中で里峰竜児は意識不明の重体で発見された。

そこに何かがあると感じた葛木は更に深く調べ続けるが、当時の記録はあまり見つけれなかった。

爆発事故、と言っだけあり一時は世間を賑わせたものだと言葛木も記憶しているが、何かの実験を失敗してしまっあのような爆発事故が起きたと言っ事しか分からなかったのだ。

まるで何かを隠しているかのよう、ぽっかりと空白が出来たかのように、当時の記録は全く見つからなかったと言っ事実が、更に葛木の違和感を確信へと変えていった。

その空白を調べれば何か分かる。そう考えた葛木はあらゆる伝手を頼りに更に10年前の爆発事故について調べていった所、一つの企業の名前が浮上した。

桐条グループ。

世界有数の複合企業であるそれが、爆発事故に一枚噛んでいると言っ。

一体何を隠しているのか。それを調べる所で里峰に止められ、彼の持つ事情を教えられた。

それは葛木の常識をひっくり返す内容で、しかしそれを嘘だと断ずるにはあまりに違和感が感じられなかった。

「はあ……なんだかんだでまた入院してくるんだろうね、里峰君は出来れば来ないでほしい所なんだけど」

葛木の溜息が、彼の診察室に小さく木霊するのだった。

・・・

「はあ……」

俺は思わず溜息をついた。

朝の登校時間。のろのろと学校へと向かう足は重たい。

いや、学校が嫌っつーわけじゃない。問題はタルタロスだ。

昨晚、俺は一人でタルタロスへと赴き進める所まで進んだのだが、やっぱり途中で上の階へ進むのをさえぎる柵のような物があったんだが、そこで見つけた文書……人工島計画書が問題なのだ。

16階でも見つけたのだが、どうやら上の階をさえぎる柵がある階にこの文書が落ちているらしく、これを読まれると色々とマズイ。

そしてこれを書いたのは多分俺の大剣をこさえたあの女なのだろう

う。

誰かがこれを読んで、タルタロスや影時間をどうにかする為の助けにでも使ってくれと言った意図がこめられているのではないか？
これがタルタロスの中にあるのはすんげえ謎だけど、兎に角まだこれをあいつらに見せるわけにはいかない。

とりあえずあの文書は俺の部屋ん中に隠してきたが、どれだけの枚数が見つかるだろうか。それを考えると溜息の一つや二つは洩らさざるを得ない。

それはさておき、何やらポロニアンモールで骨董品屋をやるらしい。何考えてんだあの女とは思うが、俺の剣の状態を見てもらうには丁度いい。

今までは気まぐれに帰ってきては俺の大剣を研ぐと、また気まぐれにどっかにフラフラ消えていたからな。こつやつて腰を据えてもらうのは非常にありがたいな。

「どうした、里峰？溜息なんかついて」

すると聞き覚えのある声が俺の背後から聞こえてきた。

「真田先輩か。いや、人生つてのは思い通りにいかねえなって思ってたな。だがそれがいいってな」

真田明彦だ。どうやら先日怪我が完治したらしく、晴れて戦列に加わる事になった。

そんな真田は今日も元気にトレーニングと言う事で朝練のマラソンを行っているらしい。

いつつもトレーニングばっかしてっから検査入院だのなんだのと怪我の完治が長引いたんじゃないかと俺は思っている。

「そうだな、なんでも思い通りに行ってしまったらつまらんだろさ」

「まあなー。それで、真田先輩はなに？朝練？」

「ああ。今までは検査だ何だと体が鈍ってるからな。早く身体の調子を戻したい」

真田は俺の歩くペースに合わせるが、ランニングの最中なので足を止めないように忙しく足を動かしている。

何かそれだと申し訳ないので俺も走る事にした。

「勘を戻すにや実戦が一番だろ」

「それも一理あるが、勘を戻すのにまた怪我でもしたら笑えんからな……」

「成程な……じゃあなんだ、俺とスパリングでもする？こないだなんか言ってたっしょ」

「良いのか？本気で行かせてもらうが」

「そうじゃなきゃ意味無いんだろ？俺も武器が使えない状況での戦い方ってのは学んでおきたいからな。っても人間相手に効果がみられるかはわかんねーけど」

真田は部活とはいえボクシングでは無敗を誇っているらしい。

更にはシャドウと渡り合ってきた経験もあり、スパアの相手としてはもってこいだ。

俺の提案を快く了承した真田に感謝を示すと、真田は通学路とは別のルートを走るようで、そこで別れを告げた。

俺の何気ない一言が、あんな事になるとはこの時の俺が知る由もなかった。

・・・

放課後。俺は月光館学園でボクシング部の為に設けられたリングの上に立っている。

「……で、だ。何これ見世物じゃねーぞ何だこれ」

「……すまん。俺が復帰して最初のスパarringsの相手を外部の奴とすると言ったら周りが騒ぎたててな……」

たかだかスパarringsでどうしてこんなになって思ったが、そう言えば真田はあれだ。すげーモテる。

つまり外野でキヤイキヤイ言ってるのは真田のファンのなあれか？そして俺はどう見てもヒール役だ。

いや、別にブーイングとかはないけどな。皆真田の方ばかり。

「さあさあよつてらっしやいみてらっしやい！世紀の一戦を見逃したら末代までの恥となる事間違いない！

無敗の帝王・真田先輩の勝利に賭けるならこっちの箱に、無名のダークホース・里峰の勝利に賭けるならこっちの箱に金入れてくれ！名前と賭け金をこの名簿に記入してくれよ！」

「真田先輩に千円！」

「真田君に500円！」

「はらたいらさんに3千円！」

「真田に1万！」

そして伊織順平、貴様は何をしている？賭け事なんか先生にばれたらどうすんだよ！？

つてか吉岡アアア！！テメエ何1万とか抜かしてやがる！？

つーか誰も俺に賭ける奴なんかいな……あ、有里が俺に賭けやがった。

「……外野がやかましいのは済まんとしか言いようがないが……」

「まア、関係ねえわな。ボクシングのルールわかんねえけど蹴らなきゃ良いんだろ？」

「そうだな、とりあえずパンチしたらいいぞ」

「りょーかいりょーかい。こういうのつて3分間だよな？」

「いや、時間は無制限にしよう。相手は待つてはくれないだろうからな」

淡々と必要事項を確認すると、俺はリングの角を背もたれにし、簡単なストレッチを行う。

周囲では「アレ誰？」とか何とかヒソヒソと俺に指差している。

そりやまあ部員でも無い奴がリングに上がるなんてありえないもんな。それに拍車をかけるように伊織の宣伝だ。

賭けるような価値のある組み合わせなのかと思われたらしく、倍率としては俺はどう見ても大穴なんだが、ポツポツと俺に賭ける猛者が見られた。

…… よろしい、ならば革命だ。

あ、つつても開発された運動能力を使って戦う気は無い。

このスパ―ではシャドウとの戦いで培った技術のみで臨むつもりだ。

リミットを解除するとその反動で身体に大きな負担がかかる。

しかしそんな時にシャドウに襲われたとして、ごめんちょっと待ってなんて言えるはずもないからな。

つまり何と云うか、今の俺は平均的な高校生の身体能力に制限が為されている。

これは以前実験を行っていた際の名残みたいなもので、当時の俺は反乱防止の為に普段は身体能力を制限されていたのだが、10年前にその制限の制御が俺の手に渡ったのでこうして自分の意思で身体能力を上げる事も制限する事が出来る。

まあ制限なんて滅多に使わないのだが、そういうパターンも想定しておかなければいざという時に大変な事になるだろうしな。

「よし……それじゃあ行くぜ」

「ああ、いつでもかかってこい」

その言葉に従って俺は一気に真田へ向かって駆ける。

対する真田は俺を待ち構える形でどっしりと拳を前に突き出してきた。

「ッ………!!」

軽い挨拶代わりのジャブを数発。

対する真田は軽く首を左右に振る事でそれを避けつつ一歩前に踏み込んできた。

(インファイトかつ……！上等ッ！！)

コンマ一秒を争う世界。

意識を鋭利化させ、真田へと集中させる。

凝縮された時間の中で、更に拳を打ち合う。

今まで培ってきたシャドウとの戦いによって目だけは良くなっていた。

しかし今は運動神経を制限された状態にある為、思うように身体がついてこない。

「グッ……！！」

目と身体の時間差を縫うように、真田の拳は俺の腹を打ち抜いた。肺から空気が漏れそうだったがそれを無理矢理抑え込むと、俺はジャブで威嚇しながらバックステップで距離を取る。

真田は追撃する気配を見せない。と言うより身体の調子を確認めるように自身の拳を見つめていた。

数瞬の攻防の後に、束の間の休息。

この攻防は真田に軍配が上がったと言えよう。その様子に周囲は歓声を上げた。

俺はそんなギャラリに眉をひそめるが、それどころではない。今の一発がシャドウによるものなら、俺は死んでいただろう。

やはり、このスパリングを提案したのは正解だ。対シャドウの戦闘の想定は行えないが、身体に制限がかかっている状態……例え

ば怪我を負った時などを仮定した時、どのように身体を運用すべきか、この場を通して考えておく必要がある。

すると真田は「次は俺からだ」と言わんばかりに俺に向かって突き進んできた。

まずはグローブをつけた事で、どれほど普段とのリーチが変わったのか確認しなければ。

俺は迫りくる真田に対してジャブ、ストレートと言う基本的なワンスツを放つ。

それに対して真田は俺の拳を容易く払うと、先程と同様に俺の懐に入り込みインファイトの体勢を取った。

このままでは先のやり取りの再現になるだけだ。

俺は両腕を固く閉ざすと真田の攻撃を腕と肩で受け止めるべく歯を食いしばる。

その防御を開こうと、真田は執拗に拳を振るってきた。

しかしいつまでも亀のように腕の中にひきこもっていたのでは埒が明かない。

ならどうするかと言うと、埒を明けるしかないだろう。

俺は真田の規則正しいワンスツのタイミングを測ると、真田が先程行ったパリングと言うのだろうか、右ストレートを拳で払うと一旦距離を置いた。

(チツ……やっぱ一人で影時間に出歩いただけあって、かなり強いな……)

……いくら真田にブランクがあるとはいえ、このリングは真田の

フィールド
領域だ。

対する俺は、ボクシングと言うよりは拳闘と言った方が正しい気がする程に殴れば良いんだよねって事しか知らない素人。

ボクシングと言う技術は、人を殴る際に両者を守る為のグローブを武器化する程に進んでいた。

例えば拳で殴るのとグローブをつけて殴るのでは当然リーチも変わってくる。そのわずかな差すら利用してくるのがボクシングだ。

ルールに縛られた中で、如何に効率よく、如何に素早く、如何に的確に相手を打ちのめすか。相手を打倒すると言う目的の為に、グローブと言うルールすら力へと昇華させたのだ。

そんな技術を習得した真田の動きは何処までも合理化されており、何一つ無駄が無い。

対する俺は異形共と渡り合ってきた経験から来る直感に頼って真田の攻撃をなんとかしのいできた。

無駄が無い、と言う事はある程度予測が出来ると言い換えても良い。

先程俺が真田の猛攻から脱出出来たのは、基本的に忠実なワンツーンによるラッシュだったからだ。

真田明彦と言うボクシングの技術の塊を前にした俺は、小さく笑った。

(感謝するぜ、真田先輩。俺はまだ強くなれる)

身体を鍛えるなら、実戦に勝るモノは無いと考えていた俺だったが、競技と言うのも悪くないと考えを改めるのであった。

……なんて余裕綽々な思考をする暇など無い。
距離を取ったとはいえ真田はすぐにそれを縮めてくる。

俺はアウトボクシングのスタイルでヒット&アウエーでひたすら
距離を置き続けた。

そんな中でも俺は真田の観察を続けている。

例えば、俺がたった今真田の顔をめがけて放った右フック。
顎を捕えたと思ったたら暖簾に腕押しのような感触で、どうやら当
たる瞬間に首を捻って受け流したようだ。

今までの俺なら身体能力にモノを言わせて無理矢理身体を横にず
らして避けるだろう。

対する真田は非常にスマートで無駄のない避け方だ。

しかし見とれている暇など無い。俺は足をスイッチさせ左ストレ
ートを放つ。

その左を真田はUの字を描くように上半身を動かし回避した。そ
してその左を拳で払い、再び俺の懐に飛び込んでくる。

(そのパターンは見飽きたぜっ……!!)

ワンツーに合わせてカウンターをぶち込んでやる。

俺は真田のジャブを左腕で受け止めると、右手に力を込め真田の
ストレートに合わせて俺も右ストレートを放った。

しかし、その右は空を切った。

代わりに俺の顎に衝撃が走り、脳が一気に揺さぶられた。

「ッ……!!」

「何故俺が愚直に基本を繰り返したと思う？」

つまりは、網を張っていたと言う事だ。

俺はまんまとそれに誘い込まれ、こうして痛烈な一撃を受けたと言っ訳だ。

「チツ……何だよ滅茶苦茶元気じゃねえか、だったらもっと早く戦列に戻れたんじゃないかねえのか？」

「俺としてもそうしたかったんだがな、美鶴の奴が……」

ああ、成程な。あの人結構心配性なところあるし。

軽口を叩きながらも息を整えていると、真田は意外そうな顔をしていた。

「綺麗に決まったと思ったんだがな」

「打たれ強さには定評のある俺だからな。俺の中では」

シャドウ達と殺し殺されを繰り返してきた俺は、当然怪我する事も多々あった。

そんな幾千幾万の戦闘の果てに得た打たれ強さと、逃げ足は誰にも負けない自身がある。

逃げ足はあまり誇れるものではないが、生き残る上で逃げ足と言うのは危機察知能力の次に重要なファクターだ。

真田は納得したような表情を浮かべ、それはすぐに笑みに切り替わった。

「こうして俺とボクシングで渡り合える奴はそういないからな！
どうだ、これからもたまにこうしてスパーリングしないか！？」

「はん！そりゃ愉快で素敵な提案だ！皆の憧れ真田先輩のお誘いとあつちや断れば夜中に後ろから刺されかねえな！」

俺はくつくつと笑うと、足を踏みぬき真田の射程圏内へと足を踏み込む。

さあ、第二ラウンドの開始だ。

・・・

俺は右ストレートを放ったが、真田はそれを受け止めようとせず、上半身を後ろへと反らす事で俺の右手が届かない所まで身体を後逸させた。

それを見た俺は感心したように息をつく、真田は嬉々として今の動きに関して口を開いた。

「さっきのがスウエーバックと言ってな、上体を後ろにそらす事で相手の拳を回避したり、ダメージを軽減させたりするんだ！」

「へえ！だったらこうやって避けるのは何だよ！？」

真田は説明し終えるのと同時に俺へと突き進むとジャブを連続で放ち、俺が攻撃をする為の隙を作らせないようにする。

対して俺はそのジャブを上体を上下左右へと動かし回避した。

これも先程真田が使っていた技術で、回避するだけなら足を動かす必要は無いと言う事を教わったと言えよう。

「それはウィービングだ！俺がやったのを見ただけでそれを使うなんて凄いな！！」

「そーかそーか！！中々為になるお話ありがとよ！！」

真田の技術を俺が模倣する事で、スパーリングを始めた当初よりも今の方がボクシングらしい動きになってきた。

体力テストの時とかあんまり運動能力発揮しすぎて目立つのは嫌とか言ってた気がするけど、楽しいんだからどうしようもない。

俺が楽しむ為に目立ってしまったと言うのならそれはそれとして受け入れようじゃないか。

拳を払い、受け流し、受け止める。

目まぐるしく攻防を入れ替わりさせた所で真田は俺から距離を取ると、楽しげに笑った。

「どうだ里峰！ボクシングは！楽しいだろう！！」

「ああそーだな！！たまにやこう言うのも悪かねえな！」

当初の目的……真田は勘を取り戻す事、俺は身体に制限がかかっている場合の戦闘について考える事。それを完全に忘れた俺は、ただただ殴り合いに没頭した。

真田は真田で随分と鬱憤がたまっていたらしく、今まで見た事無い程生き生きとした表情を浮かべている。

そんな光り輝くと表現しても良いだろう真田明彦を見る事が出来た真田ファンの連中はなんか喜びの余りが卒倒していた。

ボクシング部員は真田の技術を盗むべく練習を止めスパーリングに注視し、他の観客も生のボクシングに歓声を上げていた。

何だろうこれ。

……何だろう、これ。

最初は真田の一挙手一投足に歓声を上げていた生徒達だが、何か俺の方にもいつの間にか応援がついていた。と言いか長谷川さん、あなたこんなところで何してんですか？

俺の視線に気づいたらしい長谷川さんはのんびりと手を振っていた。何と言つマイペース。

しかし、物事には終わりが付き物で、この楽しい殴り合いにも終幕が近づいてきていた。

「……君達は、一体何をしているんだ？」

それは氷のように冷たい言葉だった。

一瞬にして興奮の熱が恐怖の氷点下まで冷める。

その声の主は、生徒達の風紀と学校の規律を守るべく行動している生徒会の会長。

「……す、すぱーりんぐでし」

噛んだ。あまりの威圧感に、噛んだ。

「ほう、賭け試合をするのがスパーリングだと、そう言うのか？ 明彦」

「い、いやな、それは伊織の奴が……」

「いい！？お、俺っすか！？」

急に話を振られた伊織順平はあたふたしている。確かにただスパリングするだけなら問題は無かっただろう。しかし、こんなに騒ぎ立てた上に賭けまで行っているのは風紀的にあれだったと言う事か。

「とりあえず、賭けなど許さん。賭け金はそれぞれ生徒達に返却。野次馬は解散。ボクシング部の諸君は引き続き部活動に励んでくれ。」

明彦に里峰、伊織は後で生徒会室に来るように。後、お手数ですが吉岡教諭も一緒に」

「……はい」

有里は何とひっそりと消えていた。なんて奴だ。

名簿からもきっちり名前を消し、賭け金も知らない間に回収しようだ。

全く、ちゃっかりしてるなマジで。

軽く汗を拭くと、廊下の窓からはオレンジの夕焼けが眼に映った。その後、オレンジが黒に染まるまでこっそりと絞られたの言うまでも無い。

殴り合いと夕の空（後書き）

真田さん復活です。

そろそろあれだ、あのあれです。あれです、あれが始まります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0597z/>

転生したと思ったらペルソナ

2012年1月9日02時47分発行